

沖縄市文化財調査報告書第20集

室川貝塚

— 沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書 —

1997年

沖縄市教育委員会

正誤表

室川貝塚

— 沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書 —

沖縄市文化財調査報告書第20集

グラビア

- 写真9下 誤 ↓ 崖下地区トレンチ⑥の黒褐色黒貝土礫層・・・
 正 ↓ 崖下地区トレンチ⑥の黒褐色混貝土礫層・・・

目次

- 誤 図版17 第2群肥厚口縁グループ(有文)⑨……………78
 正 図版17 第2群肥厚口縁グループ(有文)……………78
 誤 図版28 板版第4群フェンサ下層式・第5群フ……………89
 正 図版28 第4群フェンサ下層式・第5群フェン……………89

本文

- P. 16 3行 誤 沖縄市役所の「総合庁舎建設」に伴うものである。
 正 沖縄市役所の「総合庁舎建設」に伴うものである。

- P. 19 第4図



- P. 34 トレンチ⑥土器出土表

	表土覆土層	赤褐色混貝土礫層
第1群土器	3	↓
第2群土器	8	赤褐色混貝土礫層

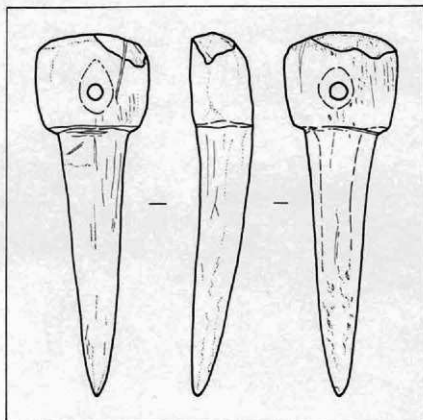
- P. 36 7行 誤 ……から下記の母タイプに分類される。
 正 ……から下記の8タイプに分類される。

- 10～11行 誤 覆土層で面縄前庭口の可能性がある凸帯文2点得られているだけで、この母タイプには含めていない。室川下層式と面縄前庭式を含めると并タイプになる。
 正 覆土層で面縄前庭式の可能性がある凸帯文2点得られているだけで、この8タイプには含めていない。室川下層式と面縄前庭式を含めると10タイプになる。

- P. 38 28行 誤 綾杉文・羽状文帯と縞歯状文の両方が施される例
 正 綾杉文・羽状文と縞歯状文の両方が施される例
 P. 42 30行文末禁則処理ミス ……持ち込まれた土器と判別される。¹⁾
 31行文頭 16を見ると口径が……………
 P. 43 15行 誤 ……数点が出土しているだけ□ある。
 正 ……数点が出土しているだけである。
 20行 ……観察される。図器24～28の底面に
 ……観察される。図版26～24～28の底面に
 P. 44 7行 誤 ……多くは、研磨痕加工痕も見られ□ないよう
 正 ……多くは、研磨痕加工痕も見られないよう
 P. 52 19行 誤 ……サラサバティと見られる貝を加工し□
 正 ……サラサバティと見られる貝を加工して

参考文献

- P. 60 下から2行 誤 ……琉球大学邦文学部紀要社会篇
 正 ……琉球大学法文学部紀要社会篇



図版 1

ジュゴン肋骨製品

写真・1





㊦ 発掘調査中の馬上原遺跡と室川貝塚（リモコンヘリによる空撮）

㊧ 沖縄市新庁舎完成後の室川貝塚のようす（東方より）



⇨ 室川貝塚歴史公園近景



⇨ 室川貝塚歴史公園に設置された陶器製説明板





崖下地区トレンチ⑥の層序



写真・4

崖下地区トレンチ⑤の層序



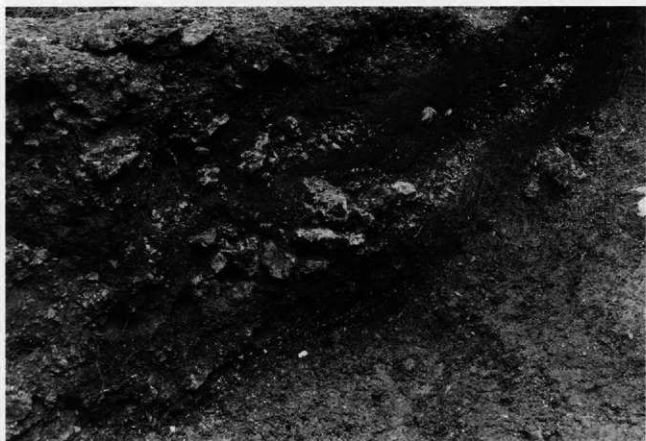
崖下地区トレンチ⑧の層序



⇨ 発掘終了直前の崖下地区トレンチ⑦



崖下地区トレンチ⑦の層序
⇩





∩ 崖下地区トレンチ⑧の層序

∪ 崖下地区トレンチ⑩の層序

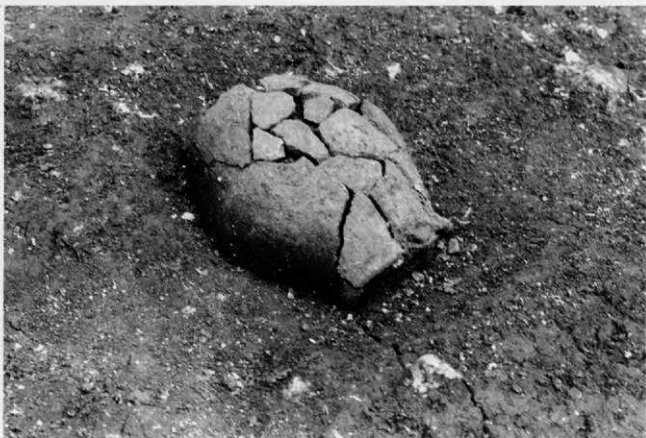




① 宇佐派式土器出土状況（崖下地区⑥の赤褐色土層）

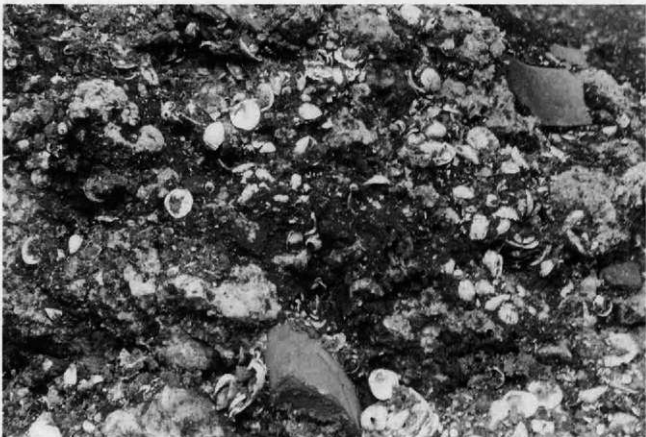
② シュゴン製品出土状況（崖下地区⑥の赤褐色土層）





△ 宇佐浜式土器出土状況（崖下地区トレンチ⑥の黒褐色混貝土礫層）

▽ 崖下地区トレンチ⑥の黒褐色黒貝土礫層貝集中部の状況





△ 崖下地区の発掘状況（崖に直交させて設定したトレンチ）

▽ 厚く堆積した崖下地区の層のようす（崖下地区トレンチ⑧）





発掘作業員の方々の休憩光景



写真・11 発掘中に崖下地区を訪れた安慶田小学校の生徒たち



合 2層以上もある大岩を人力で割り片付けるようす
 雨で崩れ落ちた石灰岩が一輪車を直撃

室川貝塚

— 沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書 —

1997年

沖縄市教育委員会

はじめに

本報告書は沖縄市総合庁舎の建設に伴い1989年度から1990年度に行った「室川貝塚」崖下地区の記録保存発掘調査の成果を記したものです。

室川貝塚は1974年の発見以来、1978年まで4年間の歳月をかけて沖縄国際大学考古学研究室による5次の発掘調査が実施された経過があり、出土遺物の量や規模からみても、また層序から推ても沖縄県考古学編年の指標となる屈指の貝塚として学史上重要な位置づけを与えられています。

御承知のように、貝塚調査によって得られる遺物や遺構は、私たちの祖先の暮らしと文化の原点を探る生きた歴史資料として重要な価値をもち、その活用の望ましいあり方が郷土愛を培う起点になるものと信じております。

このようなことを念頭において、室川貝塚の中心部が保存され「室川貝塚歴史公園」として史跡整備されました事は、関係者一同にとって望外の喜びとするところであります。

本書の発刊が調査の報告として目的を達成し、これからの文化財愛護思想の形成と、更に学術に資する一助になればと願うものであります。

おわりに、本発掘調査に際しご苦勞を共にされた多くの皆様に厚くお礼を申し上げますとともに、今後の変わらぬご協力をお願いし序といたします。

1996年9月

沖縄市教育委員会
教育長 當眞哲雄

例言

- 1 本書は沖縄市総合庁舎建設に伴う室川貝塚崖下地区の記録保存発掘調査報告書です。
- 2 調査は沖縄市教育委員会が沖縄市役所の依頼を受けて実施しました。
- 3 調査員及び資料整理員

[調査員]

比嘉賀盛(郷土博物館嘱託/現沖縄市文化財調査審議会委員)
宮里信勇(郷土博物館嘱託/現浦添市教育委員会文化課)
中村直樹(郷土博物館非常勤)
宮城利旭(郷土博物館文化財係長)

[資料整理・実測・報告書作成]

比嘉賀盛・宮城利旭・鳥袋広美・棚原干栄美・稲嶺和江・波平裕子
新屋良博・玉那覇知樹・仲本千秋・比嘉つかさ・新屋真・上江洲照美
上地千賀子・嘉陽律子・豊里友枝

※表紙題字 吉浜靖起

※指導及び総括 比嘉賀盛

- 4 調査及び本書発刊に際し下記の機関の方々の絶大なご協力と御教示を頂きました。
記して謝意を表します。(敬称略)

[考古学調査]

高宮廣衛(沖縄国際大学教授)沖縄国際大学考古学研究室
金武正紀(那覇市教育委員会文化課)
鳥袋春美(沖縄国際大学考古学研究室卒業生)
沖縄市文化財調査審議会
沖縄県教育庁文化課

[調整]

沖縄市役所総務部総合庁舎建設室

[石器と石材の石質鑑定]

大城逸郎(北谷高等学校)

[貝の同定]

知念盛俊(佐敷町文化財保護委員)

[獣魚骨の鑑定]

金子浩昌(早稲田大学考古学研究室)

[発掘作業員及び庶務]

沖縄市シルバー人材センター(約40名の方々)

福島宏義(沖縄市シルバー人材センター)

御来訪者は下記の方々。(なお、機関名で表示したのは次々と多数の方が見学に来られましたので、紙面の都合で複数の見学者の場合、失礼ながらも個人名は省略しました。)

沖縄県考古学会(高元政秀会長並びに学兄諸氏)／名護市教育委員会

読谷村教育委員会／沖縄国際大学考古学研究会／安慶田小学校

室川小学校／コザ中学校／琉球新報社／沖縄タイムス社

- 5 本書に記載した地図は、国土地理院発行の図面を複製したものと、総合庁舎作成の図面を修正して使用しました。
- 6 出土遺物・調査資料は沖縄市立郷土博物館で保管及び展示しています。

室川貝塚歴史公園の史跡整備事業

室川貝塚一帯は1974年の貝塚発見後、沖縄国際大学が5回の学術調査、さらに当教育委員会による範囲確認調査と記録保存調査が9回も行われてきた。これらの諸調査の中で最も特筆すべき調査は、沖縄国際大学が行った最初の発掘調査である。このとき出土した新発見の土器は、後に室川下層式と型式設定された。この「室川下層式土器」の発見は、その後に読谷村渡久地東原遺跡発掘のきっかけとなり、更に沖縄県考古学の土器編年の指標となった。このように画期的な業績を提供した場所が、その後の調査によって最も保存状態の良い貝塚の「本体部」であることが明らかとなった(以下、本体部)。

このように画期的な成果を提供した本体部は、新庁舎建設による取扱に際して「保存」と「記録保存調査」の何れかで、長期間にわたって協議を重ねられ、さらに遺跡の全容を把握するための調査が続けられてきた。最終的に「本体部」を「室川貝塚歴史公園」として遺跡保存の同意が得られた。

歴史整備事業は1993年度に下記の点を考慮し行われた。

- ① 石敷の舗装圍路、花壇、トイレ、下水道などの公園施設は、遺物包含層と遺構が保存されている本体部を外して配置。
- ② 本体部は1m前後盛土してコウライ芝を植え、周囲は低木類を配置。
- ③ 旧地形の目印となる崖地形・石積・石灰岩転石・ハマイスビワなどを残した。

史跡整備事業は新庁舎が完成後に実施。(面積3,761.62㎡予算108,257,000円)。翌年度に2基の説明板、予算2,551,000円を設置して竣工した。

目次

第1章 沖縄市の位置と環境	14
沖縄市の海岸線について	14
室川貝塚と周辺遺跡	14
第2章 発掘現場の状況と発掘方法について	21
発掘調査前の崖下地区の状況	21
遺物包含層の状況と安全対策など	21
グリッド設定	21
第3章 層序	23
表土と覆土層(一括除去)	23
トレンチ⑤～⑥と⑧～⑩の層序	23
トレンチ④～⑥の層序	23
表土・覆土	23
黒色土層	23
赤褐色土層	23
赤褐色混貝土礫層	24
黒褐色混貝土礫層	24
琉球石灰岩礫層(コーラル層)	24
トレンチ⑧～⑩の層序	24
表土・覆土	24
黒色土層	24
茶褐色混礫土層	24
石灰岩礫層(コーラル層)	31
茶褐色混礫土層下部	31
暗褐色混貝土礫層	31
※地滑りについて	31
第4章 出土遺物	32
1. 土器	32

空白期	32
分類別の出土状況	32
各別式の胎土・混和材について	36
タイプ(イ)室川下層式	36
タイプ(ロ)面縄前庭式	36
タイプ(ハ)伊波式・萩堂式・大山式	36
タイプ(ニ)大山・カヤウチバンタ式	36
タイプ(ホ)宇佐浜式	37
タイプ(ヘ)面縄西洞式などの肥厚口縁土器グループ	37
タイプ(ト)仲原式・宇佐浜式	37
タイプ(チ)仲原式	37
タイプ(リ)フェンサ下層式	37
タイプ(ス)フェンサ上層式	37
第1群 伊波・萩堂式・大山式土器	38
A:上下二段の文様帯	38
B:上下二段の文様帯+綾杉文・鋸歯状文など	38
綾杉文・羽状文などのグループ	38
鋸歯状文のグループ	38
C:口縁に平行な文様(列点・沈線・押捺刻文等)だけの例	39
山形頂部や突起などについて	39
無文土器・壺形・凸帯文・壺形・底部(図版9-1~28)	39
その他の土器(面縄前庭式・宇宿下層式など)	39
第2群肥厚口縁グループ	40
カヤウチバンタ式	40
面縄西洞式?	40
喜念I式など	40
宇佐浜式	41
その他の肥厚口縁土器	41
第2群の壺形土器	41
第2群の底部	41
第3群仲原式土器	42
弥生土器?	42

第4群フェンサ下層式土器	43
第5群フェンサ上層式土器	43
2. 石器	44
石材	44
石器	44
A: 石斧類	44
扁平片刃石斧	44
小型磨製石斧	46
厚手の長方形	46
大型石斧	46
柱状片刃石斧?	46
その他・撥形あるいは左右非対称の石斧	46
千枚岩製薄手利器と千枚岩薄片石器	47
打製石斧	47
B: その他の石器(敲打器・磨石・石皿・砥石など)	47
凹石	47
磨石	47
敲打器(たたき石)	52
石皿・砥石類	52
3. 貝製品	52
4. 骨製品	55
ジュゴン製品	55
イノシシ製品	55
その他	59
5. 自然遺物	59
貝類	59
おわりに	59
参考文献	60

表・グラフ

崖下地区表土覆土(一括)・トレンチ④⑤の土器出土表とグラフ	33
トレンチ⑥・トレンチ⑧の土器出土表とグラフ	34
トレンチ⑨・トレンチ⑩の土器出土表とグラフ	35

一覧表

石斧法量・出土と敲打器・磨石重量の一覧表	45
石器(石質)一覧表	48
貝製品出土と骨製品出土の一覧表	53
崖下地区出土貝種一覧表	56

図

第1図 沖縄市の位置	15
第2図 室川貝塚周辺の主要遺跡分布図	16
第3図 室川貝塚一帯の旧状図	17
第4図 沖縄市新庁舎完成後の室川貝塚一帯平面図	19
第5図 崖下地区発掘グリッド配置図	22
第6図 トレンチ⑤層序	22
第7図 トレンチ⑥層序	25
第8図 トレンチ⑧層序	27
第9図 トレンチ⑩層序	29

実測図版

図版 1 ジュゴン肋骨製品	グラビア
図版 2 第1群伊波式土器	63
図版 3 第1群伊波式土器	64
図版 4 第1群伊波式土器	65
図版 5 第1群伊波式・萩堂式土器・大山式土器	66
図版 6 第1群伊波式・萩堂式(山形口縁・突起)	67
図版 7 第1群伊波～大山式・その他・面縄前庭式・宇宿下層式	68
図版 8 第1群底部(伊波式～大山式土器)	69
図版 9 第1群無文土器等・第2群カヤウチバンタ式土器	70
図版10 第2群肥厚口縁グループ(カヤウチバンタ式・その他)	71
図版11 第2群肥厚口縁グループ(面縄西洞式等)	72
図版12 第2群肥厚口縁グループ(面縄西洞式・喜念I式等)	73

図版13 第2群肥厚口縁グループ(宇佐浜式)	74
図版14 第2群肥厚口縁グループ(宇佐浜式)	75
図版15 第2群肥厚口縁グループ(宇佐浜式)	76
図版16 第2群肥厚口縁グループ(有文)	77
図版17 第2群肥厚口縁グループ(有文)78	78
図版18 第2群肥厚口縁グループ(無文)	79
図版19 第2群肥厚口縁グループと見られる土器	80
図版20 第2群肥厚口縁グループと見られる土器・壺形土器(肥厚口縁期)	81
図版21 第1群大山式～第2群の底部	82
図版22 第3群仲原式土器	83
図版23 第3群仲原式土器(外耳片など)	84
図版24 第2群～第3群の壺形土器と弥生土器	85
図版25 第2群～第3群の底部	86
図版26 第4群フェンサ下層式	87
図版27 第4群フェンサ下層式底部	88
図版28 図版第4群フェンサ下層式・第5群フェンサ上層式	89
図版29 磨製石斧	90
図版30 磨製石斧	91
図版31 薄手利器・磨製石斧	92
図版32 大形石斧・柱状片刃石斧?	93
図版33 打製石斧	94
図版34 打製石斧	95
図版35 凹石	96
図版36 敲打器・磨石	97
図版37 磨石	98
図版38 磨石・砥石or石皿	99
図版39 磨石・砥石or石皿・その他	100
図版40 磨石・砥石or石皿	101
図版41 砥石・砥石or石皿	102
図版42 ジュゴン肋骨製品(1～7)・貝製品(8～12)	103
図版43 ホオジロザメ科(1・2)・クロダイ類(17)・イノシシ	104
図版44 イノシシ(骨・歯)	105
図版45 イノシシ(尺骨)	106
図版46 イノシシ(尺骨)	107
図版47 イノシシ(尺骨)	108

グラビア

写真・1 ジュゴン肋骨製品

写真・2 上 発掘調査中の馬上原遺跡と室川貝塚
下 沖縄市新庁舎完成後の室川貝塚のようす

写真・3 上 室川貝塚歴史公園近景
下 室川貝塚歴史公園に設置された陶器製説明板

写真・4 上 崖下地区トレンチ⑥の層序
下 崖下地区トレンチ⑤の層序

写真・5 上 崖下地区トレンチ⑧の層序
下 崖下地区トレンチ⑨の完掘状況

写真・6 上 発掘終了直前の崖下地区トレンチ⑦
下 崖下地区トレンチ⑦の層序

写真・7 上 崖下地区トレンチ⑧の層序
下 崖下地区トレンチ⑩の層序

写真・8 上 宇佐浜式土器出土状況(崖下地区⑥の赤褐色土層)
下 ジュゴン製品出土状況(崖下地区⑥の赤褐色土層)

写真・9 上 宇佐浜式土器出土状況(崖下地区⑥の黒褐色泥貝土礫層)
下 崖下地区トレンチ⑥の黒褐色黒貝土礫層貝集中部の状況

写真・10 上 崖下地区の発掘状況(崖に直交させて設定したトレンチ)
下 厚く堆積した崖下地区の層のようす(崖下地区トレンチ⑧)

写真・11 上 発掘作業員の方々の休憩光景
下 発掘中に崖下地区を訪れた安慶田小学校の生徒たち

写真・12 上 2m以上もある大岩を人力で割り片付けるようす
下 雨で崩れ落ちた石灰岩が一輪車を直撃

土 器

写真・13 第1群伊波式	111
写真・14 第1群伊波式	112
写真・15 第1群伊波式	113
写真・16 第1群伊波式・萩堂式・大山式	114
写真・17 第1群伊波式・萩堂式(山形口縁・突起)	115
写真・18 第1群伊波～大山式・その他・面縄前庭式・宇宿下層式	116
写真・19 第1群無文土器等・第2群カヤウチバンタ式土器	117
写真・20 第2群肥厚口縁グループ(カヤウチバンタ式・その他)	118
写真・21 第2群肥厚口縁グループ(面縄西洞式等)	119
写真・22 第2群肥厚口縁グループ(面縄西洞式・喜念I式等)	120
写真・23 第2群肥厚口縁グループ(宇佐浜式)	121
写真・24 第2群肥厚口縁グループ(宇佐浜式)	122
写真・25 第2群肥厚口縁グループ(宇佐浜式)	123
写真・26 第2群肥厚口縁グループ	124
写真・27 第2群肥厚口縁グループ(有文)	125
写真・28 第2群肥厚口縁グループ(無文)	126
写真・29 第2群肥厚口縁グループと見られる土器	127
写真・30 第2群肥厚口縁グループと見られる土器・壺形土器(肥厚口縁期)	128
写真・31 第1群底部(上)・第2群カヤウチバンタ式等の底部(下)底部	129
写真・32 第3群仲原式土器	130
写真・33 第3群仲原式土器(外耳片など)	131
写真・34 第2群～第3群の壺形土器と弥生土器	132
写真・35 第2群～第3群の底部	133
写真・36 第2群～第3群の底部	134
写真・37 第2群～第3群の底部	135
写真・38 第4群フェンサ下層式	136
写真・39 第4群フェンサ下層式・第5群フェンサ上層式	137

石 器

写真・40 磨製石斧	138
写真・41 磨製石斧	139
写真・42 磨製石斧	140
写真・43 磨製石斧	141
写真・44 薄手利器・磨製石斧	142

写真・45 大形石斧・柱状片刃石斧?	143
写真・46 打製石斧	144
写真・47 打製石斧	145
写真・48 打製石斧	146
写真・49 打製石斧	147
写真・50 凹石	148
写真・51 凹石	149
写真・52 敲打器・磨石	150
写真・53 敲打器・磨石	151
写真・54 磨石	152
写真・55 磨石	153
写真・56 磨石	154
写真・57 磨石・砥石or石皿	155
写真・58 砥石or石皿	156
写真・59 砥石or石皿	157
写真・60 磨石・砥石or石皿	158
写真・61 磨石・砥石or石皿	159
写真・62 ジュゴン肋骨製品	160
写真・63 貝製品	161

骨製品

写真・64 ホオジロザメ科・クロダイ類・イノシシ製品	162
写真・65 イノシシ(骨・歯)	163
写真・66 イノシシ(尺骨)	164
写真・67 イノシシ(尺骨)	165
写真・68 イノシシ(尺骨)	166

沖縄市文化財調査報告書第20集

室川貝塚

— 沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書 —

1997年

沖縄市教育委員会

第1章 沖縄市の位置と環境

沖縄市は沖縄本島の中央部に位置し、自然的にも北部地域と中南部地域の特徴を同時に有する。自然環境の中でも遺跡の立地に大きく関係する地質から見ると、地質は国頭累帯と島尻累帯の境目に立地する。本市の地質を細かく見ると、北部・中央部・南部・中城湾沿いの4地区に分けられる。

市北部の字白川～嶽山原(本市の最標高201m)は、本島北部の千枚岩類と段丘堆積物の南限になる。この一帯の土壤は千枚岩類が風化した国頭マージが堆積している。この地域の遺跡及び集落としては石城原遺跡(グスク時代)・古島(首里王府時代～明治初期の集落)・屋取集落(明治の時代)などが点在する。

市中央部では、胡屋から知花周辺が砂質石灰岩と琉球石灰岩地域で島尻マージが堆積する。市内の遺跡は室川貝塚を筆頭に、この島尻マージ土壤の地域に集中して分布する。

市南部の久保田から宮里や中城湾に面する与儀～古謝にかけては、泥岩層(クチャ)が広がる。この地域では部分的に砂岩層(ニービ)が見られる。中城湾沿いの斜面と丘陵には、グスク時代～近世にかけての古島などの遺跡が分布する。

中城湾沿いの低地は海浜砂層が堆積する。1950年代末頃から、埋め立てによる陸化が年々進行中で諸開発も盛んに行われ景観の変化が著しい。

沖縄市の海岸線について

古代の海岸線は現状より、約2kmほど内陸側だったと思われる。沖縄市における海と関係する伝承について述べる。

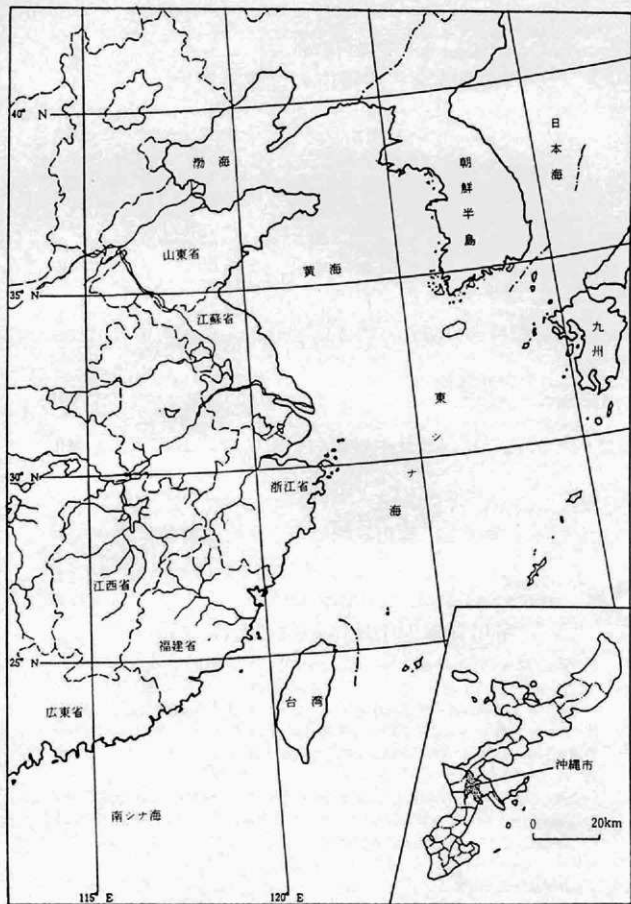
古老の語るところによると「字大里の古島(フルジマ)は、現在の自治公民館から約100m西側の斜面に位置していた。碁盤の目のように整然とした井然型の現集落は、昔は海だった所である」と伝えられている。これを裏付けるように、住宅建設の基礎掘り工事現場などで、1.5m前後の深さから貝殻・サンゴ片を多量に含む海砂の出土が確認されている。

さらに「自治公民館北側と国道329号線高原交差点近くのウグングームイ(拝所)の2ヶ所は、船着場跡であった」とも語り継がれている。隣集落の字高原でも、これを裏付ける話が聞かれる。国道329号線沿いの沖縄サンクロレラ製造会社近くには、タクトウイガマ(蛸取り洞穴)と称する伝承地がある。かつての沖縄市の海岸は、遠浅の内湾を形成していたと思われる。

与儀～古謝にかけての低地は、自然の幸に依存して生活していた古代の人々にとって恰好の魚貝類採集地であったと推測される。室川貝塚出土の自然遺物からもそれが窺われる。

室川貝塚と周辺遺跡

市内には壊滅したのも含めると、室川貝塚の他に旧石器時代～グスク時代の遺跡が19ヶ所分布する。各遺跡の説明は省略し、室川貝塚から半径10km圏に分布する隣市町村の主な遺跡を第2図に示した。



第1図 沖縄市の位置



第2図 室川貝塚周辺の主要遺跡分布図

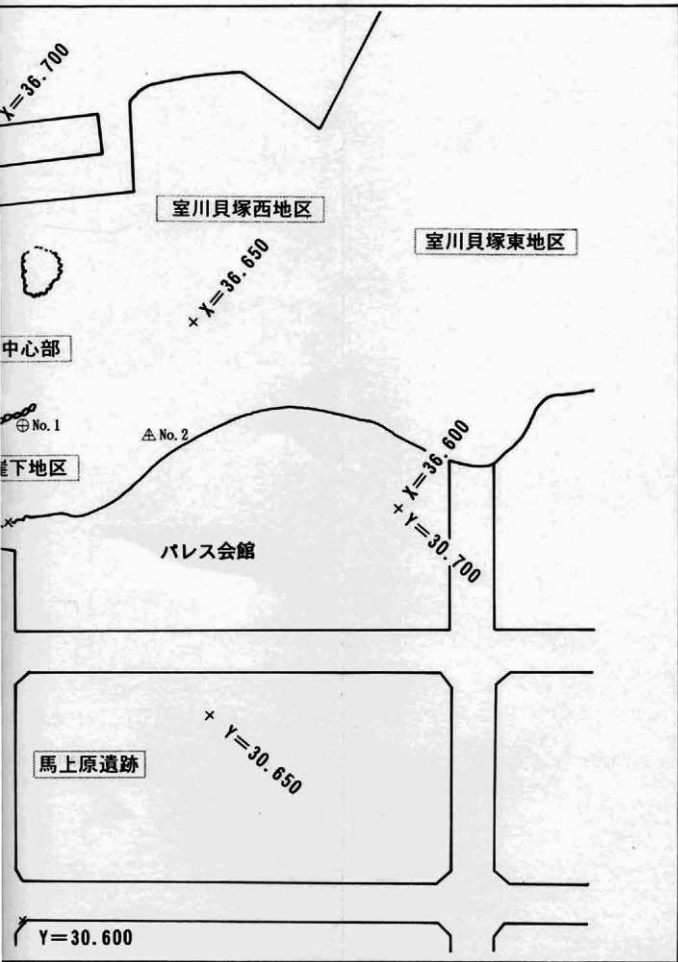
室川貝塚崖下地区の位置と調査経過

沖縄市室川1丁目128番地と仲宗根町39番地の崖下斜面(海拔約100m)に位置する。階段状の地形をなし、直下に室川貝塚本体部、背後の崖上に馬上原遺跡が立地する。

発掘調査は沖縄市役所の「総合庁舎建設」に伴うものである。調査前の室川貝塚一帯は雑木・立木などの茂る原野であった。室川貝塚の調査の前に、付近の植物目録作成の調査をおこなった。その後、範囲確認調査を1988年12月1日～1989年8月30日まで実施した。

遺跡の取扱については、総合庁舎建設室と調整及び協議を頻繁に重ね、最終的に室川貝塚中心部(本体部)を歴史公園として保存する同意が得られた。それ以外の当地区・東西地区が、記録保存発掘調査の対象となった。また、中心部を保存するために庁舎配置を大幅に南側へずらした後に、馬上原遺跡の存在が確認され、同遺跡も記録保存調査の対象となった。

今回報告する崖下地区の記録保存調査は、面積240㎡(10m×24m)。期間1989年12月4日～1990年7月23日まで実施した。層の堆積状況などについては、層序と出土遺物の項で述べる。

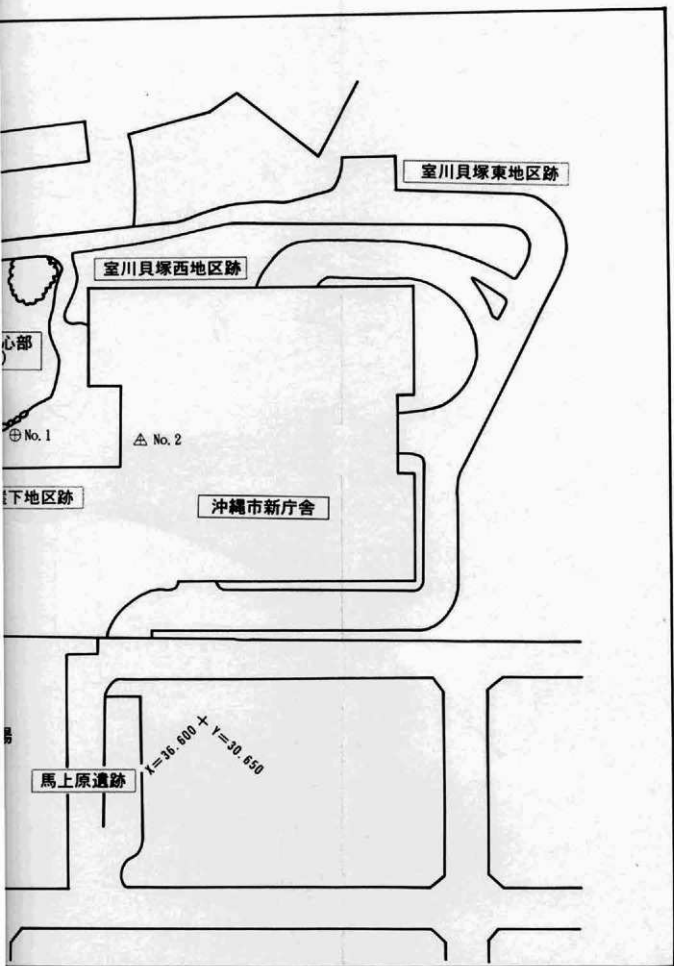


第一帯の旧状図

〔凡例〕 ⊕ No. 1 室川貝塚崖下地区発掘時の基準点
 △ No. 2 " "



第3図 室川貝塚



後の室川貝塚一帯平面図

〔凡例〕 室川貝塚（歴史公園）の説明板 ⊕ ⊕
 ⊕ No. 1 室川貝塚崖下地区発掘時の基準点
 △ No. 2 “



第4図 沖縄市新庁舎完成

第2章 発掘現場の状況と発掘方法について

発掘調査前の崖下地区の状況

発掘調査前の崖下地区は、崖上から投げ捨てられたゴミや建築廃材が2m以上も積もっていた。調査を開始する前に、これらのゴミなどを撤去することにした。作業を始めるとコンクリートの標柱や鉄条網、さらには使い余った生コンクリートの固まったもの等が次々に出土した。

一通りゴミを取り除くと段々畑が現れた。この段々畑は戦後のもので、畑を作るときに石を土中に埋めるなどの作業が行われている状況が見られた。この段階で試掘を行ってみると、まだ崖上からの土砂や畑土などの覆土が堆積している。覆土層を残して観察畦とすると、崩落の危険が予想された。発掘作業の安全を確保するために、発掘範囲の覆土を一挙に除去することにした。この覆土は予想以上の厚さで、最も厚い部分では2mを超えた。

覆土の中には大小の石灰岩があり、最大のもは直径2m以上。クレーンなどの機械を搬入することもできないので、3~5本のクサビを打ち込んで割り運び出す作業が続いた。雨天が続くと、壁面や崖面で崩落が発生し、土砂運搬の一輪車が転石で押し潰されることもあった。覆土層の下部からは、崖上に米軍基地があったころの遺物が出土した。

遺物包含層の状況と安全対策など

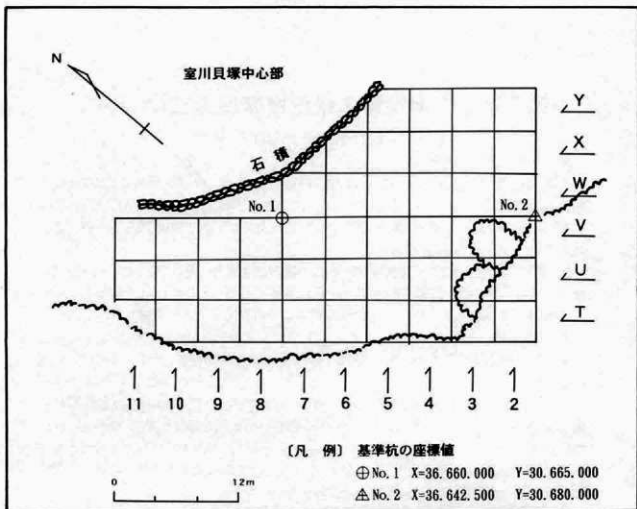
覆土層を一通り除いた後で、崖に平行に基準のグリッド・ラインを4m四方の単位として設定し、発掘を開始した。ところが、近世以降の擾乱を受けていない遺物包含層でも地滑りによって層中に空隙が生じているようすが観察された。予想される遺物包含層の厚さも2~3mあり、崖に平行する観察畦を残すと崩壊の危険が考えられた。そこで崖に平行するグリッド間の観察畦を残さず、崖まで一本の溝状のトレンチとして掘ることにした。

遺物包含層の発掘作業は、礫層を崩しながら遺物の収集を行う状態が続いた。なお、発掘作業では4m四方のグリッド別に収集するように作業した。しかし、遺物は石灰岩礫と一緒に掘り出されるので、出土状況の記録撮影さえ行えなかった。また、層の傾斜が30~45°と急勾配の斜面での発掘なので、土器片などの遺物が石灰岩とともに下方のグリッドに転げ落ちてしまう状況だった。

グリッド別に遺物収集を行うように可能な限り努力したが、発掘終了後に遺物整理作業を行ってみると、発掘中に割れた土器片が下方のグリッドに転げ落ちて別々のグリッドに袋分けされている例が多い。このため、遺物の集計を4m幅の長いトレンチとして一括する事にした。

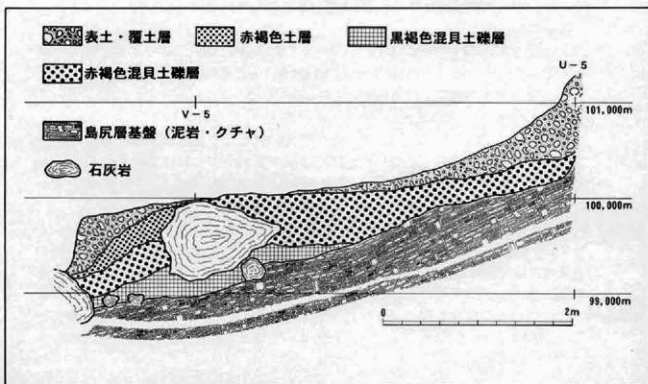
グリッド設定

発掘グリッドの設定は、基準杭No. 1(国土基本図座標系X=36.660Y=30.665)の杭を拠点に4m四方単位の碁盤目状に行った。グリッドの軸線は、方位角N49°10'55"Eと時計まわりの角度にずらし、このラインと直交するラインを設定し発掘グリッドの基準とした。各グリッドの番号は、アルファベットと算用数字を用いて第5図のように与えた。



第5図 崖下地区発掘グリッド配置図

第6図 トレンチ⑤層序



第3章 層序

表土と覆土層（一括除去）

先述したとおり、崖下地区の最上部はゴミ捨て場となっていた。ゴミを除いた下は段々畑が現れ礫混ざりの耕作土層となっていた。この耕作土の下部からは、透明のコカコーラのビン・スプーン・フォーク・洋式食器などが出土した。それらは終戦間もない頃、崖上の馬上原一帯に米軍基地があった当時の遺物である。

この耕作土から米軍基地時代までの戦後の堆積層を表土・覆土層とした。この表土・覆土層はトレンチ⑦～⑩で厚く、1m～2m以上も堆積していた。

トレンチ⑤～⑥と⑧～⑩の層序

覆土層を取り除くとグスク時代や貝塚時代の遺物包含層面に達した。ところが崖下地区の中央部のトレンチ⑦では、遺物包含層が洗い流されて寸断されている状況が検出された。遺物包含層の分布も状況もトレンチ④～⑥に堆積している赤褐色土層・赤褐色混貝土礫層・赤褐色混礫土層がトレンチ⑧～⑩には及んでいない。そこで層序についても2カ所に分けて記述することにしたい。

トレンチ④～⑥の層序

今回報告する崖下地区の記録保存発掘調査では、トレンチ④の一部も発掘範囲内に含まれた。同トレンチは、それまでも2回の試掘が行われている。このときの試掘穴は、その後に崖上からの落水があり、隣接するトレンチ⑤との間が溝状に洗い流されて寸断されてしまった。未攪乱と見られる3層の遺物包含層が残されていたが、その上下関係を確認することはできなかった。

表土・覆土

トレンチ⑥でも、観察畦の崩壊を避けるために覆土を除去した。トレンチ⑤の覆土は薄いので、一部を層序の観察畦に残した。トレンチ④～⑥の間は、崖上からのゴミの投棄は少ない。ここでは樹木が茂り、攪乱層である表土や覆土は、最大で50cmと薄い。

黒色土層

この層は3～6mmの焼土粒が少量出土しただけで、ほとんど無遺物の腐植土層。この層が本来の表土層と考えられる。

赤褐色土層

この層は崖上から流れ込んできた赤土（烏尻マージ）の二次堆積層と観察される。獣魚骨などの食料残滓は検出されなかった。土器や石材片が散在する土層である。宇佐浜式土器（縄文晩期）～仲原式（弥生前期?）の頃に堆積したと見られる。

赤褐色混貝土礫層

大小の石灰岩礫の中にアラスジケマンガイやリュウキュウザルボウなどの貝が混入している。層中には、径が1mを超える石灰岩も見られる。出土する土器はカヤウチパンタ式や宇佐浜式などの肥厚口縁グループが主で、伊波～大山式の小片や仲原式が混在。

黒褐色混貝土礫層

トレンチ⑥の赤褐色混貝土礫層中には、黒褐色になっている部分も見られた。それは径が40～50cmほどの石灰岩の下などで、黒褐色混貝土礫層の堆積途中に崖上から赤褐色土が流れ込み、層の色が赤褐色に変わったと考えられる。出土する土器も赤褐色混貝土礫層と同様で、肥厚口縁グループの時期の堆積と捉えられる。

琉球石灰岩礫層(コーラル層)

トレンチ⑥では、最下層に琉球石灰岩崖から崩れ落ちた石灰岩礫の層がある。この層からは伊波・荻堂式の土器片が単独的に出土した。なお、貝や獣骨などの食料残滓は、ほとんど見られなかった。

トレンチ⑧～⑩の層序

表土・覆土

この層の上部は段々畑、下部は崖上に米軍基地があった頃のゴミの堆積層となっている。なお、場所によっては両層の中間に崖上から流れ込んだ土砂の層が何枚か見られた。

黒色土層

トレンチ⑧～⑩に堆積している。トレンチ⑥の黒色土層と同様の腐植土層と見られる。なお、範囲確認調査でグリッドのW11付近でフェンサ下層式の「くびれ平底」だけが単独的に出土している。この層はフェンサ下層式の時期だけに限定される層と予想された。試掘穴壁面の観察によると、崖下地区で最もフェンサ下層式の土器片が多く、有望な層と思われた。しかし、同層は高さが4mもある大岩の下に堆積し、発掘すると崩れ落ちる危険があるので発掘を断念した。

茶褐色混礫土層

この層の上部は、段々畑をつくる時に整地されたようすが見られた。層中には、最大径が2mもある大きな石灰岩が散在する。イトマキボラなどの大きめの貝が目立つ。しかし、貝は風化してもろくなり、層中に含まれていることが確認されただけで取り上げることができないものが大半だった。石を掘り起こしながらの発掘なので、貝の出土を確認したときには粉々に割れている例がほとんどだった。



表土・覆土層



黒色土層



赤褐色土層



赤褐色混貝土礫層

W-6



黒褐色混貝土礫層



石灰岩礫層



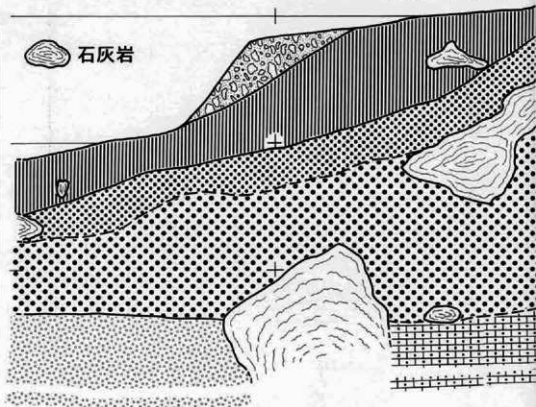
赤褐色混礫土層

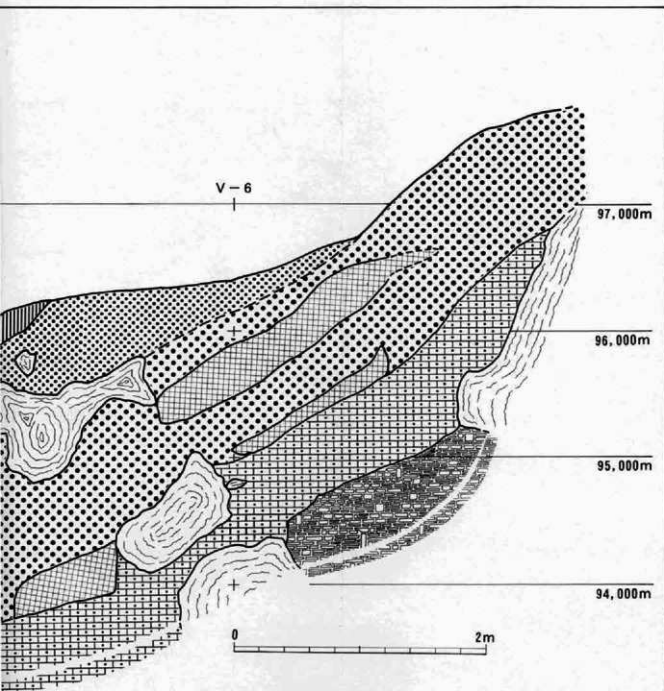


島尻層基盤
(泥岩・クチャ)



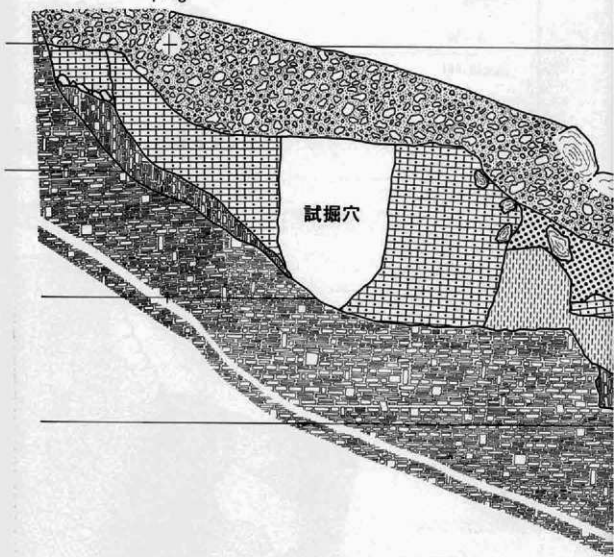
石灰岩






第7図 トレンチ⑥層序

T-8





U-8

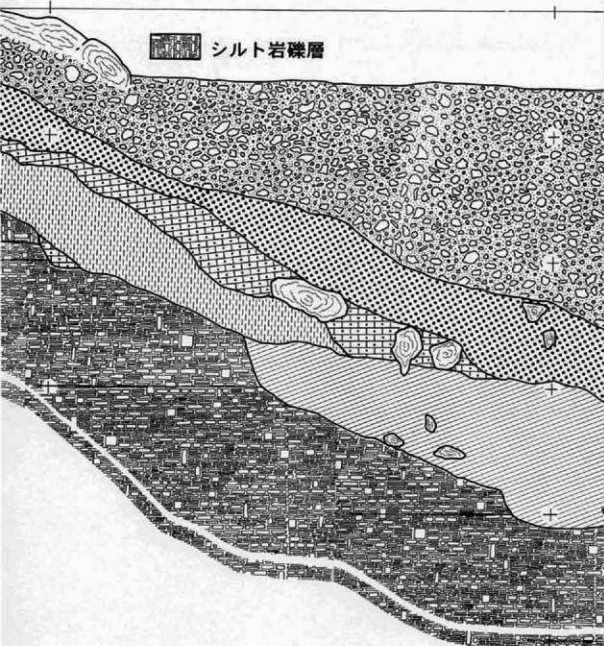
V-8


 表土・覆土層

 石灰岩礫層（コーラル層）

 暗褐色混貝土礫層

 シルト岩礫層




 茶褐色混礫土層


W-8

100,000m

 淡黒色土層

 島尻層 (泥岩・クチャ)

99,000m

 石灰岩

0 2m

98,000m

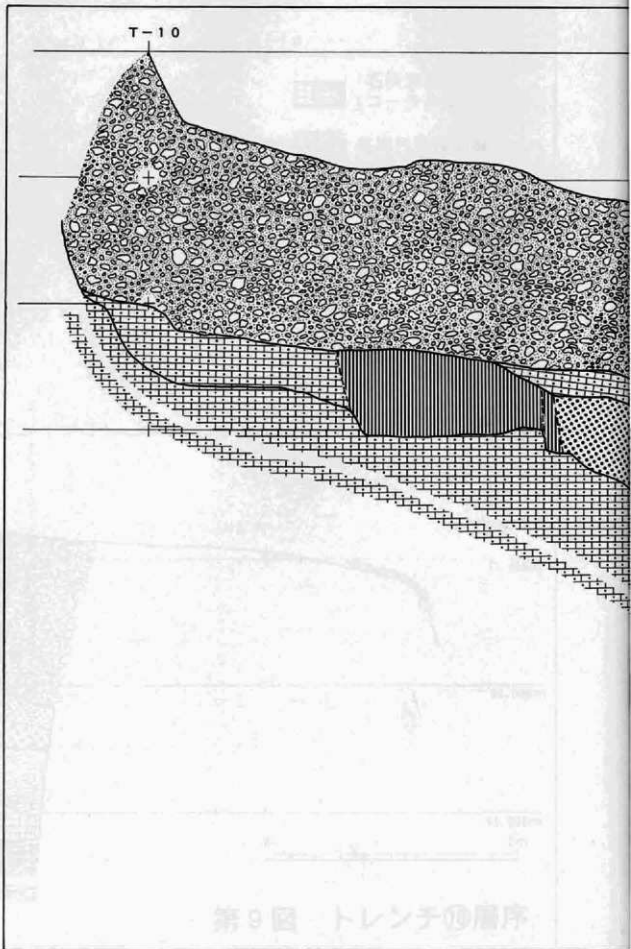
97,000m

96,000m

95,000m

94,000m


第8図 トレンチ⑧層序



第9図 トレンチの層序

J-10

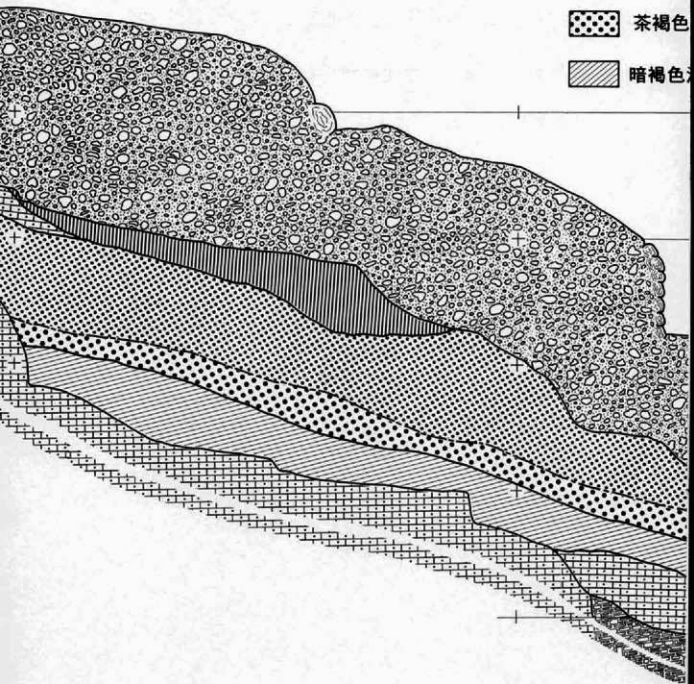
V-10

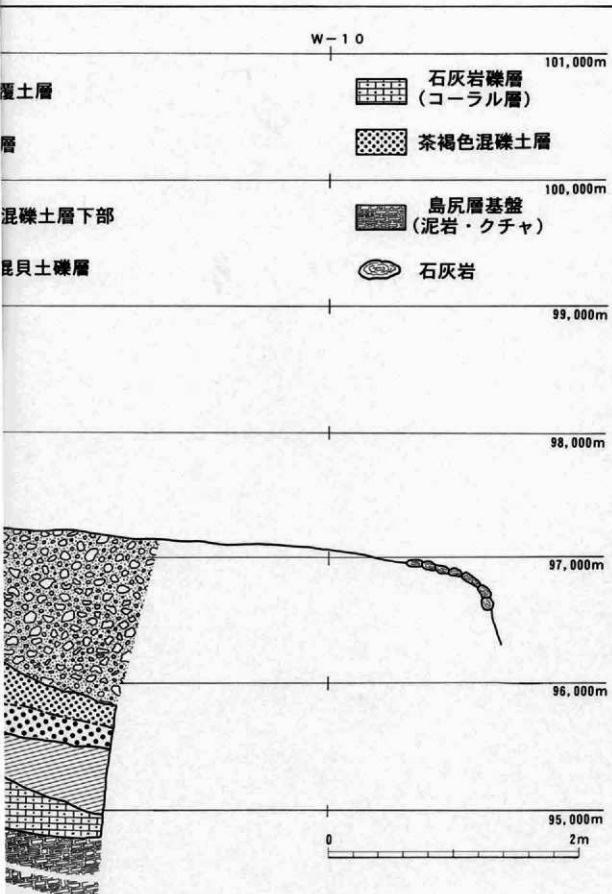
 表土

 黑色土

 茶褐色

 暗褐色





第9図 トレンチ⑩層序

石灰岩礫層(コーラル層)

トレンチ⑧～⑩の茶褐色混礫土層下部には、石灰岩崖面から崩れ落ちた無遺物の石灰岩礫が所々で堆積していた。これらの石灰岩礫の堆積は、同時期に堆積した一連の層というより、茶褐色混礫土層中の浮層と捉えられる。

茶褐色混礫土層下部

発掘作業の途中では、トレンチの間に観察畦を残していたので、別々の層ではないかと考えられていた層である。この層はトレンチ⑩付近では、5～10cm大の礫が少なくなる程度で、茶褐色混礫土層下部と呼んでいた。隣のトレンチ⑨では、さらに小礫が少なくなる。トレンチ⑩においては、茶褐色混礫土層とは明確に区別される淡黒色土層となり、上層の茶褐色混礫土層と明確に区別されることが明らかになった。

発掘作業が進み、これらが一連の層であることが明らかになった時点で「淡黒色土層」に統一すべきであった。しかし、圧倒的多数の遺物カードに「茶褐色混礫土層下部」と記録して収納されており、遺物整理の混乱を避けるために、発掘時の層名の「茶褐色混礫土層下部」のままとした。本報告でも遺物の出土一覧表などでは、「茶褐色混礫土層下部」に統一した。

暗褐色混貝土層

この層は20～30cm大の石灰岩が主となり、貝の出土量が目立って多くなる。この層の土は、しまりがなく、石と石の間には空洞の部分が多い。

※地滑りについて

トレンチ⑧～⑩の観察畦壁面には、黒色土層から下の層に断層のような部分が見られる。この地滑りと考えられる断層部は、壁面で確認できるただけで、それぞれの壁面に3～4カ所ある。発掘作業の途中でも、上下の層が入り乱れたようになっている部分が何度も見られた。現代でも室川貝塚一帯は、地滑り危険地域に指定されている。既報告の「室川貝塚東地区」でも、先史時代に地滑りが発生した痕が検出されている。

室川貝塚で出土している最古の土器は室川下層式である。これまでに行われた室川貝塚の発掘を振り返ると、この室川下層式の出土した場所が不思議な分布を示している。室川下層式が出土しているのは、崖上の馬上原遺跡と室川貝塚中心部である。ところが今回報告する崖下地区では、一点も出土していない。

崖上から投棄されたとすると崖下で出土しても良さそうである。しかし、室川下層式が出土するのは崖から20m以上離れた場所からで、崖の直下には見られない。おそらく室川下層式が廃棄された当初は、崖のすぐ下にも散布していたであろう。ところが、その後何度も地滑りが発生し、室川下層式を含む層は崖面から離れていってしまったと考えられる。

第4章 出土遺物

1. 土器

崖下地区の土器は、縄文時代の後期から晩期の土器が主である。代表的な型式としては、伊波式・萩堂式・カヤウチバンタ式・面縄西洞式・宇佐浜式・仲原式などがある。なお、仲原式は弥生前期初頭まで存続したと考えられる。

空白期

仲宗根貝塚や室川貝塚では、弥生時代から古墳時代に相当する時期の遺物が見当たらない。近接する馬上原遺跡や仲宗根貝塚などにも、この時期の遺物は見当たらない。室川貝塚周辺だけでなく、沖縄市全域および佐敷町から勝連半島のつけ根に位置する具志川市までの中城湾沿岸の広い地域で、この時期の遺跡が見当たらない。この空白期は平安時代にまで及んでいると考えられ、およそ千年の長い空白期となっている。

この空白期の後に出現する土器が「フェンサ下層式」である。この土器に続いて「フェンサ上層式」のグスク時代の土器が出土している。

出土した土器のほとんどが5cm以下の小片である。全形を復元可能なものは、崖下地区全体で、わずか2点だけである。器形や文様・展開・構成での分類をおこなうと、圧倒的多数の土器片が分類上で不明に含めなければならない事になってしまう。そうなるとう不明内容の細分が必要となる。そのため、本報告では、前回報告した「室川貝塚東地区」の報告書で用いた分類を手直し、土器型式の編年を考慮し、数型式をまとめて下記の5群に大別することにした。

第1群伊波式・萩堂式・大山式

第2群肥厚口縁グループ(カヤウチバンタ式・面縄西洞式・宇佐浜式など)

第3群仲原式

第4群フェンサ下層式

第5群フェンサ上層式(グスク時代の土器を一括)

分類別の出土状況

土器の集計にあたっては、口縁部・底部・文様の施されている破片だけを数えることにした。すべての土器片を数えると圧倒的多数が不明となり、各群の出土状況把握の妨げになる。なお、集計作業で、このような処理を行っても、まだ問題が残る。それは文様の施文面積が大きい第1群土器の出土数が、他の群よりも多くなってしまふ点である。

第1群土器は、トレンチ⑥の最下層「コーラル層」で単独に出土し、第2群に先行することが確認される。第1群と第2群は、他のトレンチを見ても下層で出土している。

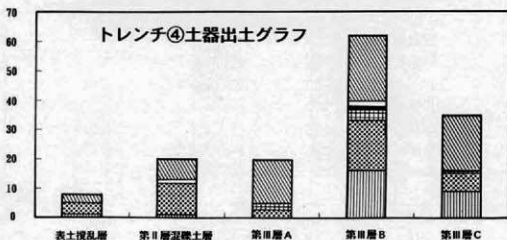
第3群と第5群は出土数が少なく、層序による出土状況の把握が困難となっている。第4群は、一括除去した表土・覆土で多数が出土し、第1群～3群の後に出現していることが示される。

トレンチ④ 土器出土表

第1群土器	23
第2群土器	29
第3群土器	7
第4群土器	55
第5群土器	8
その他	4
群不明1~3	7
計	133

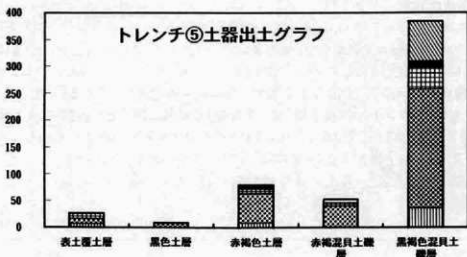
	表土覆乱層	第II層泥礫土層	第III層A	第III層B	第III層C	計
第1群土器	1	1	0	16	9	27
第2群土器	4	11	3	17	6	41
第3群土器	0	0	2	4	1	68
第4群土器	0	0	0	1	0	1
第5群土器	0	0	0	1	0	1
その他	3	7	15	22	19	4
群不明1~4	0	1	0	2	0	3
計	8	20	20	62	35	145

- 凡 例
- 群不明
 - ▨·· その他
 - 第5群土器
 - ▤·· 第4群土器
 - ▥·· 第3群土器
 - ▦·· 第2群土器
 - ▧·· 第1群土器



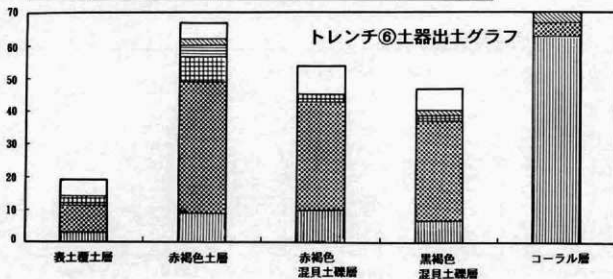
トレンチ⑤ 土器出土表

	表土覆乱層	黒色土層	赤褐色土層	赤褐色泥貝土礫層	黒褐色泥貝土礫層	計
第1群土器	3	1	10	1	36	51
第2群土器	14	4	53	40	221	332
第3群土器	4	0	9	8	42	383
第4群土器	0	0	1	1	1	3
第5群土器	0	0	5	1	3	9
その他	4	2	0	0	78	84
群不明1~3	0	0	1	2	3	6
計	25	7	79	53	384	862



トレンチ⑥ 土器出土表

	表土覆土層	赤褐色土層	赤褐色泥貝土礫層	黒褐色泥貝土礫層	コーラル層	計
第1群土器	3	9	10	7	63	93
第2群土器	8	40	33	30	4	115
第3群土器	3	8	2	2	0	207
第4群土器	0	3	0	0	0	3
その他	0	2	0	1	3	6
群不明1~3	5	5	9	7	0	9
計	19	67	54	47	70	257

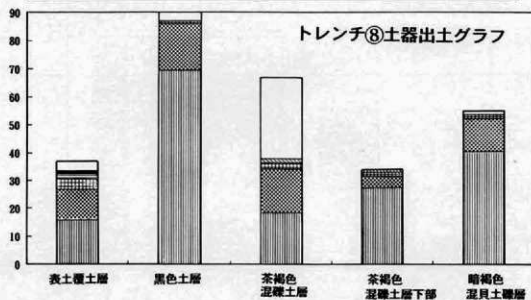


トレンチ⑦ 土器出土表

	表土覆土層	黒色土層	計
第1群土器	2	4	6
第2群土器	0	1	1
第5群土器	1	0	1
計	3	5	8

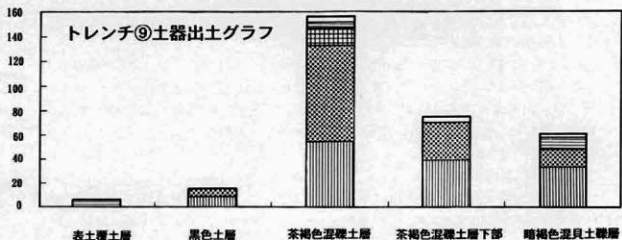
トレンチ⑧ 土器出土表

	表土覆土層	黒色土層	茶褐色泥礫土層	茶褐色泥礫土層下部	暗褐色泥貝土礫層	計
第1群土器	16	70	18	28	41	173
第2群土器	11	16	17	4	12	60
第3群土器	3	1	2	1	1	233
第4群土器	2	0	0	0	0	2
第5群土器	1	0	0	0	0	1
その他	0	0	1	1	0	3
群不明1~3	4	3	29	0	1	37
計	37	90	67	34	55	283



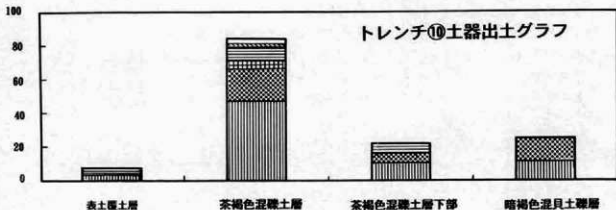
トレンチ⑨ 土器出土表

	表土覆土層	黒色土層	茶褐色混礫土層	茶褐色混礫土層下部	暗褐色混貝土礫層	計
第1群土器	1	7	56	40	34	138
第2群土器	0	7	78	32	15	132
第3群土器	1	0	14	0	0	15
第4群土器	4	0	2	0	10	16
群不明1~4	0	1	7	3	2	13
計	6	15	157	75	61	314



トレンチ⑩ 土器出土表

	表土覆土層	茶褐色混礫土層	茶褐色混礫土層下部	暗褐色混貝土礫層	計
第1群土器	4	48	11	12	75
第2群土器	0	20	4	13	37
第3群土器	0	4	1	0	112
第4群土器	2	7	4	0	13
その他	1	2	1	0	4
群不明1~4	0	3	1	0	17
計	7	84	22	25	138



各型式の胎土・混和材について

これまでに行われた室川貝塚と馬上原の発掘調査で、室川下層式からグスク時代の土器までと多くの型式が出土している。移入土器などの特殊な例を除いた全土器を観察すると、数型式あるいは時期別に胎土や混和材に違いが見られる。例として、伊波式・荻堂式・大山式の破片は、どんなに小さな破片であっても、胎土と混和材の特徴から見分けることが可能である。このような胎土・混和材の特徴を器形や文様構成の明らかな資料で見ると、室川貝塚や馬上原遺跡から出土した土器は、胎土・混和材の特徴から下記の9タイプに分類される。

なお、室川貝塚崖下地区の記録保存発掘調査では、室川下層式が出土していない。また、面縄前庭式は、記録保存発掘調査以前に実施された範囲確認調査で1点、表土・覆土層で面縄前庭の可能性のある凸帯文2点が得られているだけで、この9タイプには含めていない。室川下層式と面縄前庭式を含めると11タイプになる。

タイプ(イ):室川下層式

赤褐色から濃茶褐色。10～12mmと厚手。胎土は粘土質で、混和材は1～3mm大の円礫状の石英粒などを含む。なお、今回報告する崖下地区では、この室川下層式は出土していない。

タイプ(ロ):面縄前庭式

灰白色から黄褐色。4～5mm前後の薄手。胎土は砂質で、1～2mmの石英が多い。このタイプも崖下地区では、ほとんど見かけられない。

タイプ(ハ):伊波式・荻堂式・大山式

黄褐色ないしは赤褐色。底部以外の厚さは、6～7mm。割口を見ると内部が焼け切らず黒くサンドイッチ状になっている例が多い。混和材は、石英・千枚岩・チャート粒などが含まれている。混和剤の粒の大きさを見ると、微粒から4～5mmまでと一定しない。この種の胎土・混和材の土器は、室川貝塚だけでなく沖縄本島周辺の伊波式・荻堂式・大山式に共通する特徴である。

タイプ(ニ):大山・カヤウチバンタ式

茶褐色ないしは黒褐色。割口を見ると器面から内部まで黒褐色の例が多い。厚さは8～10mm。胎土は粘土質が多い。混和材は1～2mmほどの石灰質粒を含む。また、石灰質粒だけでなく、0.5mmほどの黒色鉱物粒が混在するものもある。沖縄国際大学考古ゼミの発掘資料には、この黒色鉱物粒が多量に含まれている例もある。

確認できる型式としては、大山式や大山式と同時期と考えられる平口縁土器(大山Ⅱ類など)とカヤウチバンタ式など。

※なお、伊波～荻堂式の土器は山形口縁で、大山式(大山貝塚の来Ⅱ類)になると平口縁となる。この器形が変化しただけではなく、それまで沖縄本島周辺全域に共通していた土器の胎土や混和材が、遺跡によって異なってくるようである。

タイプ(ホ):宇佐浜式

黄褐色～明赤褐色。混和材は0.5～1mm前後の粒のそろった石英が目立つ。割口を見ると器壁の内部まで焼け切れている例がほとんど。口縁と底部以外の厚さは7mm前後。このタイプ(ホ)は、室川貝塚以外でも見かけられる。

室川貝塚では、このタイプは宇佐浜式に限られるが、宇佐浜式にはこの種以外の胎土・混和材が用いられている例も見られる。

タイプ(ヘ):面縄西洞式などの肥厚口縁土器グループ

器面がアバタ状、茶褐色ないし赤褐色。割口をみると小空洞だらけの多孔質土器。割口には時々、石灰質粒が半ば溶けた例も見られ、石灰質粒が溶けたものと考えられる。肥厚部や底部以外の厚さをみると、4～5mm薄手から10mmほどの厚手まで見られる。

土器型式を見ると、面縄西洞式・宇佐浜式・仲原式など肥厚口縁土器全般に見られる。なお、カヤウチバンタ式などにも器面に小孔が見られる例があるが、タイプ(ヘ)のように顕著ではない。おそらくタイプ(ニ)の土器に含まれている石灰質粒が溶けた例と見られる。

タイプ(ト):仲原式・宇佐浜式

黄褐色ないし淡黒褐色。タイプ(ホ)に類似するが、粒が2～3mm石英粒が散在。厚さは5～7mm前後。このタイプは、室川貝塚東地区で圧倒的に仲原式土器に多いことが確認された。

タイプ(チ):仲原式

淡茶褐色ないし茶褐色。厚さは5～6mmとやや薄手が多い。混和材は1mm以下の石灰質粒で、取り上げることさえ困難なほど脆い例が目立つ。

タイプ(リ):フェンサ下層式

黄褐色から茶褐色の硬質土器。厚さは5～7mm。胎土中に1mm前後の赤褐色粒が散在するのが特徴。特徴的な胎土・混和材で、他の土器片と区別が容易である。不思議なことに崖下地区で得られた資料は底部が圧倒的に多い。

タイプ(ヌ):フェンサ上層式

灰白色ないし黄褐色。厚さは7～12mm。器面には3～5mmほどの石灰質粒が溶けたと見られる小孔が散在する。器外面に「削り」が見られる例がある。なお、崖下地区では出土資料が少ない。

第1群伊波・萩堂式・大山式土器

本来ならば第1群は「室川下層式」とすべきであるが、崖下地区では「室川下層式」と「面縄前庭式」がほとんど出土していない。本報告では、とりあえず第1群を伊波式・萩堂式・大山式とすることにした。

伊波式・萩堂式のほとんどの土器は、山形口縁あるいは口縁に突起・取っ手が見られる。山形口縁の場合、図版3の33・34に示されるように口縁の4カ所に頂点がある。34の土器のように頂部の部分が角張る例も見られる。図版6、図版7-1~5は、山形頂部・段・突起・取っ手などが見られる例である。

今回報告する資料は小破片が大半で、細かい文様の展開・構成・組み合わせで分類を行うことが困難である。そこで、下記のようにA~Cの3群に大別した。

A: 上下二段の文様帯

図版2-1~12に示されるような上下二段に横位の列点文や押引文の施されるタイプ。伊波貝塚や熱田原貝塚などでも出土している。伊波式土器に施される代表的なパターンである。口縁に沿って1条~2条の列点文や押引・押捺刻文を施し、やや間隔をおいて空白部分を残すようにしてから下段を同様な施文方で水平に施す例。

これは伊波式土器の代表的な施文パターンである。また、伊波・萩堂式土器の文様は、このパターンが基本となり、これに綾杉文や鋸歯状文を組み合わせた例が多い。

B: 上下二段の文様帯+綾杉文・鋸歯状文など

ここにまとめたグループも、一個の土器の全構成・組み合わせが明らかな資料が少ない。細分は困難なので、伊波式土器に多い綾杉文系の沈線文と、萩堂式の特徴である鋸歯状文に分けてみた。

綾杉文・羽状文などのグループ

口縁に平行あるいは水平方向に施された列点文・刺突文・押捺刻文・沈線文と綾杉文などの組み合わせられた例は、図版3-21~34・図版4・図版5-1~5。なお、図版5-6~12の格子状文なども、このグループに含まれると見られる。

鋸歯状文のグループ

鋸歯状文の組み合わせられた例は、図版5-19~37・図版7-13~28。なお、図で明らかのように小破片なので、鋸歯状文なのか綾杉文などの一部か判断に困る例も多い。

綾杉文・羽状文両と鋸歯状文の両方が施される例

図版5-15は、綾杉文と鋸歯状文の両者が組み合わせられた例。同図16は、斜めに施された押捺刻文・水平凹線文・鋸歯状文の組み合わせられた例。

同図13・14は、沈線が格子状に施された例で、綾杉文あるいは羽状文などから生じたものではないかと予想されるので、とりあえずBグループに含めることにした。

C:口縁に平行な文様(列点文・押捺刻文・沈線文など)だけの例

図版5-42・43の2点は、接合はできないが一つの土器であろう。おそらく口縁沿いの押捺刻文だけに終了すると予想される。同図38・40・41も、このタイプの可能性が強いと見られる。

なお、同図39はタイプCではないかと予想していた資料である。ところが図版作成作業が終了後、割口付近の付着物が取れて文様の一部が現れ、タイプAであることが確認された。

山形頂部や突起などについて

口縁部が山形になる例、段差がある例、突起あるいは取手の例を図版6と図版7-1~5にまとめた。なお、これらは文様の展開が不明なものである。

山形口縁の頂部の下や頂部と頂部の中間などに垂直に下る沈線や列点・押捺刻文を施す例、図版3-16・17・20がある。同図19もこのような縦の沈線に斜沈線を加えた例と見られる。

無文土器・壺形・凸帯文・壺形・底部(図版9-1~28)

第1群土器の文様は口縁付近に限られる。胎土・混和材の特徴からタイプ(ハ)の無文口縁破片(2cm大以上の破片)を見ると、全口縁の5%以下と予想される。図版6-25のように山形突起の破片で文様の見られない例もあるが、口縁の一部に過ぎないので無文と即断できない。無文口縁と見られる口縁破片の中、山形口縁になると予想されるのは、図版9-18の1点だけである。

第1群の無文破片を観察すると、内面に絞るように作ったときのシワが見られる例が散見される。これらは図版9-19・20のような壺形土器の肩部から口縁の破片であろう。

同図の21~28は第1群土器と同じ胎土・混和材のタイプ(ハ)の有文破片である。何れも小破片であるが、とりあえず第1群に含めた。同図21は細沈線と列点の組み合わせで、類例が見当たらない。

その他の土器(面縄前庭式・宇宿下層式など)

面縄前庭式と確認できる資料は、図版7-41の1点だけで、範囲確認調査の試掘で得られた。出土層は、表土・攪乱層で、記録保存発掘調査を実施した場所から南に20m以上離れている。同図39・40の2点は緻密な胎土で、面縄前庭式とは異なるようである。

第1群土器と同時期の奄美地域の土器は、同図42~51のように施文具の先端が丸くなったり、三角に尖ったものが用いられている。胎土・混和材を見ると42が伊波・萩堂式と同じ、43~51は精選された胎土で、石英などの混和材も1mm以上の粒がほとんど見られない。

図版5-40・図版7-33の2点は断面が「く」の字形となる例で、一見すると奄美大島の宇宿下層式(図版7-43~51)の口縁部の段差(同図45・46・50・51)のようにも見える。胎土や混和材は、伊波・萩堂式と同じなので、第1群土器に含めた。

図版7-34~38は不明とした例で、38と37の胎土・混和材は第1群と同じである。35・36・38の胎土・混和材は、同図43~51の宇宿下層式に類似している。

第2群肥厚口縁グループ

第2群はカヤウチバンタ式・面縄西洞式・喜念I式・宇佐浜式などの肥厚口縁土器を一括した。この第2群にまとめたグループは、さらに細分可能である。しかし、ここでも第1群土器と同じように、小破片で分類を行うには限界がある。例として図版10-14・26の2点は、口縁付近で肥厚し、さらに、その下方にも段差が見られる。このように小破片の場合は、口縁部の肥厚の形状だけを見て「カヤウチバンタ式」や「宇佐浜式」と分類を行うことができないことが明らかである。

カヤウチバンタ式

図版9-29~40・図版10-1~21はカヤウチバンタ式、あるいはカヤウチバンタ式と見られる例。一般に典型的なカヤウチバンタ式と呼ばれるのは、図版9-29・30・40などのように肥厚部がやや長く、口縁や段差が角張っている。ところが図版10-22~46のように肥厚部が短い例、後述の宇佐浜式のような丸みを帯びた肥厚形状の例も多い。

図版10-22~46は、カヤウチバンタ式の肥厚部の幅が小さく、断面が正方形に近い例をまとめた。これらの中に、非常に変わった施文の例が見られる。一見すると刺突あるいは押しや押し捺刻文に見えるが、施文方向とは逆に戻すように刺突を繰り返している(図版13-33に図示)。この手法が見られるのは、図版10-26・32・42で、カヤウチバンタ式以降の土器に見られる施文方法である。

図版9-37~39は、奄美諸島の面縄東洞式に見られる施文技法が見られる。押しなが押し捺刻文を施しているが途中で上下に変化させたり、逆に返す手法である。図版20-1・2の2点も、このような面縄東洞式のような施文方法が見られる。

面縄西洞式?

図版11-1~5は、カヤウチバンタ式の肥厚部の幅が大きくなったような形である。同図の6~28などを見ると、これらが一連のグループとして把握可能と思われる。段差の有無が確認できない例や段差がない例、図版12-1~36などを見ると奄美地域の面縄西洞式などの影響が予想される。また、図版11-6では肥厚部の段差が明確であるが、同図14では段差というより凸帯状になっている。

図版12-37~40は、細沈線が格子状の例で、胎土・混和材を見るとタイプ(ハ)である。同図10~12の例を見ると羽状文・折帯文などから派生したと考えられる。

喜念I式など

図版12-41~51は、同図52~56の喜念I式と時的に近い関係にあると考えられる。両者の前後関係は明らかではない。おそらく面縄西洞式と関係する「凸帯+沈線文」や「押し捺刻文など+沈線文」から沈線文が欠落したのであろう。同図60・61は、平行する凸帯をイメージさせるような2本の沈線の間に「ハ」の字形の刺突文が施された例である。

宇佐浜式

典型的な宇佐浜式の中で器形が明らかな例として、図版13-32-35-38-41の8点がある。この中で同図32-33は肥厚の形状は宇佐浜式であるが、器形を見ると「面縄西洞式?」としてまとめたグループに類似する。肥厚の形状だけで分類するのは、問題が多いことを示している。

肥厚部の断面が丸ないし三角状になる典型的な宇佐浜式の口縁を、図版13と図版14に示した。図版15は、宇佐浜式に含めてもよいと見られる例。

その他の肥厚口縁土器

カヤウチパンタ式以降の肥厚口縁土器は、口縁部の小破片だけでは分類が困難である。そのような資料を「その他の肥厚口縁土器」として一括した。器形の推定可能な例を見ると、図版16-5-6や図版18-38などは「面縄西洞式?」としたグループに含めてもよいと考えられる。

第2群の壺形土器

図版24-10-13-15は、第2群に属することがほぼ確実な壺形土器である。壺形土器は精選された胎土が用いられたり、薄手の資料が多い。そのために胎土・混和材の類似する第3群仲原式の壺と判別困難な例が多い。図版20-26-46は、第2・3群の何れに属するか不明の例の中、第2群の可能性が強いと見られる例である。

第2群の底部

図版21は崖下地区で得られた底部の胎土・混和材のタイプ(ニ)・(ホ)・(ヘ)の3種である。これらは第2群の底部と考えられる。同図1-13は、喜念I式や宇佐浜式の底部の可能性が強く、同図21-55は、カヤウチパンタ式～「面縄西洞式?」の底部の可能性が強いと予想される。

同図53-56-60などは、タイプ(ニ)の胎土・混和材である。第1群の大山式の底部の可能性もあるが、同タイプは第2群が多数を占めている。カヤウチパンタ式に続く肥厚口縁土器の底部は、同図45-50-54-55のように2cm前後と厚く、立ち上がり部分で軽く、くびれている。

同図1-9はタイプ(ホ)の胎土・混和材で、宇佐浜式の底部と見られる。同図12-47-51-52は、面縄西洞式～宇佐浜式にかけての底部と予想される。

同図12-27は、尖底や丸底の先端が「上げ底」のようにになっている。これらは胎土・混和材を見るとタイプ(ヘ)が圧倒的に多く、「その他の肥厚口縁土器」の底部であることは明らかである。口縁と接合できる資料がないので、詳細については不明である。

第3群仲原式土器

第3群は仲原式土器である。この型式が「室川貝塚東地区」では、圧倒的多数を占めて出土した。本報告の崖下地区は、口縁部だけでも200点以上が仲原式と分類される。しかし、他の型式の土器と同様に、そのほとんどが小片で、接合された資料も少ない。

そのような中で図版23-35の土器だけは例外であった。この土器の破片は崖下地区の南側一帯に散らばり、出土した層も表土から最下層にまで及んでいる。この土器の破片は精選された胎土と丁寧に研磨されているという特徴があり、多数の土器片の中から見つけることができた。

既報告の「室川貝塚東地区」で出土した仲原式土器の胎土は、黄褐色から淡黒褐色、2-3mm大の石英粒を混入したタイプ(ト)が主体であった。崖下地区から出土した仲原式は、淡茶褐色ないし茶褐色の胎土で、混和材は1mm以下の石灰質粒を含み、5-7mmと薄手のタイプ(チ)が圧倒的である。また、崖下地区の第2群土器は口縁部(肥厚部)の厚さが8-12mmと厚手が多く、薄手が多い仲原式と対照的に仲原式と肥厚口縁グループを見分けることが比較的簡単に行える要素となった。

仲原式の大きな特色のひとつとして、外耳土器がある。図版23-1は、グリッドW6の赤褐色土層から出土した。この外耳片に施された沈線は、雷文あるいは鬚文などをイメージさせる。この外耳には三カ所に孔がある。中央の径は5mm、その左右の孔は2-3mm径と小さくなっている。

仲原式の口縁部は、直口であるが、図版22-4のように継目のような段差が見られる例もある。仲原式の底部と確認できる資料は、図版25-10・11の2点である。同図53はトレンチ⑤の黒褐色混貝土礫層の最下部から出土した。胎土・混和材から仲原式の底部と判断される。

図版25-1-41は、仲原式の底部か第2群の底部か不明である。

弥生土器?

図版24-16・17は、接合することはできないが同一個体と見られる。トレンチ⑥の茶褐色混礫土層から出土した。弥生前期の土器と予想される土器片である。沖繩県内では、室川貝塚のような内陸部の遺跡で弥生式土器あるいは弥生時代の土器が出土した初の例であろう。これまでに知られている弥生前期から中期の土器は、海岸沿いの遺跡で出土している。

2点の土器は、肌色にちかいかい色調で精選された胎土の中に2-4mm大の石英粒が散在する。厚さは、12-14mmあり、一見して沖繩以外から持ち込まれた土器と判別される。16を見ると口径が50cm以上の大形の甕と推定される。同図18・21の胎土も、この2点と類似している。

同図18-21も移入土器の可能性が強いと考えられる例。第2群の「その他の肥厚口縁グループ」などには見られない沈線文が施されている。

第4群フェンサ下層式土器

崖下地区の記録保存発掘調査が行われる以前は、室川貝塚でのフェンサ下層式土器の出土例は少なかった。記録保存発掘調査に先立って実施された「沖縄市庁舎建設計画のための範囲確認調査」は、室川貝塚周辺を含む広範囲で実施されたが、その調査でもフェンサ下層式は、胴部片を含めても20数点だけしか得られていなかった。

崖下地区の「表土・覆土」除去作業では、フェンサ下層式の底部が40点以上も採集された。当然、発掘調査終了後の洗浄作業を進めると、フェンサ下層式の資料が大幅に増加するだろうと期待された。ところが、意外なことにフェンサ下層式の資料数は、それほど増えていない。崖下地区の「表土・覆土」の一括除去した分でも最終的に確認された数は55点に過ぎない。また、口径は底径の数倍もあり、当然ながら口縁部の破片が多数見つかるであろうと予想されたが、意外なことに底部の半分以下の点数しか見当たらない。

当然、口縁や底部以外の「胴部片」は、その十数倍になるであろうと予想されたので、崖下地区の全土器片を調べてみた。しかし、30数点の胴部片が見られただけであった。なお、土器出土表でも明らかなように一括除去した「表土・覆土」以外からの出土は、それぞれにトレンチで多い層でも数点が出土しているだけである。

このように崖下地区の「表土・覆土」で「第4群」の底部が多く検出されているが、なぜ底部だけが多数出土しているのか不明である。

崖下地区で出土した第4群土器の口縁部は、図版26-1~21に図示した。同図で明らかなように小破片が多い。図版28-1は口径10cmほどの小形土器である。なお、壺以外では、同図2のように口径20cm前後の例が多いと観察される。同図24~28の底面には、豆粒を押しつぶして貼りつけたような例。これは土器製作の台などに貼りついてしまうのを防ぐためと思われる。

第5群フェンサ上層式土器

崖下地区で最も出土数が少ないのが、第5群土器である。第5群土器は「グスク時代」の土器を一括してまとめた。器形は図版28-10・11と同図12の2種が確認される。この3点は、一括除去した表土・覆土層からの出土で、トレンチ⑨・⑩の段々畑石垣中から出土した。

図版28-23の破片には、滑石の細粒が混入されている。第5群土器の胴部から底にかけての外面には、「削り痕」が見られる。また、室川貝塚では表面採集や範囲確認調査などで、10数点の青磁や白磁などの破片が採集されている。

2. 石器

石材

先述のように崖下地区の発掘では、厚く堆積したゴミの層や攪乱層の表土・覆土層を一括して除去した。発掘作業を実施する前に、現場で出土する石灰岩以外の人為的に持ち込まれた可能性のある石は、すべて採集する方針であった。ところが、表土・覆土層の除去作業を始めると同時に、石灰岩以外の石に限定しても数トン以上の膨大な量が出土することが明らかとなった。

その圧倒的多数を占めるのが鳥尻層群の小祿層から産出する細粒砂岩と沖縄本島北部の嘉陽層系砂岩であった。これらの石の多くは、研磨痕や加工痕も見られないようであった。持ち帰っても資料として価値があるのか問題となった。また、膨大な量を収納する場所もない。どうしたものかと思案し、とりあえず石灰岩以外の石材の可能性のある石を現場の一角所に集めておくことにした。

現場に積んでおいた石は、雨に洗われ研磨など加工の有無が確認できるようになった。この中から加工されたものやサンプルを選別して持ち帰ることにし、他は現場で処分することにした。このように加工のない細粒砂岩や嘉陽層系の砂岩を除いたが、それでも500kgを超える石材が出土している。

石器

崖下地区で出土した石器は、研磨や加工の見られる小片含めると1000点以上となる。本報告では、その中から形状の明確な164点を取り上げて紹介することにした。なお、今回報告する崖下地区の発掘調査では、チャートが出土していない。室川貝塚中心部・東地区や馬上原遺跡では出土しているが、記録保存発掘調査前に行われた範囲確認調査でも崖下地区ではチャート片は出土していない。

A：石斧類

一般に石斧と総称される石器は、磨製石斧と打製石斧が出土している。また、刃部だけを研磨する局部研磨石斧も見られるが、一部でも研磨が施されていれば取りあえず磨製石斧に含め、それぞれについて記述することにした。

石斧類についても室川貝塚の多様な土器型式と、どのような出土関係があるのか検討の必要性を強く感じる。しかし、資料の多くが表面採集資料や攪乱層からの出土で、どの土器型式に伴うのか不明である。

扁平片刃石斧(図版29-1・2・4・5)

定角片刃石斧と通称される石斧で、原石からの剥離面が一部残る以外は、全面的に研磨されている。同図10もこの種の石斧と見られる。

石斧法量・出土一覧表 (単位 mm g)

No.	図版	写真	トレンチ・層・試掘穴No.	長さ	幅	厚さ	重量	石質
1	29-1	40-1	範囲確認調査TP-50・表土・攪乱層	75	54	13	100	輝緑岩
2	29-12	41-1	崖下地区表土覆土層	65	38	19	78	輝緑岩?
3	29-13	41-2	崖下地区6トレンチ・黒褐色混貝土礫層	69	45	19	85	輝緑岩?
4	29-14	41-3	崖下地区表土覆土層	71	43	18	91	輝緑岩?
5	29-15	41-4	崖下地区8トレンチ・暗褐色混貝土礫層	77	47	16	108	輝緑岩?
6	29-16	41-5	崖下地区9トレンチ・茶褐色混礫土層下部	77	43	20	84	輝緑岩?
7	29-17	41-6	崖下地区8トレンチ・茶褐色混礫土層	86	39	25	140	輝緑岩?
8	29-18	41-7	範囲確認調査TP-20・Ⅲ層	87	44	15	102	片状砂岩?
9	29-19	41-8	室川貝塚中心部の表採資料	71	62	27	170	輝緑岩?
10	30-1	42-1	崖下地区4トレンチ表土覆土層	111	57	27	280	輝緑岩?
11	30-2	42-2	崖下地区表土覆土層	103	48	21	232	輝緑岩
12	30-4	42-4	崖下地区表土覆土層	92	58	22	250	輝緑岩?
13	30-11	43-4	範囲確認調査TP-き1	96	60	26	216	砂岩?
14	30-12	43-5	崖下地区9トレンチ・茶褐色混礫土層下部	81	58	15	98	砂岩?
15	30-13	43-6	崖下地区表土覆土層	82	46	27	113	砂岩?
16	31-7	44-7	崖下地区4トレンチ・淡黒色土層	66	41	13	64	輝緑岩?
17	31-10	44-10	崖下地区6トレンチ・暗褐色混貝土礫層	54	35	15	46	輝緑岩
18	33-3	46-3	範囲確認調査TP-あ1	83	50	25	128	片状砂岩?
19	33-5	46-5	範囲確認調査・室川貝塚西部地区採集	81	46	20	160	黒色千枚岩
20	33-6	46-6	範囲確認調査TP-あ7	80	41	15	78	砂岩?
21	34-1	48-1	崖下地区表土覆土層	84	42	18	110	砂質千枚岩?
22	34-2	48-2	崖下地区表土覆土層	85	38	14	95	輝緑岩?
23	34-10	49-3	崖下地区表土覆土層	111	58	27	264	輝緑岩
24	34-11	49-4	崖下地区表土覆土層	142	78	33	490	砂質片岩

敲打器・磨石重量一覧表

図版番号	写真番号	重量	図版番号	写真番号	重量	図版番号	写真番号	重量
図版35-1	写真50-1	395	図版36-5	写真52-5	75	図版37-3	写真54-3	189
図版35-2	写真50-2	398	図版36-6	写真52-6	241	図版37-4	写真54-4	305
図版35-3	写真50-3	332	図版36-7	写真52-7	248	図版37-5	写真54-5	928
図版35-4	写真50-4	300	図版36-8	写真52-8	216	図版37-6	写真54-6	650
図版35-5	写真50-5	221	図版36-9	写真53-1	277	図版37-7	写真55-1	347
図版35-6	写真50-6	393	図版36-10	写真52-10	348	図版37-8	写真55-2	600
図版35-7	写真50-7	481	図版36-11	写真52-11	234	図版37-9	写真55-3	445
図版35-8	写真50-8	328	図版36-12	写真52-9	368	図版37-10	写真55-4	414
図版35-9	写真50-9	356	図版36-13	写真52-12	309	図版37-11	写真55-5	322
図版35-10	写真50-10	171	図版36-14	写真52-13	518	図版37-12	写真55-6	644
図版35-11	写真51-1	910	図版36-15	写真53-2	195	図版38-1	写真56-1	920
図版35-12	写真51-2	846	図版36-16	写真53-3	300	図版38-2	写真56-2	1580
図版35-13	写真51-3	1250	図版36-17	写真53-4	306	図版38-3	写真56-3	1630
図版35-14	写真51-4	778	図版36-18	写真53-5	412	図版38-4	写真57-1	566
図版36-1	写真52-1	63	図版36-19	写真53-6	305	図版38-5	写真57-2	870
図版36-2	写真52-2	78	図版36-20	写真53-7	192	図版38-6	写真57-3	918
図版36-3	写真52-3	111	図版37-1	写真54-1	240	図版38-9	写真57-6	1020
図版36-4	写真52-4	47	図版37-2	写真54-2	202			

小型磨製石斧(図版29-12~15・16図版31-6・7・10)

長さが8cm以下の両刃石斧で、全体の形は二等辺三角形。出土層位の明らかな資料で見ると、第1群や第2群のカヤウチバンタ式に伴う可能性が高い。

図版29-16は刃部付近だけが研磨され、他は製作時の打割痕が残されたままとされている。局部研磨石斧と分類可能であるが、大きさや製作技法から、このグループに含めた。

図版29-17は、このグループに含めるには、厚さが25mmとやや厚手で、全形もやや隅丸の長方形である。このグループに近い大きさなので、ここで紹介した。

厚手長方形石斧(図版30-1・2・5)

隅丸長方形の重厚な石斧で、図版29-20・図版30-4・13も、このグループに含まれる。これらは、すべて攪乱層や表土・覆土から出土している。

大型石斧(図版30-6図版32-2・4)

図版32-2の大きな石斧は、完形重量が650gを超えると予想される。この石斧が出土したトレンチ④は層の状況が不明で、どの土器型式に伴うのかは不明。図版30-6と図版32-4も、このような大型石斧の基部と見られるが、これらも表土・攪乱層からの出土で土器型式との関係は不明。

なお、図版32-1の打製石斧の基部は、このような大型石斧製作途中かとも考えられる例であるが、この資料のように打割しただけの打製石斧と分類される資料も多く、今後の検討課題としたい。

柱状片刃石斧?(図版32-3)

図版32-3の資料は、崖下地区で一括除去した表土・覆土層からの出土。今回報告する石器の中で最も注目される資料であるが、どの型式の土器に伴うか不明。基部は折損し、刃部の近くだけが残る。片方の側面は節理面から縦に割れたようになっている。類似品が糸満市真栄里貝塚や西原町我謝遺跡から類似の石斧の出土例が知られている。土器の項で紹介している弥生式土器や「フェンサ下層式」あるいは「真栄里式土器」と、どのような関係があるのか注目される。

その他・楕形あるいは左右非対称の石斧(図版29-19図版30-11)

図版29-19の石器は、1995年に室川貝塚歴史公園にある琉球石灰岩の大岩上から採集された。刃部の片面が丸ノミ状にくぼんでいる。

図版30-11の刃先はまるくなり、鋭さがない。側面は丸みをおびるが、両面は平坦で他とは異なっている。やや軟質の砂岩で、木工用の斧としての用途とは考え難い。

千枚岩製薄手利器と千枚岩薄片石器(図版31-1~5)

図版31-1・2・4は、厚さが2~3mmで、既報告の室川貝塚東地区の北東部黒色遺物包含層凹地部出土の「頁岩製利器」と報告した石器と類似する。1・2を見ると、略方形の上下両辺が刃部となっている。石質は細密で良質な石材が用いられている。

同図3は鋭く研がれた刃部だけが残り、他は欠損したように見える。同図5は、石質が前記の3点と異なり、石斧に多い緑色千枚岩が用いられている。

打製石斧(図版32-1・図版33(同図15は除く)・図版34)

ここにまとめた石器は、使用痕などが見当たらず、石斧製作途中の可能性が強いと考えられる。図版34-1・2は、鋭い刃部が見られるが、図版33-5の例では刃部と考えられる部分に鋭さが無い。

B: その他の石器 (敲打器・磨石・石皿・砥石など)

凹石

凹石は大小の2サイズに大別される。小(図版35-1・4・6~8)・大(図版35-11~14 図版37-6)。図版35-9・10の2点は単に凹だけが見られる例で、他の資料のように整った形ではない。

また、通称「たたき石」とよばれる敲打器の中には、石斧の破損品を転用した図版36-15~17の3点も見られる。

磨石

磨石は形と大きさで、下記の3種に分けられる。

垂円三角錐(図版38-1~3)

これらの3点は、大きさと形がほとんど同じである。丸みを帯びた三角錐状と、独特な形をしている。角張った部分や稜の部分に敲打痕が見られる以外は、滑面となっている。

精円・隅丸方形(図版36-10・11、図版37-1・2、図版38-5・6・9)

上記の3点が、やや特異な形状で目立つのに対し、ここにまとめた敲打器が、一般的な形である。側面や上下端の狭い面に敲打痕がみられ、表裏の広い面は滑面となっている。

大形(図版40-3~5)

図版40-3~5の3点は、完形ならば4kg前後あったと推定される大きな磨石である。なお、5の石質は、軟質の細粒砂岩で、食料の磨り潰し用とは考え難い。

石器出土（石質）一覧表

図版・写真番号	出土トレンチ（試掘穴N.O.）・層	石質（括弧内未測定）
図版29-1・写真40-1	範囲確認調査 TP-50・表土攪乱層	輝緑岩
図版29-2・写真40-2	範囲確認調査 TP-20・II層（黒褐色土層）下部	輝緑岩
図版29-3・写真40-3	崖下地区 表土覆土層	（輝緑岩）
図版29-4・写真40-4	崖下地区 トレンチ⑧・茶褐色混礫土層下部	（輝緑岩）
図版29-5・写真40-5	崖下地区 トレンチ⑧・茶褐色混礫土層	輝緑岩
図版29-6・写真40-6	範囲確認調査 TP-あ7・攪乱層	（輝緑岩）
図版29-7・写真40-7	範囲確認調査 TP-あ7・攪乱層	輝緑岩
図版29-8・写真40-8	崖下地区 トレンチ⑥・赤褐色混貝土礫層	（輝緑岩）
図版29-9・写真40-9	崖下地区 トレンチ⑥・茶褐色混礫土層下部	（輝緑岩）
図版29-10・写真40-10	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色土層	（砂岩）
図版29-11・写真40-11	崖下地区 表土覆土層	（緑色千枚岩）
図版29-12・写真41-1	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版29-13・写真41-2	崖下地区 トレンチ⑥・黒褐色混貝土礫層	（砂岩）
図版29-14・写真41-3	崖下地区 表土覆土層	（輝緑岩）
図版29-15・写真41-4	崖下地区 トレンチ⑤・暗褐色混貝土礫層	（輝緑岩）
図版29-16・写真41-5	崖下地区 トレンチ⑧・茶褐色混礫土層下部	（輝緑岩）
図版29-17・写真41-6	崖下地区 トレンチ⑧・茶褐色混礫土層	（輝緑岩）
図版29-18・写真41-7	範囲確認調査 TP-20・II層（攪乱層）	（片状砂岩）
図版29-19・写真41-8	室川貝塚中心部の表探資料	（輝緑岩）
図版29-20・写真41-9	範囲確認調査 TP-あ9・攪乱層	（砂岩）
図版30-1・写真42-1	崖下地区 表土覆土層	（輝緑岩）
図版30-2・写真42-2	崖下地区 表土覆土層	輝緑岩
図版30-3・写真42-3	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	（輝緑岩）
図版30-4・写真42-4	崖下地区 表土覆土層	（輝緑岩）
図版30-5・写真42-5	崖下地区 表土覆土層	（輝緑岩）
図版30-6・写真42-6	範囲確認調査 TP-33・表土攪乱層	（輝緑岩）
図版30-7・写真42-7	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色土層	（輝緑岩）
図版30-8・写真43-1	崖下地区 表土覆土層	（輝緑岩）
図版30-9・写真43-2	崖下地区 表土覆土層	（輝緑岩）
図版30-10・写真43-3	範囲確認調査 TP-35・攪乱層	（片状砂岩）
図版30-11・写真43-4	範囲確認調査 TP-き1・攪乱層	（砂岩）
図版30-12・写真43-5	崖下地区 トレンチ⑧・茶褐色混礫土層下部	（砂岩）
図版30-13・写真43-6	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版30-14・写真43-7	範囲確認調査 TP-あ7・攪乱層	（輝緑岩）
図版30-15・写真43-8	崖下地区 表土覆土層	（輝緑岩）
図版30-16・写真43-9	範囲確認調査 TP-あ9・攪乱層	（輝緑岩）
図版30-17・写真43-10	範囲確認調査 TP-37・攪乱層	輝緑岩
図版30-18・写真43-11	崖下地区 トレンチ⑥・赤褐色混貝土礫層	（輝緑岩）
図版30-19・写真43-12	範囲確認調査 TP-き1・攪乱層	（砂岩）
図版30-20・写真43-13	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	輝緑岩
図版30-21・写真43-14	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色土層	（砂岩）

図版・写真番号	出土トレンチ(試掘穴N0.)・層	石質(括弧内未同定)
図版30-22・写真43-15	崖下地区 トレンチ④・黒色土層	(輝緑岩)
図版31-1・写真44-1	崖下地区 トレンチ④・黒色土層	(千枚岩)
図版31-2・写真44-2	崖下地区 トレンチ⑥・赤褐色土層	(千枚岩)
図版31-3・写真44-3	崖下地区 トレンチ⑨・黒色土層	(千枚岩)
図版31-4・写真44-4	崖下地区 トレンチ⑤・表土覆土層	(千枚岩)
図版31-5・写真44-5	崖下地区 トレンチ⑤・層不明	(千枚岩)
図版31-6・写真44-6	範囲確認調査 TP-あ5・攪乱層	(輝緑岩)
図版31-7・写真44-7	崖下地区 トレンチ④Ⅱ層淡茶褐色土層	(輝緑岩)
図版31-8・写真44-8	範囲確認調査 TP-あ5・攪乱層	(輝緑岩)
図版31-9・写真44-9	範囲確認調査 TP-9・攪乱層	(輝緑岩)
図版31-10・写真44-10	崖下地区 トレンチ⑥・暗褐色混貝土礫層	輝緑岩
図版32-1・写真45-1	範囲確認調査 TP-あ1・攪乱層	(片状砂岩)
図版32-2・写真45-2	崖下地区 トレンチ④・黒褐色混貝土礫層	(砂岩)
図版32-3・写真45-3	崖下地区 表土覆土層	輝緑岩
図版32-4・写真45-4	崖下地区 表土覆土層	(輝緑岩)
図版33-1・写真46-1	崖下地区 表土覆土層	(砂質千枚岩)
図版33-2・写真46-2	範囲確認調査 TP-20・Ⅲ層	(片状砂岩)
図版33-3・写真46-3	範囲確認調査 TP-あ1・攪乱層	(片状砂岩)
図版33-4・写真46-4	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)
図版33-5・写真46-5	範囲確認調査 ・室川貝塚西地区採集	黒色千枚岩
図版33-6・写真46-6	範囲確認調査 TP-あ7・攪乱層	(砂岩)
図版33-7・写真47-1	範囲確認調査 TP-あ3・攪乱層	(砂質千枚岩)
図版33-8・写真47-2	崖下地区 トレンチ⑥・赤褐色土層	(砂質千枚岩)
図版33-9・写真47-3	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	(砂質千枚岩)
図版33-10・写真47-4	範囲確認調査 TP-24・表土層	(凝灰岩)
図版33-11・写真47-5	崖下地区 表土覆土層	輝緑ヒン岩
図版33-12・写真47-6	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色土層	(砂岩)
図版33-13・写真47-7	崖下地区 トレンチ⑨・暗褐色混貝土礫層	(輝緑岩)
図版33-14・写真47-8	範囲確認調査 TP-20・表土層	(砂岩)
図版33-15・写真47-9	崖下地区 トレンチ⑧・暗褐色混貝土礫層	(千枚岩)
図版34-1・写真48-1	崖下地区 表土覆土層	(砂質千枚岩)
図版34-2・写真48-2	崖下地区 表土覆土層	(輝緑岩)
図版34-3・写真48-3	範囲確認調査 TP-あ1・攪乱層	(砂質千枚岩)
図版34-4・写真48-4	崖下地区 表土覆土層	(輝緑岩)
図版34-5・写真48-5	崖下地区 トレンチ④・淡黒色土層	(黒色千枚岩)
図版34-6・写真48-6	崖下地区 トレンチ⑨・暗褐色混貝土礫層	(砂質千枚岩)
図版34-7・写真48-7	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	(緑色千枚岩)
図版34-8・写真49-1	崖下地区 10トレンチ・暗褐色混貝土礫層下部	(石英斑岩)
図版34-9・写真49-2	崖下地区 トレンチ⑨・暗褐色混貝土礫層下部	(砂質千枚岩)
図版34-10・写真49-3	崖下地区 表土覆土層	輝緑岩
図版34-11・写真49-4	崖下地区 表土覆土層	砂質片岩
図版34-12・写真49-5	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)

図版・写真番号	出土トレンチ(試掘穴N0.)・層	石質(括弧内未同定)
図版35-1・写真50-1	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	砂岩
図版35-2・写真50-2	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	角閃石安山岩
図版35-3・写真50-3	範囲確認調査 TP-10・攪乱層	(凝灰岩?or砂岩)
図版35-4・写真50-4	範囲確認調査 TP-20・表土層	(砂岩)
図版35-5・写真50-5	範囲確認調査 TP-あ5・攪乱層	(片状砂岩)
図版35-6・写真50-6	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)
図版35-7・写真50-7	範囲確認調査 TP-20・Ⅲ層下部	(砂岩)
図版35-8・写真50-8	範囲確認調査 TP-20・表土層	(砂岩)
図版35-9・写真50-9	崖下地区 トレンチ④・黒色土層	(砂岩)
図版35-10・写真50-10	崖下地区 表土覆土層	(片状砂岩)
図版35-11・写真51-1	崖下地区 トレンチ⑨・暗褐色混貝土礫層下部	(砂岩)
図版35-12・写真51-2	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)
図版35-13・写真51-3	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)
図版35-14・写真51-4	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)
図版36-1・写真52-1	崖下地区 トレンチ④・淡黒色土層	砂岩
図版36-2・写真52-2	崖下地区 トレンチ④・淡黒色土層	角閃石安山岩
図版36-3・写真52-3	崖下地区 トレンチ④・黒褐色混貝土層	(輝緑岩)
図版36-4・写真52-4	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色土層	(砂岩)
図版36-5・写真52-5	崖下地区 トレンチ④・黒色土層	(砂岩)
図版36-6・写真52-6	崖下地区 トレンチ⑦・暗褐色混貝土礫層	(砂岩)
図版36-7・写真52-7	崖下地区 トレンチ⑧・黒色土層	(砂岩)
図版36-8・写真52-8	崖下地区 トレンチ④・表土覆土層	(砂岩)
図版36-9・写真53-1	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)
図版36-10・写真52-10	崖下地区 トレンチ⑨・暗褐色混貝土礫層	(輝緑岩)
図版36-11・写真52-11	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	(砂岩)
図版36-12・写真52-9	崖下地区 トレンチ⑨・暗褐色混貝土礫層	(細粒砂岩)
図版36-13・写真52-12	崖下地区 トレンチ⑩・表土覆土層	(砂岩)
図版36-14・写真52-13	崖下地区 表土覆土層	(石英斑岩)
図版36-15・写真53-2	崖下地区 表土覆土層	(輝緑岩)
図版36-16・写真53-3	範囲確認調査 TP-20・表土層	(輝緑岩)
図版36-17・写真53-4	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	(輝緑岩)
図版36-18・写真53-5	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)
図版36-19・写真53-6	崖下地区 トレンチ④・黒色土層	(片状砂岩)
図版36-20・写真53-7	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	(角閃石安山岩)
図版37-1・写真54-1	崖下地区 表土覆土層	(片状砂岩)
図版37-2・写真54-2	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	(角閃石安山岩)
図版37-3・写真54-3	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)
図版37-4・写真54-4	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)
図版37-5・写真54-5	崖下地区 表土覆土層	(石英斑岩)
図版37-6・写真54-6	崖下地区 表土覆土層	(砂岩)
図版37-7・写真55-1	崖下地区 トレンチ④・黒色土層	(砂岩)
図版37-8・写真55-2	範囲確認調査 TP-20・Ⅳ層	(角閃石安山岩)

図版・写真番号	出土トレンチ（試掘穴N0.）・層	石質（括弧内未同定）
図版37-9・写真55-3	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版37-10・写真55-4	範囲確認調査 TP-20・IV層	（角閃石安山岩）
図版37-11・写真55-5	崖下地区 トレンチ④・黒色土層	（砂岩）
図版37-12・写真55-6	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版38-1・写真56-1	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	（砂岩）
図版38-2・写真56-2	崖下地区 トレンチ④・淡黒色土層	（砂岩）
図版38-3・写真56-3	崖下地区 トレンチ⑨・表土覆土層	（砂岩）
図版38-4・写真57-1	崖下地区 トレンチ④・IV層	（砂岩）
図版38-5・写真57-2	範囲確認調査 TP-20・IV層	（砂岩）
図版38-6・写真57-3	崖下地区 トレンチ⑤・黒褐色混貝土礫層	（砂岩）
図版38-7・写真57-4	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	（砂岩）
図版38-8・写真57-5	崖下地区 トレンチ⑤・黒褐色混貝土礫層	（砂岩）
図版38-9・写真57-6	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版39-1・写真58-1	崖下地区 トレンチ④・黒色土層	（砂岩）
図版39-2・写真58-2	崖下地区 トレンチ④・黒色土層	（砂岩）
図版39-3・写真58-3	崖下地区 トレンチ④・黒色土層	（砂岩）
図版39-4・写真58-4	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版39-5・写真58-5	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版39-6・写真58-6	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版39-7・写真58-7	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版39-8・写真59-1	崖下地区 表土覆土層	（細粒砂岩）
図版39-9・写真59-2	範囲確認調査 TP-3・表土層	（細粒砂岩）
図版39-10・写真59-3	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版39-11・写真59-4	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版40-1・写真60-1	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版40-2・写真60-2	崖下地区 表土覆土層	（砂岩）
図版40-3・写真60-3	崖下地区 表土覆土層	（角閃石安山岩）
図版40-4・写真60-4	崖下地区 表土覆土層	（角閃石安山岩）
図版40-5・写真60-5	崖下地区 トレンチ⑨・暗褐色混貝土礫層下部	（細粒砂岩）
図版40-6・写真60-6	崖下地区 表土覆土層	（細粒砂岩）
図版40-7・写真60-7	範囲確認調査 TP-20・表土層	（角閃石安山岩）
図版40-8・写真60-8	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	（細粒砂岩）
図版40-9・写真60-9	崖下地区 トレンチ⑤・赤褐色混貝土礫層	（細粒砂岩）
図版40-10・写真60-10	崖下地区 トレンチ⑨・暗褐色混貝土礫層	（砂岩）
図版41-1・写真61-1	崖下地区 トレンチ⑤・黒褐色混貝土礫層	（砂岩）
図版41-2・写真61-2	崖下地区 トレンチ⑥・赤褐色土層	（砂岩）
図版41-3・写真61-3	崖下地区 不明（表土覆土層に含める）	（細粒砂岩）
図版41-4・写真61-4	崖下地区 トレンチ⑨・暗褐色混貝土礫層下部	（細粒砂岩）
図版41-5・写真61-5	崖下地区 トレンチ⑤・黒褐色混貝土礫層	（細粒砂岩）
図版41-6・写真61-6	崖下地区 トレンチ⑤（層不明）	（細粒砂岩）

敲打器(たつき石)(球形＝図版36-9・12～14)(長楕円＝図版36-6・7)

ここで敲打器としたのは、滑面が少なく、全面的に敲打痕が見られる。図版36-1～5は、他と比較すると大きさが小さく形も異なるので、用途が異なると考えられる。同図4は石斧の破損品の周縁を鋭く打ち欠き、刃器のように加工した例。

このように石質や形状から本来は石斧であったのが、敲打器に転用されたと見られる例が、図版36-15～17の3点。

石皿・砥石類(図版38-7・8、図版39、図版40)

ここにまとめた石器の中で、石質が細粒砂岩の資料は軟質で簡単に砂粒が取れ、食料などの磨り潰しとしての石皿の可能性は少ないと考えられる。

図版39-1～5のように、厚さ1～3cmの嘉陽層系砂岩片には、研磨によって生じたとみられる滑面のある例が他にも多数出土している。

3. 貝製品

貝製品は図版42-8～12の5点が検出された。なお、包含層中から出土した貝類は、風化しボロボロの状態のものが多数であった。また、崖下地区の遺物包含層が礫層で、石を崩しながらの発掘作業のために粉砕されてしまった資料も多かったであろうと考えられる。そのことを示すように、5点の中の4点がトレンチ⑤と⑥の礫の少ない所から出土している。トレンチ⑧～⑩は、貝の包含量は多かったが、上層から下層まで礫が多く、出土する貝の多数が作業中に粉々になってしまった。

同図8はメンガイの貝輪状の破片で、貝の中央部が打ち抜かれている。研磨は施されていないようである。同図9はかなり風化しているがサラサバティと見られる貝を加工している。後述するイノシシの犬歯で作られた組み合わせの腕輪と予想される。

同図10の製品は、材料となった貝の種類が推定できないほど研磨して製作されている。これも風化が著しい。先端を研磨し尖らせている。

同図11の製品はリュウキュウタケに擦り切り技法で孔があけられ、12のタケノコガイが外から打ち抜くように孔をあけているのと対照的である。なお、タケノコガイ科の貝は、この2点だけが出土し、食料残渣としては出土していない。

貝製品出土一覧表

図版・写真番号	出土トレンチ (試掘穴N0.)	その他
図版42-8・写真63	トレンチ⑤ 黒褐色混貝土礫層	ウミギクガ科メンガイ
図版42-9・写真63	トレンチ⑨ 茶褐色混礫土層	ニシキウズガイ科 サラサバティ
図版42-10・写真63	トレンチ⑥ 黒褐色混貝土礫層	種不明
図版42-11・写真63	トレンチ⑤ 黒褐色混貝土礫層	タケノコガイ科リュウキュウタケ
図版42-12・写真63	トレンチ⑥ 黒褐色混貝土礫層	タケノコガイ科 タケノコガイ

骨製品出土一覧表

図版1・写真1	トレンチ⑧ 暗褐色混貝土礫層	ジュゴン肋骨
図版42-1・写真62	崖下地区 表土覆土層	ジュゴン右肋骨
図版42-2・写真62	トレンチ⑤ 赤褐色土層	ジュゴン肋骨
図版42-3・写真62	トレンチ⑨ 茶褐色混礫土層下部	ジュゴン肋骨
図版42-4・写真62	崖下地区 表土覆土層	ジュゴン肋骨
図版42-5・写真62	トレンチ⑨ 茶褐色混礫土層下部(淡黒色土層)	ジュゴン肋骨
図版42-6・写真62	崖下地区 表土覆土層	ジュゴン肋骨
図版42-7・写真62	崖下地区 表土覆土層(トレンチ④のⅢ層と接合)	ジュゴン肋骨
図版43-1・写真63	崖下地区 表土覆土層	ホオジロザメ科椎体
図版43-2・写真63	範囲確認調査 TP-20・Ⅱ層(攪乱層)	ホオジロザメ科椎体
図版43-3・写真63	範囲確認調査 TP-20・Ⅱ層(攪乱層)	イノシシ脛骨 左近位端
図版43-4・写真63	範囲確認調査 TP-32と33の間 Ⅱ層攪乱層	イノシシ脛骨 右近位端
図版43-5・写真63	トレンチ⑨ 茶褐色混礫土層	イノシシ脛骨
図版43-6・写真63	トレンチ⑧ 茶褐色混礫土層下部(緑色土)	イノシシ脛骨 骨幹部
図版43-7・写真63	トレンチ⑧ 茶褐色混礫土層下部(緑色土)	イノシシ脛骨
図版43-8・写真63	トレンチ⑩ 茶褐色混礫土層下部	イノシシ脛骨
図版43-9・写真63	トレンチ⑨ 茶褐色混礫土層	イノシシ肋骨
図版43-10・写真63	トレンチ⑤ 黒褐色混貝土礫層	イノシシ右脛骨
図版43-11・写真63	トレンチ⑧ 茶褐色混礫土層下部(緑色土)	右尺骨
図版43-12・写真63	トレンチ⑥ 混貝土礫層	イノシシ左脛骨
図版43-13・写真63	トレンチ⑧ 暗褐色混貝土礫層	イノシシ右脛骨
図版43-14・写真63	トレンチ⑨ 茶褐色混礫土層	種不明
図版43-15・写真63	トレンチ④ Ⅱ層攪乱層	イノシシ?
図版43-16・写真63	トレンチ⑤ 黒褐色混貝土礫層	イノシシ右脛骨
図版43-17・写真63	トレンチ⑥ 暗褐色混貝土礫層	クロダイ類脛骨
図版43-18・写真63	トレンチ④ Ⅱ層攪乱層?	イノシシ左脛骨後面
図版43-19・写真63	トレンチ⑨ 茶褐色混礫土層	イノシシ肋骨(軟骨)
図版43-20	トレンチ④ Ⅱ層攪乱層?	不明(骨錐の先端?)

図版・写真番号	出土トレンチ(試掘穴No.)	その他
図版44-1・写真65	トレンチ⑥	黒褐色泥貝土礫層 イノシシ右腔骨近位epiはずれ
図版44-2・写真65	トレンチ⑩	暗褐色泥貝土礫層 イノシシ右尺骨
図版44-3・写真65	範囲確認調査 TP-20・II層(攪乱層?)	イノシシ左尺骨
図版44-4・写真65	トレンチ⑥	表土覆土層 イノシシ右尺骨
図版44-5・写真65	トレンチ⑥	赤褐色泥貝土礫層 イノシシ右下顎骨
図版44-6・写真65	トレンチ⑨	茶褐色泥礫土層下部(淡黒色土層) イノシシ♂左犬歯
図版44-7・写真65	トレンチ④	Ⅲ層B イノシシ♂右犬歯
図版44-8・写真65	トレンチ⑩	茶褐色泥礫土層 イノシシ♂右犬歯下
図版44-9・写真65	トレンチ⑨	茶褐色泥礫土層下部(淡黒色土層) イノシシ♂右犬歯
図版44-10・写真65	トレンチ⑨	茶褐色泥礫土層下部(淡黒色土層) イノシシ♂左犬歯
図版44-11・写真65	トレンチ⑧	暗褐色泥貝土礫層 歯冠部加工 イノシシ右(I ₁)
図版44-12・写真65	トレンチ⑨	茶褐色泥礫土層下部(淡黒色土層) イノシシ♂左犬歯
図版44-13・写真65	トレンチ⑥	赤褐色泥貝土礫層 イノシシ♂左犬歯
図版44-14	室川貝塚崖下地区出土 ※参考資料	未加工 イノシシ犬歯
図版45-1・写真66	トレンチ⑥	赤褐色土層 イノシシ右尺骨
図版45-2・写真66	トレンチ⑨	茶褐色泥礫土層下部(淡黒色土層) イノシシ右尺骨
図版45-3・写真66	トレンチ⑥	黒褐色泥貝土礫層 イノシシ右尺骨
図版45-4・写真66	範囲確認調査 TP-24・II層(未攪乱包含層?)	イノシシ左尺骨
図版46-1・写真67	トレンチ④	Ⅲ層B イノシシ左尺骨
図版46-2・写真67	崖下地区	表土覆土層 イノシシ右尺骨
図版46-3・写真67	範囲確認調査 TP-24・I層表土攪乱層	イノシシ右尺骨
図版46-4・写真67	トレンチ④	Ⅲ層B イノシシ右尺骨
図版46-5・写真67	トレンチ⑥	赤褐色土層 ※加工の有無不詳 イノシシ右尺骨
図版46-6・写真67	トレンチ⑥	黒褐色泥貝土礫層 イノシシ右尺骨
図版47-1・写真68	崖下地区	表土覆土層 イノシシ左尺骨
図版47-2・写真68	トレンチ⑧	茶褐色泥礫土層下部(淡黒色土層) イノシシ左尺骨
図版47-3・写真68	トレンチ⑥	表土覆土層 イノシシ左尺骨
図版47-4・写真68	範囲確認調査 TP-20・Ⅲ層B ※加工の有無不詳	イノシシ左尺骨
図版47-5・写真68	崖下地区	表土覆土層 イノシシ左尺骨
図版47-6・写真68	トレンチ④	II層攪乱層? イノシシ左尺骨
図版47-7・写真68	範囲確認調査 TP-24・II層(未攪乱包含層?)	イノシシ左尺骨
図版47-8・写真68	トレンチ⑤	表土覆土層 イノシシ左尺骨
図版47-9・写真68	トレンチ⑧	茶褐色泥礫土層下部(淡黒色土層) イノシシ左尺骨
図版47-10・写真68	トレンチ⑤	表土覆土層 イノシシ左尺骨

4. 骨製品

骨製品は貝製品と対照的に62点もの多数が出土している。それは貝類がボロボロの状態で出土したのに対し、獣魚骨の保存状態が良好であったことに起因するであろう。層序が比較的明確なトレンチ⑤～⑩でみると、イノシシの製品は最下層から表土まで各層から出土している。ところがジュゴンの製品は、トレンチ⑧の1点が最下層の暗褐色混貝土礫層から出土している以外は、表土・覆土層とその直下の茶褐色混貝土礫層から出土している。崖下地区でのジュゴン肋骨製品の出土状況からは、ジュゴンの利用は、カヤウチバンタ式以降の肥厚口縁土器の時期に活発になったのではないかという可能性を示唆しているように思える。

ジュゴン製品

図版1と図版42-1～7はジュゴンの肋骨製品である。図版1の保存状態が最も良好な製品で、トレンチ⑧の最下層から出土した。孔は両面から穿孔され、上方に糸擦れ痕が見られる。図下方の先端部付近はツルツルの状態で、柔らかい布などのようなもので磨きあげたようになっている。図版42-5・6は、図版1のような製品の破片と見られる。

図版42-2はトレンチ⑤の赤褐色土層から出土した。同層からは、仲原式の外耳に鬘文あるいは雷文系の沈線が施された土器が出土している。

図版42-3は切り込み状の加工や擦り切りの痕跡が残されている。製作途中で破損し棄てられたようである。同図3・4には、打割や擦り切りの痕跡がみられる。同図7は、研ぐようにして面を作っており、製品を作る準備途中と考えられる例である。

イノシシ製品

イノシシの骨を材料とした資料の中で最も多く出土したのは、骨錐と呼ばれる尺骨を加工した製品ではほぼ完全な形の資料が12点も出土している。先端部は使い込まれてツルツルになっている。図版45-3・4を見ると、製作間もない段階の3から4のように使い込んでいくうちに短くなっていくようすが観察される。図版43-13の脛骨の製品も、この骨錐のような用途と観察される。

骨錐のように決まった形をした製品として、図版43-3～5・7・8・10・12の骨針と呼ばれる腓骨を加工した製品がある。先端部を見ると尖らせるときの研磨面が擦り減らないまま残されており、編み針などの実用品とは考えがたい。

図版43-18・19の2点は、鋸あるいは銛と見られる。18は保存状態が良好で全面が研磨されている。19は加工状況の観察ができないほど表面が風化している。

図版44-6・7・9・10・12・13は、イノシシの犬歯を腕輪や垂飾品などに用いたと見られる例。同図8は骨錐のように尖らせた例。同図11はノミ状に加工されている。

崖下地区出土貝種一覽表

海産貝

巻貝 (13科31種) ※種不明を除く

1	アキガイ科ガンゼキボラ	[Chicoreus brunneus]
2	アマオブネガイ科アマオブネ	[Nerita albicilla]
3	イトマキボラ科イトマキボラ	[Pleuroploca trapezium]
4	イトマキボラ科ヒメイトマキボラ	[Pleuroploca trapezium paeteli] a1
5	イモガイ科クロミナシガイ	[Conus marmoratus]
6	エゾバイ科イソニナ	[Japauthria ferrea] a1
7	オニコブシガイ科オニコブシガイ	[Vasum ceramicum]
8	オノノツノガイ科オノノツノガイ	[Cerithium nodulosum] a1
9	スイショウガイ科クモガイ	[Lambis lambis]
10	スイショウガイ科スイジガイ (突起部)	[Lambis chiragra]
11	スイショウガイ科ラクダガイ	[Lambis truncata]
12	スイショウガイ科オハダガイ	[Canarium urceum] a1
13	スイショウガイ科スイショウガイ	[Strombus canarium]
14	スイショウガイ科マガキガイ	[Strombus luhuanus]
15	タカラガイ科キロダカラガイ	[Cypraea moneta]
16	タカラガイ科タルダカラガイ	[Cypraea talpa]
17	タカラガイ科ハチジョウダカラガイ	[Cypraea mauritiana]
18	タカラガイ科ヒメホシタカラガイ	[Cypraea lynx]
19	タカラガイ科ホシキヌタガイ	[Cypraea vitellus]
20	タカラガイ科ホシダカラガイ	[Cypraea tigris]
21	タカラガイ科ホソヤクシマダカラガイ	[Cypraea eglantina duclos] a2
22	タカラガイ科ムラクモダカラガイ	[Cypraea testudinaria]
23	タカラガイ科ヤクシマダカラガイ	[Cypraea arabica]
24	タマガイ科シロヘソアキトミガイ	[Polinices albula?]
25	タマガイ科ホウシュウノタマガイ	[Natica gualtieriana]
26	ナツメガイ科ナツメガイの破片	[Bulla vernicosa]
27	ニシキウズガイ科ギンタカハマ	[Tectus pyramis]
28	ニシキウズガイ科サラサバティ	[Trochus niloticus]
29	ニシキウズガイ科ベニシリダカ	[Trochus conus]
30	リュウテンサザエ科カンギクガイ	[Lunella granurata]
31	リュウテンサザエ科チョウセンサザエ	[Turbo argyrostomus]
32	リュウテンサザエ科チョウセンサザエの蓋	[Turbo argyrostomus] ※戦後ゴミの混入あり(表)
33	スイショウガイ科 (突起部: 種不明)	[Strombidae] ※クモガイ or スイジガイ
34	タマガイ科 (種不明)	[Naticidae]
35	ニシキウズガイ科 (種不明)	[Trochidae]

二枚貝 (12科27種) 未種不明を除く

- | | |
|----------------------------|--|
| 36 ウグイスガイ科アコヤガイ | [<i>Pinctada fucata</i>] |
| 37 ウグイスガイ科マベガイ | [<i>Pteria penguin</i>] |
| 38 ウミキクガイ科メンガイ | [<i>Spondylidae squamosus</i>] |
| 39 ザルガイ科カワラガイ | [<i>Fragum unedo</i>] |
| 40 ザルガイ科リュウキュウザルガイ | [<i>Acrosterigma flava</i>] |
| 41 シャコガイ科シャゴウガイ | [<i>Hippopus hippopus</i>] |
| 42 シャコガイ科シラナミガイ | [<i>Tridacna maxima</i>] |
| 43 シャコガイ科ヒメジャコガイ | [<i>Tridacna crocea</i>] |
| 44 シャコガイ科ヒレジャコガイ | [<i>Tridacna squamosa</i>] |
| 45 シュモクアオリガイ科シュモクアオリガイ | [<i>Isognomon isognomonum</i>] ₂₁ |
| 46 チドリマスオガイ科イソハマグリ | [<i>Atactodea striata</i>] |
| 47 ニッコウガイ科サメザラガイ | [<i>Scutarcopagia scobinata</i>] |
| 48 フネガイ科エガイ | [<i>Barbatia lima</i>] ₂₃ |
| 49 フネガイ科リュウキュウサルボウガイ | [<i>Anadara antiquata</i>] |
| 50 マルスダレガイ科アラスジケマンガイ | [<i>Gafrarium tumidum</i>] |
| 51 マルスダレガイ科イオウハマグリ | [<i>Pitar sulfreum</i>] |
| 52 マルスダレガイ科オキシジミ | [<i>Cyclina sinensis</i>] |
| 53 マルスダレガイ科カガミガイ | [<i>Phacosoma japonicum</i>] ₂₃ |
| 54 マルスダレガイ科スダレハマグリ | [<i>Katelysia japonica</i>] |
| 55 マルスダレガイ科タイワンシラオガイ | [<i>Circe scripta tumefacta</i>] ₂₂ |
| 56 マルスダレガイ科ヌノメガイ | [<i>Pteriglypta puerpera</i>] |
| 57 マルスダレガイ科ハマグリ | [<i>Meretrix lusoria</i>] ₂₃ |
| 58 マルスダレガイ科ヒナガイ | [<i>Dosinorbis bilunulatus</i>] ₂₃ |
| 59 マルスダレガイ科ホソスジイナミガイ | [<i>Gafrarium pectinatum</i>] |
| 60 マルスダレガイ科リュウキュウアサリ | [<i>Tapes literatus</i>] |
| 61 ミミガイ科ミミガイ | [<i>Haliotis asinina</i>](戦後に捨てられた可能性大) |
| 62 リュウキュウマスオガイ科リュウキュウマスオガイ | [<i>Asaphis violascens</i>] |
| 63 イタボガキ科 (種不明) | [<i>Ostreidae</i>] |
| 64 イタボガキ科 (マガキorイワガキ) | [<i>Crasostrea gigas</i>] |
| 65 ウグイスガイ科 (種不明) | [<i>Pteriidae</i>] |
| 66 カキの一種 (種不明) | [?] |
| 67 マルスダレガイ科 (種不明) | [<i>Veneridae</i>] |

陸産貝 (5科7種)

- | | | |
|----|-----------------------|--|
| 68 | オナジマイマイ科イトマンマイマイ | [<i>Aegista scepasma</i>] |
| 69 | カワニナ科カワニナ | [<i>Semisulcospira libertina</i>] |
| 70 | キセルガイ科ツヤギセルガイ | [<i>Luchuphaedusa praeclara</i>] |
| 71 | ナンバンマイマイ科オキナワヤマタカマイマイ | [<i>Satsuma largillierti</i>] |
| 72 | ナンバンマイマイ科カツレンマイマイ | [?]燻化石種 |
| 73 | ナンバンマイマイ科シュリマイマイ | [<i>Satsuma mercatoria mercatoria</i>] |
| 74 | ヤマタニシ科オキナワヤマタニシ | [<i>Cyclophorus turgidus turgidus</i>] |

汽水産 (2科2種)

- | | | |
|----|---------------|-------------------------------------|
| 75 | ウミナナ科イトカケヘナタリ | [<i>Cerithidea rhizophorarum</i>] |
| 76 | シジミガイ科シレナシジミ | [<i>Geloina coxans</i>] |

参考文献

- | | | |
|------|-----------------------|---------------|
| 註記なし | 黒住耐二・久保弘文『沖縄の海の貝・陸の貝』 | 1995年8月 沖縄出版 |
| 註1 | 波部忠重・奥谷喬司『学研生物図鑑／貝Ⅰ』 | 1994年3月 学習研究社 |
| 註2 | 鹿間時夫『原色図鑑／続・世界の貝』 | 1971年4月 北隆社 |
| 註3 | 波部忠重・奥谷喬司『学研生物図鑑／貝Ⅱ』 | 1994年3月 学習研究社 |

その他

イノシシとジュゴン以外の獣魚骨を用いた例として、図版43-1・2のホオジロザメ科の椎体に孔をあけた例と、クロダイ類の腎臓の一端を尖らせた例がある。

5. 自然遺物

崖下地区で出土した遺物は、第2次大戦後の現代遺物などを除くと土器・石器・骨製品・貝製品の人口遺物と獣魚骨や貝類の食料残滓に分類される。なお、「獣魚骨」や「貝類」の出土一覧表などのデータは膨大な量なので、今後に報告する「馬上原遺跡」の報告に含めることになった。

貝類

層序の頁で述べたように、崖下地区の発掘調査は、礫層を崩しながらの作業の連続であった。そのために土器・石器などの人口遺物や獣魚骨・貝類などの食料残滓なども礫とともに転がり出てくる状況であった。当初は、一定の範囲を何か所か設定し、食料残滓などの徹底的なサンプリングを予定していた。しかし、径が1mを越える大きな石灰岩が多く、単位面積における深さ別の貝の出土状況を把握することが不可能な事が明らかとなった。また、出土する貝も粉々に粉砕されている例が多く、何とか形が残る資料だけを収集することになった。

本文では、とりあえず崖下地区における貝類について、表土・覆土層から最下層までに出土した全貝種の一覧表を掲載するだけにした。

おわりに

すでに述べてきたように室川貝塚崖下地区の記録保存発掘調査は、崖面の崩壊や落石に注意しながらの作業であった。発掘作業中に作業員の一人が軽いケガをしたが、大きな事故や災害の起きなかったことは幸いであった。

範囲確認調査までさかのぼると、崖下地区での調査は1年半以上の長期間に及んでいる。初期の草刈り作業中でも、ハブを捕獲退治するなどの危険があった。また、発掘現場までの道がなく、多量に出土する石灰岩を積み上げて発掘現場への進入路を整備した。

発掘作業と言うより、石を割っては片付ける作業の連続で、いつしか現場のことを「室川採石場」などと笑い飛ばす日々であった。このように危険で大変な作業ばかりの発掘が無事終了したことを作業員の方々に感謝したい。

弥生土器

学術的な成果としては、弥生式土器の出土が筆頭に挙げられる。これまで沖縄県内では、弥生式土器の出土は、海岸沿いの遺跡から出土している。本貝塚のように内陸部で出土したのは、はじめての例である。

琉球石灰岩台地の広がる沖縄本島中南部の遺跡分布を見ると、本土の縄文時代後期から晩期に相当する時期には内陸部にも遺跡が分布している。これが弥生時代になるとサンゴ礁の発達した海岸だけに限られる。そこには弥生時代の交易品であるゴホウラや大形のイモガイなどの採れる海がある。

室川貝塚では、縄文時代後期の伊波式土器から縄文時代晩期の宇佐浜式、さらには弥生時代の初頭まで存続したと考えられる仲原式まで各型式の土器が連続的に出土している。これが弥生土器の登場と同時に、突然寸断されてしまう。

弥生時代は稲作が普及し定着した時代とされ、沖縄でも弥生土器の出土と稲作の開始が論議されている。室川貝塚や仲宗根貝塚の立地する琉球石灰岩台地の周辺には、鳥尻層との不整合面から湧き出る水源が見られる。周辺が都市化する以前は、これらの水源の直下は「ナーシルダー(苗代田)」となっていたと聞く。古代においても稲作には、有利な土地だったと考えられる。

弥生土器の出土した遺跡を見ると、読谷村の西海岸や伊江島などのように稲作に不適な赤土の鳥尻マージ土壌の地域が多い。このように沖縄における弥生時代相当期の遺跡の分布を見ると、弥生土器の流入と稲作の開始が直接には結びつきそうもない。

柱状片刃石斧

弥生土器とともに注目される資料として、柱状片刃石斧に類似する石斧がある。この石斧の類例品は、糸満市真栄里貝塚や西原町我謝遺跡で報告されている。本貝塚出土の石斧と同様に両遺跡の資料も破損しており、九州などで出土する柱状片刃石斧との比較検討を行うには問題が残される。

この石斧が弥生時代の遺物であるかについて見ると、本貝塚では縄文時代後期からグスク時代までの遺物が含まれる表土・覆土層からの出土で時期は不明である。ところが我謝遺跡はフェンサ下層式土器やグスク時代の遺物が出土し、古くても8世紀～9世紀と考えられる。現段階では、この石斧は柱状片刃石斧と「似て非なるもの」の可能性が残されている。

参考文献

高宮廣衛「沖縄・奄美考古学の展望から」『沖縄の先史遺跡と文化』

第一書房1994年3月

高宮廣衛・新田重清・上地千賀子「糸満市真栄里貝塚発掘調査概報」—石器篇—
『南島考古』第13号

沖縄考古学会1993年12月

『我謝遺跡』—分譲宅地造成に係る緊急発掘調査—西原町文化財調査報告書第5集
西原町教育委員会1983年

友寄英一郎・嵩元政秀「フェンサ城貝塚調査概報」琉球大学邦文学部紀要社会篇
第13号

1969年4月

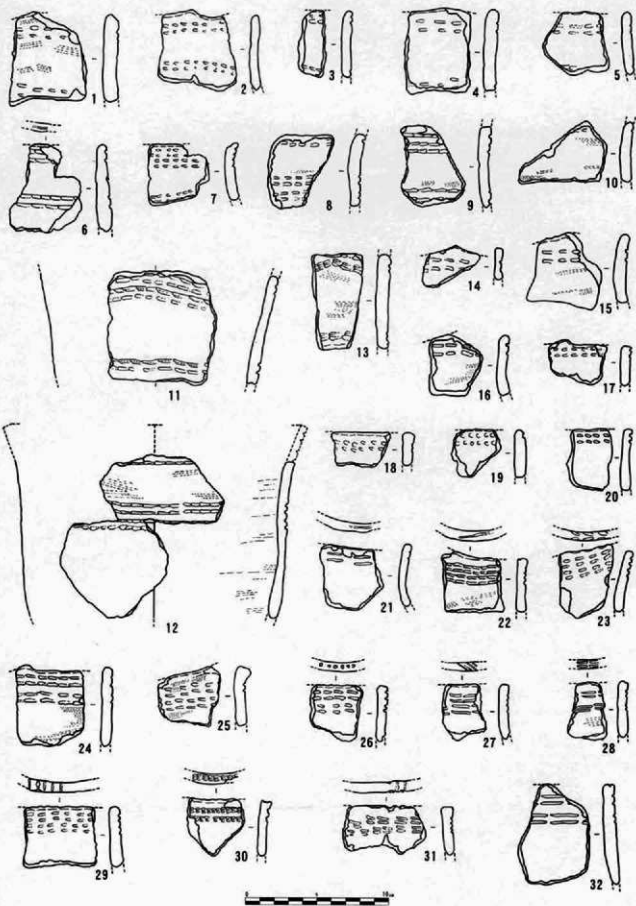
沖縄市文化財調査報告書第20集

室川貝塚

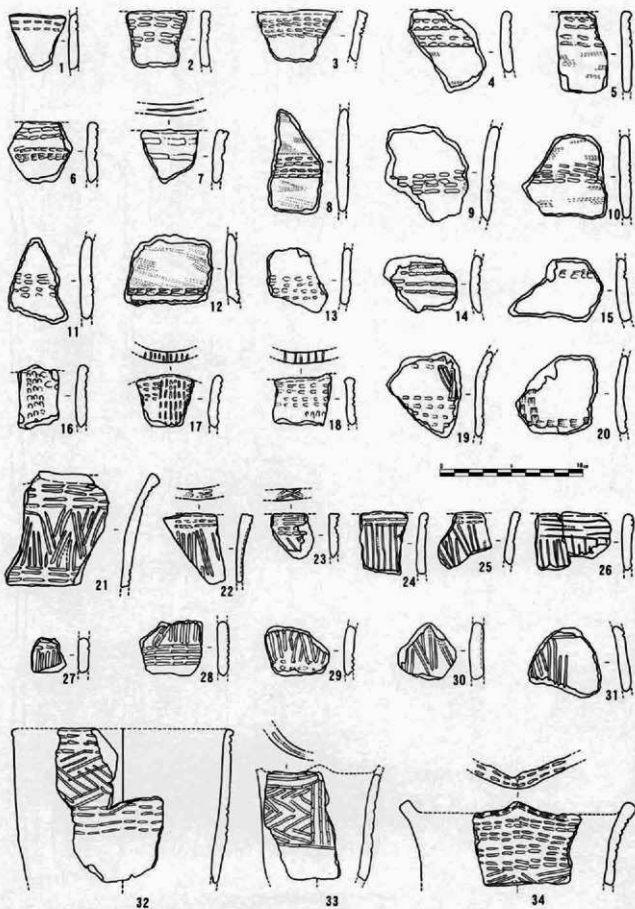
— 沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書 —

1997年

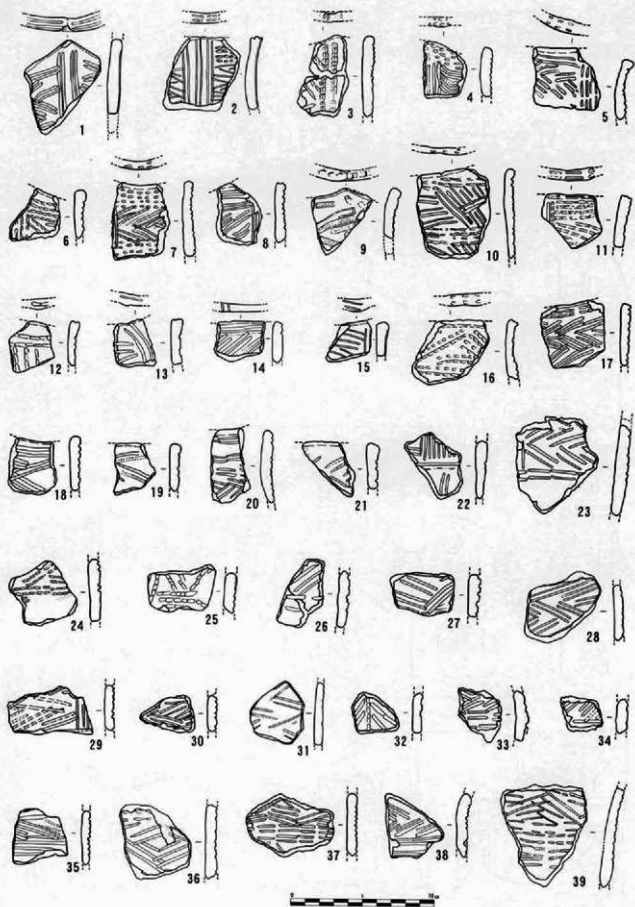
沖縄市教育委員会



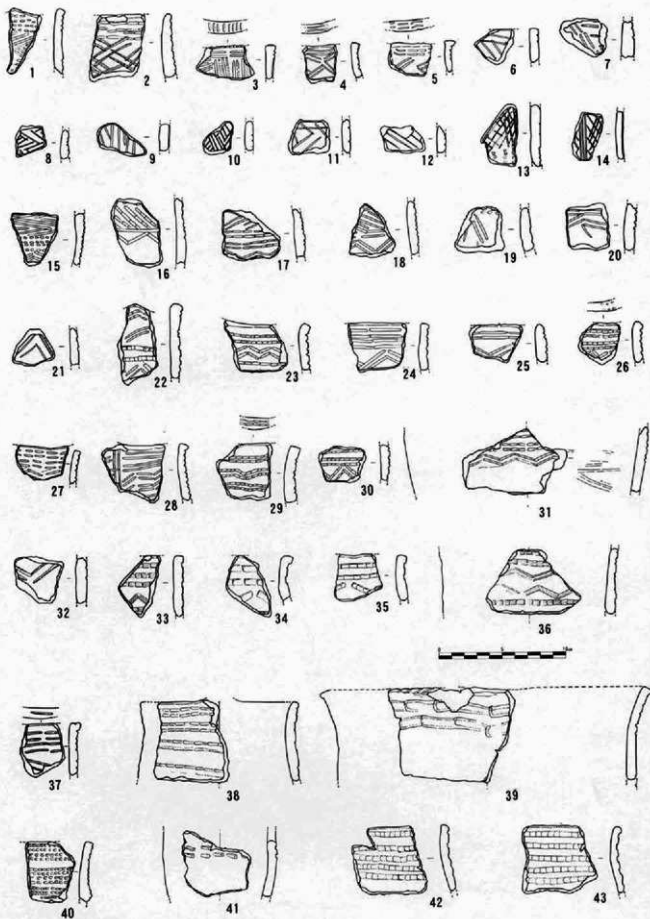
図版 2 第 1 群伊波式土器



图版 3 第 1 群伊波式土器



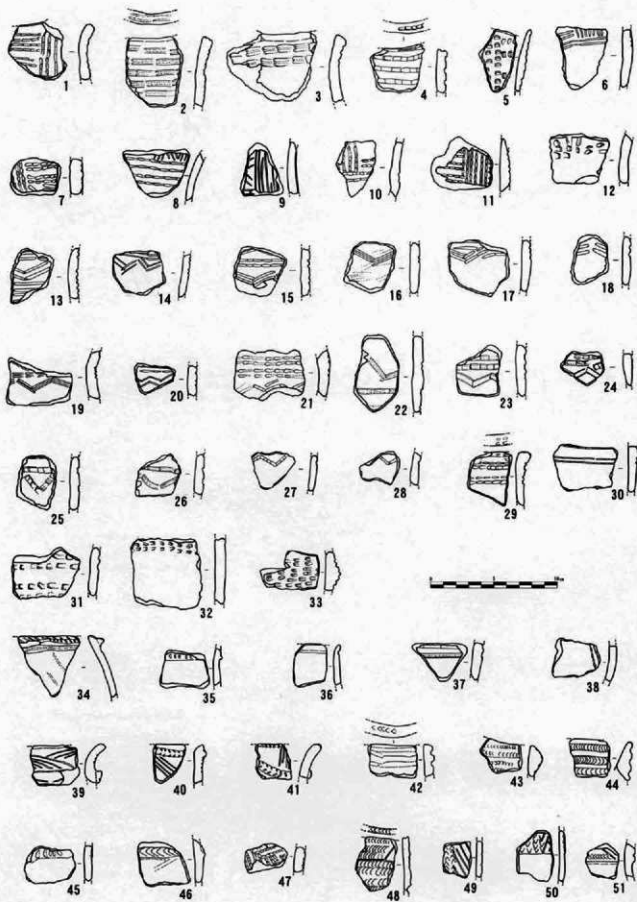
図版4 第1群伊波式土器



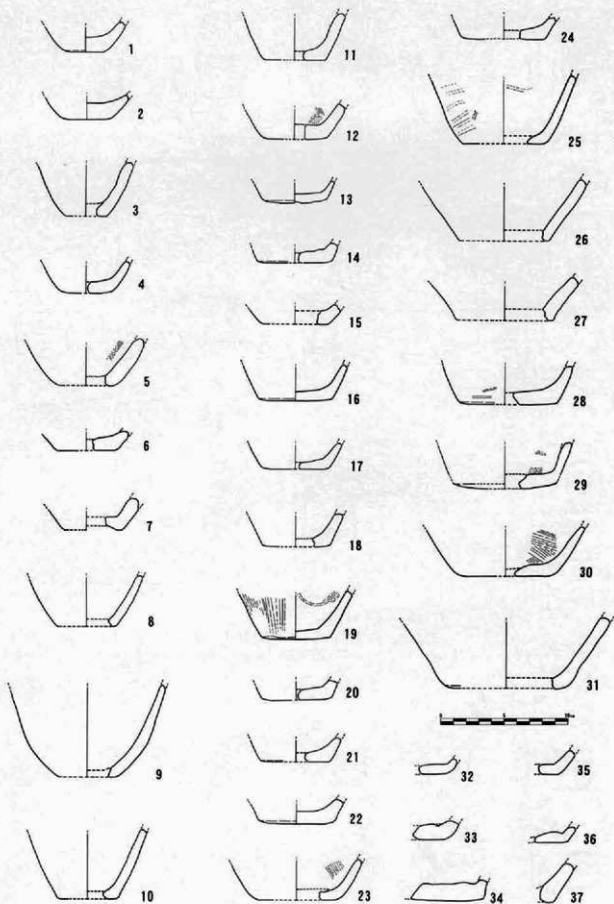
图版 5 第 1 群伊波式·获堂式土器·大山式土器



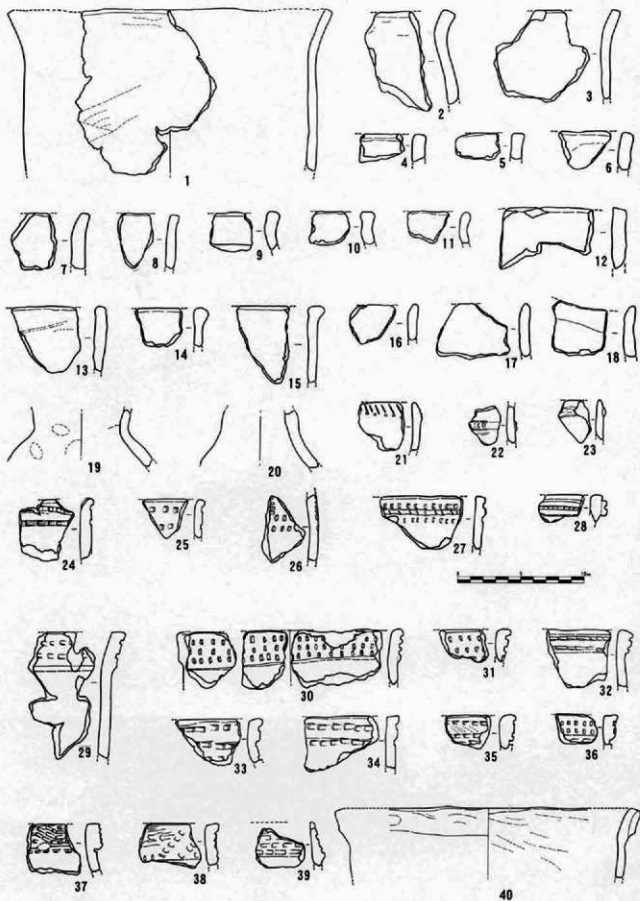
図版 6 第1群伊波式・荻堂式 (山形口縁・突起)



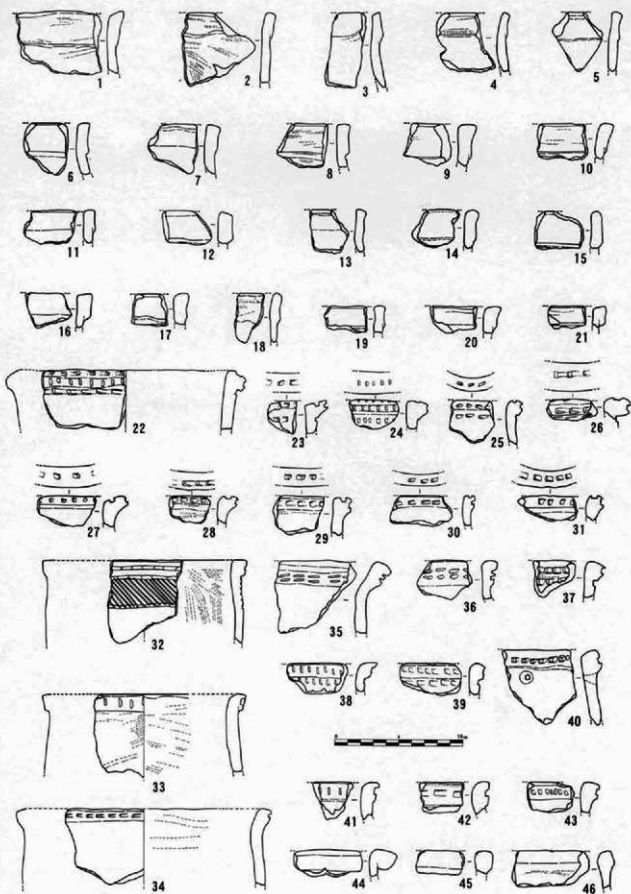
図版7 第1群伊波~大山式・その他・面縄前庭式・字宿下層式



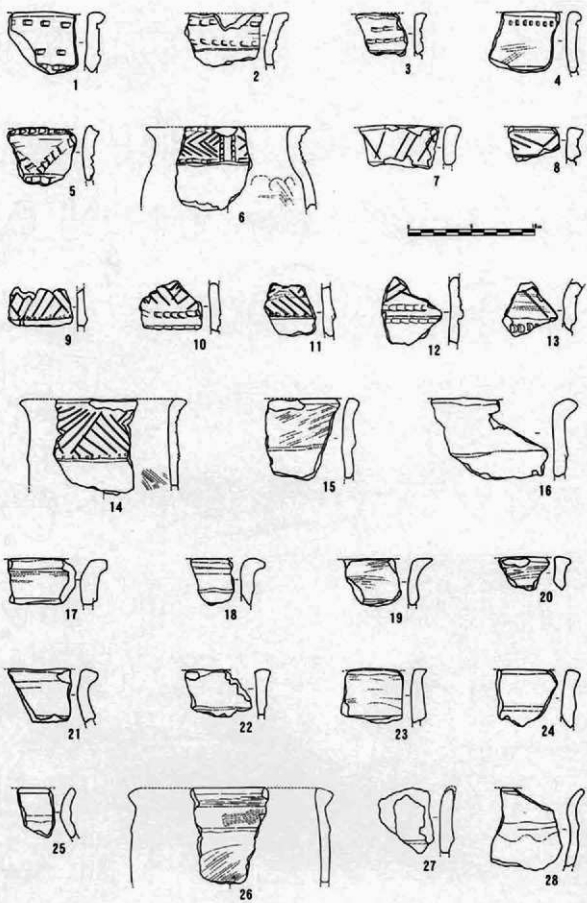
图版 8 第 1 群底部 (伊波式—大山式土器)



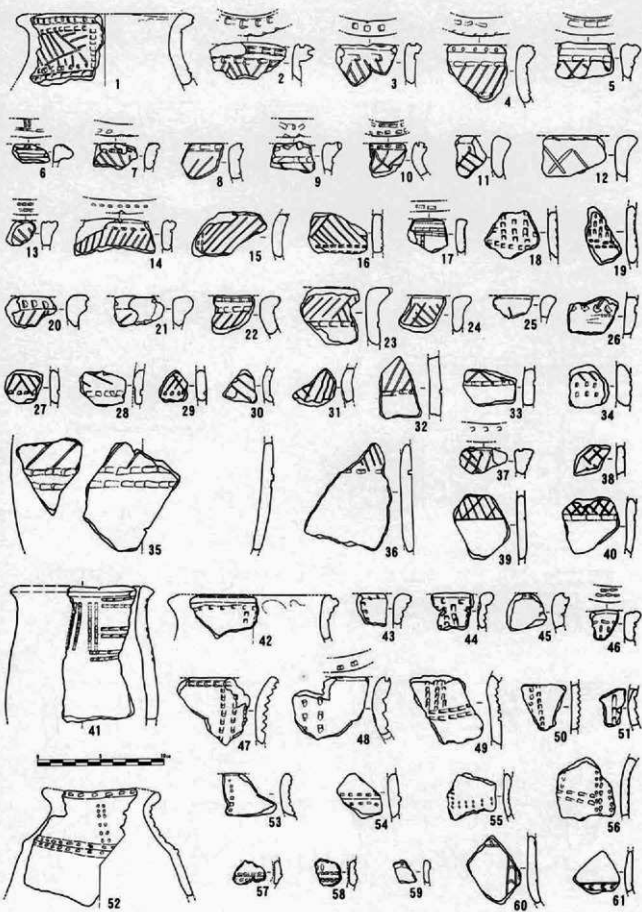
図版9 第1群無文土器等・第2群カウチバンタ式土器



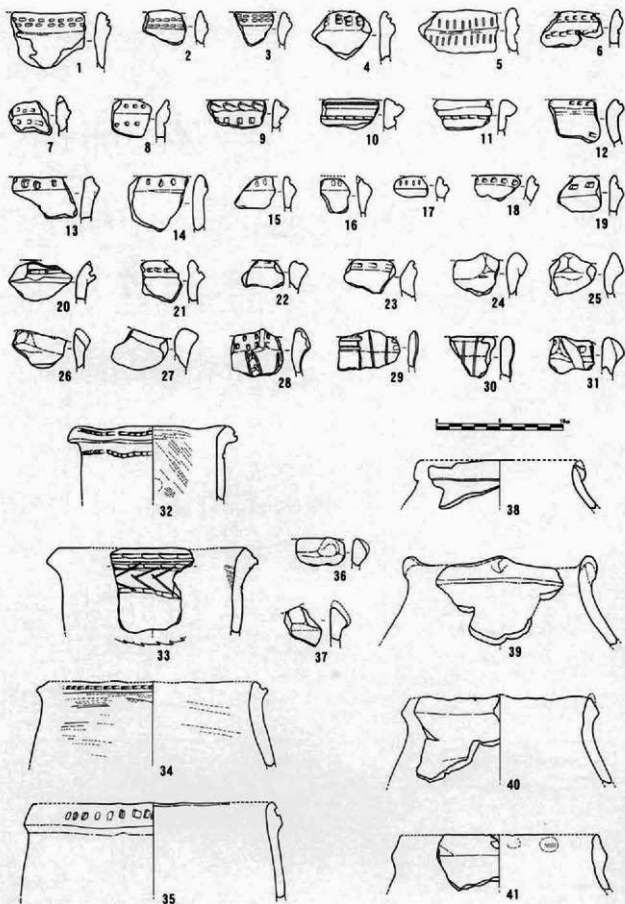
図版10 第2群肥厚口縁グループ (カヤウチバンタ式・その他)



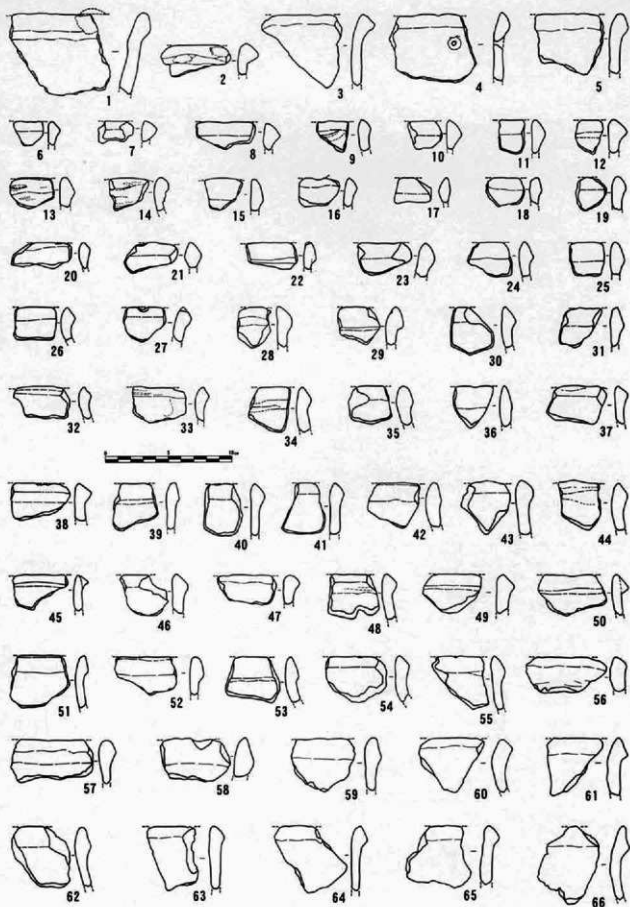
図版11 第2群肥厚口縁グループ (面縄西洞式等)



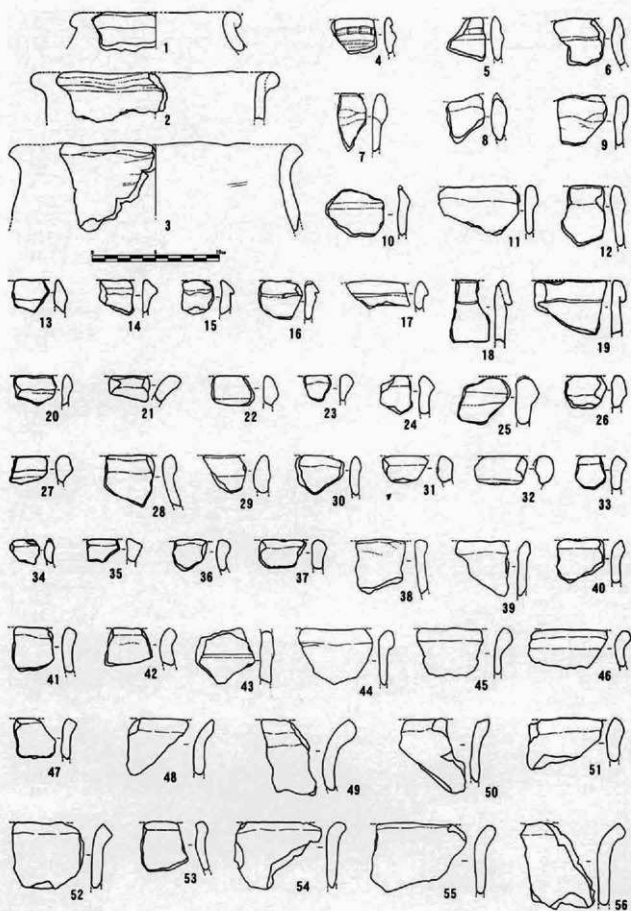
図版12 第2群肥厚口縁グループ (面縄西洞式・喜念1式等)



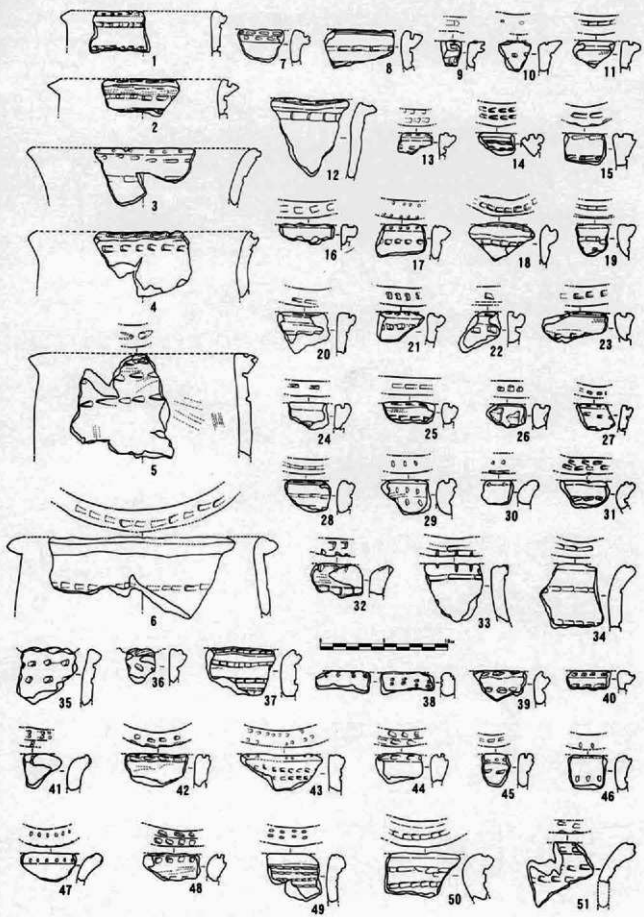
図版13 第2群肥厚口縁グループ (宇佐浜式)



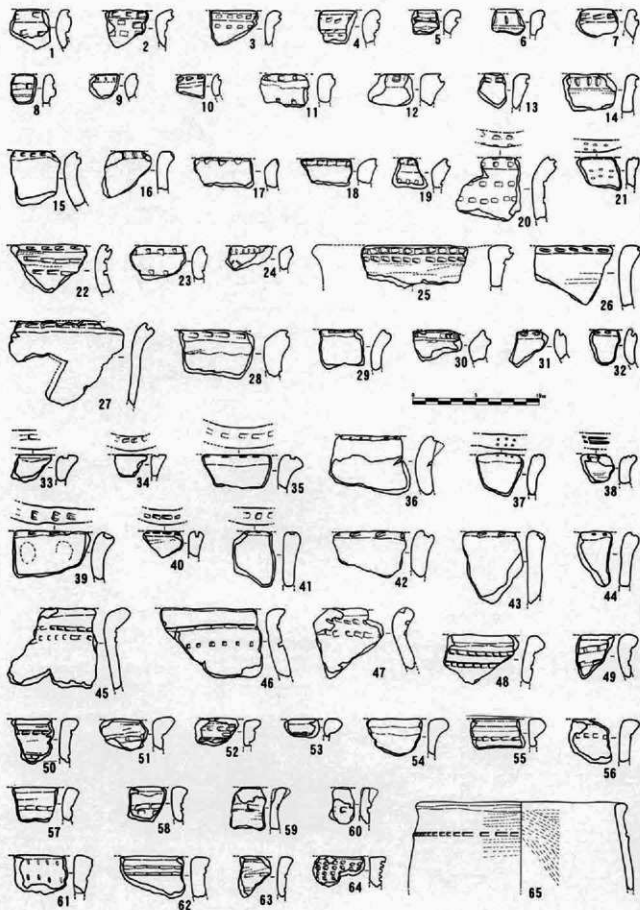
図版14 第2群肥厚口縁グループ (宇佐浜式)



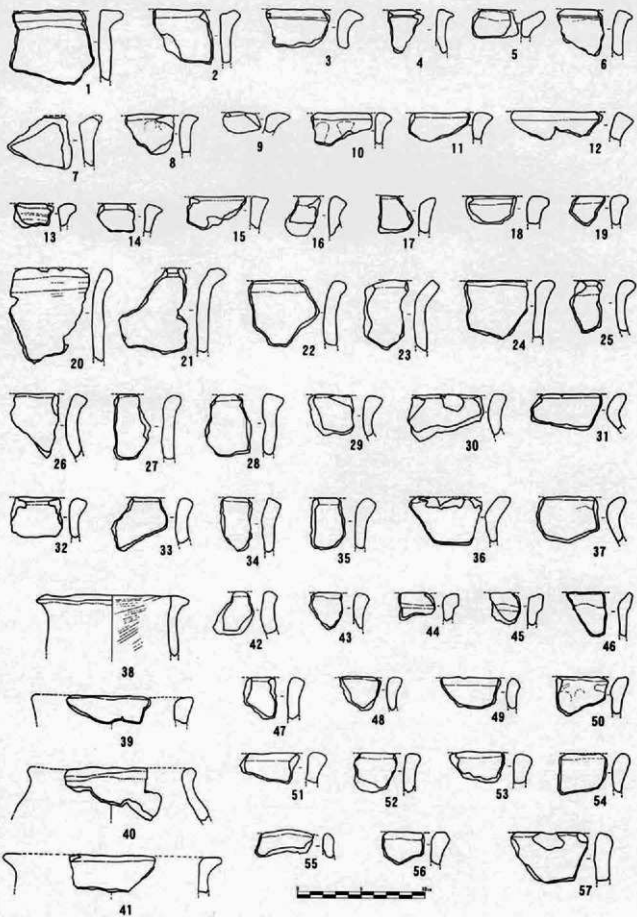
図版15 第2群肥厚口縁グループ (宇佐浜式)



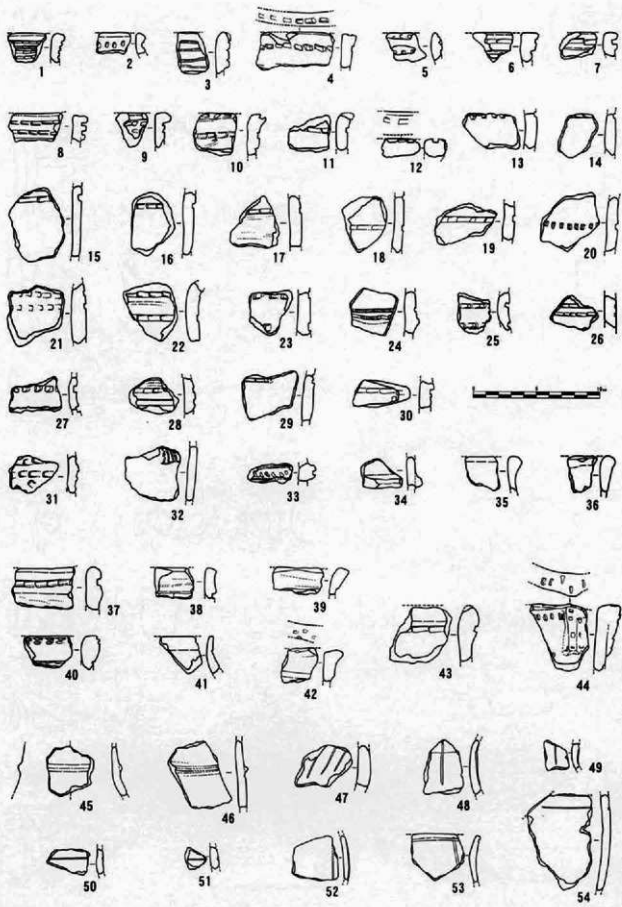
図版16 第2群肥厚口縁グループ (有文)



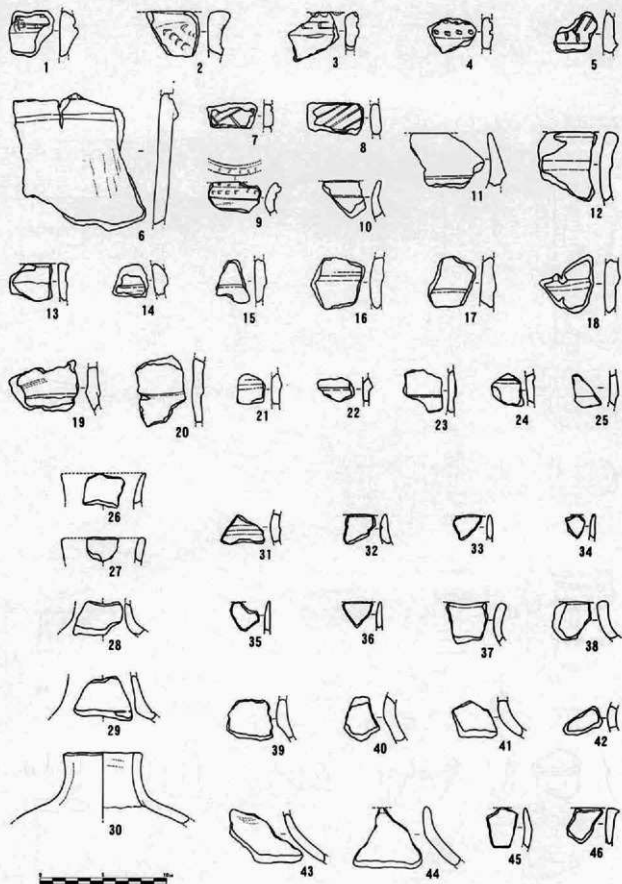
図版17 第2群肥厚口縁グループ (有文)



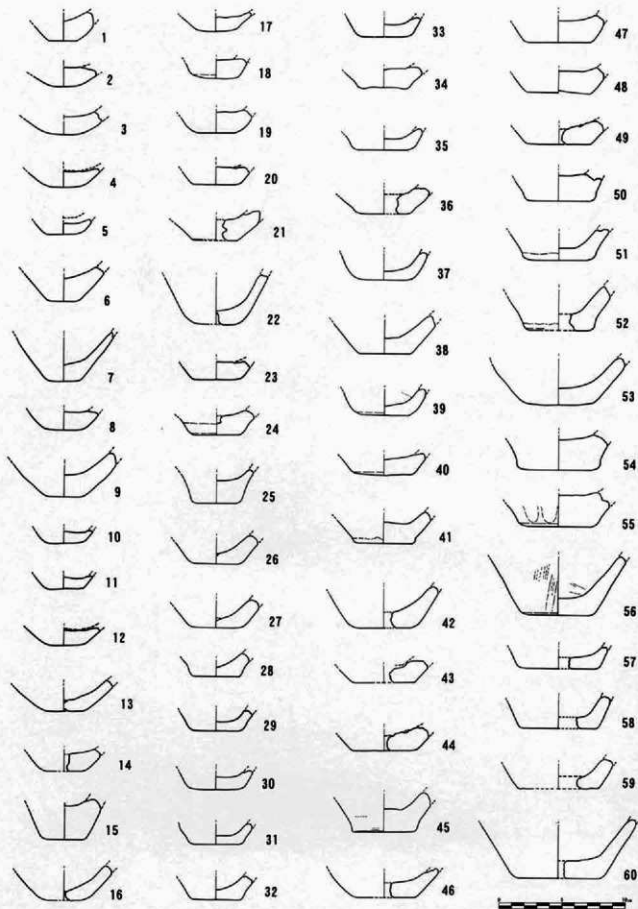
図版18 第2群肥厚口縁グループ (無文)



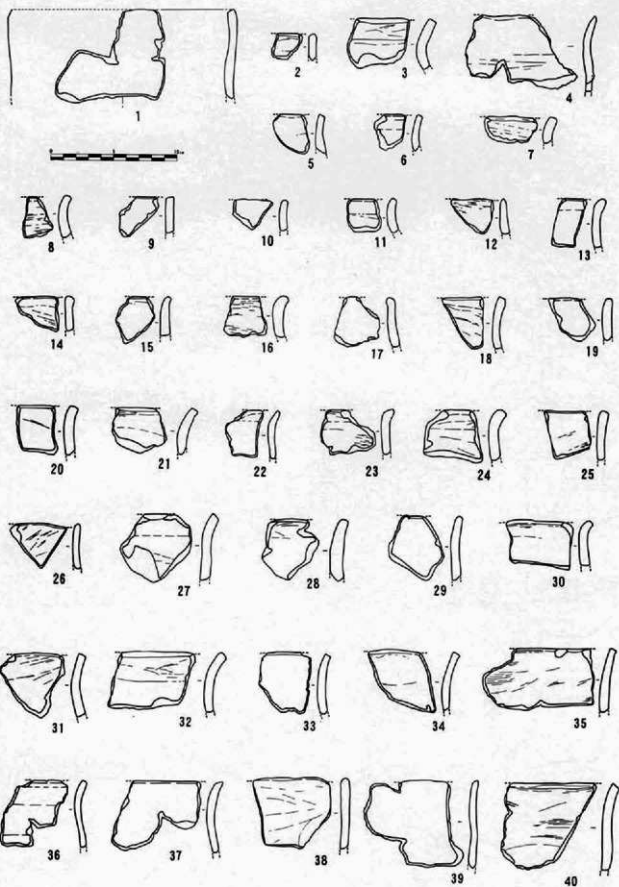
図版19 第2群肥厚口縁グループと見られる土器



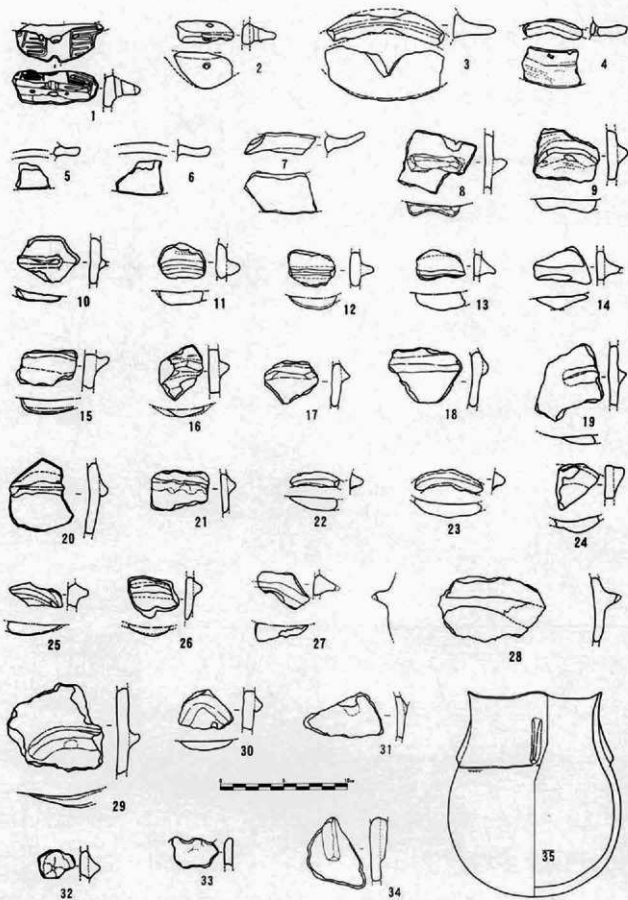
図版20 第2群肥厚口縁グループと見られる土器・壺形土器（肥厚口縁期）



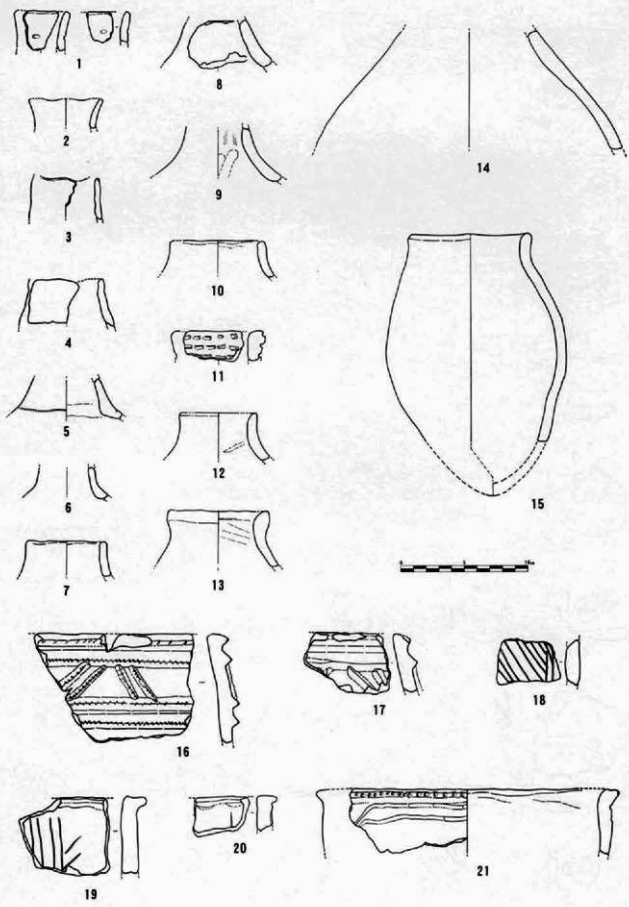
図版21 第1群大山式～第2群の底部



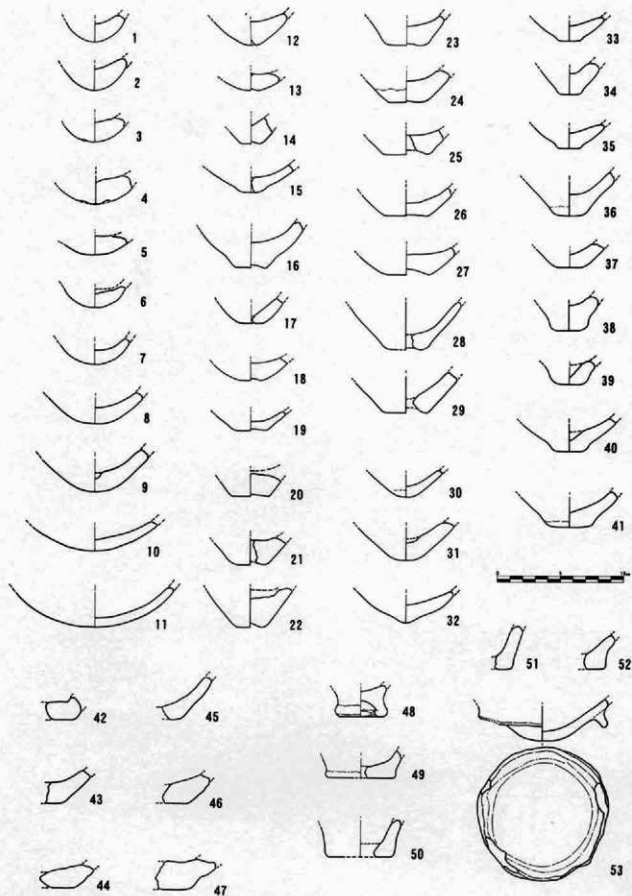
图版22 第3群仲原式土器



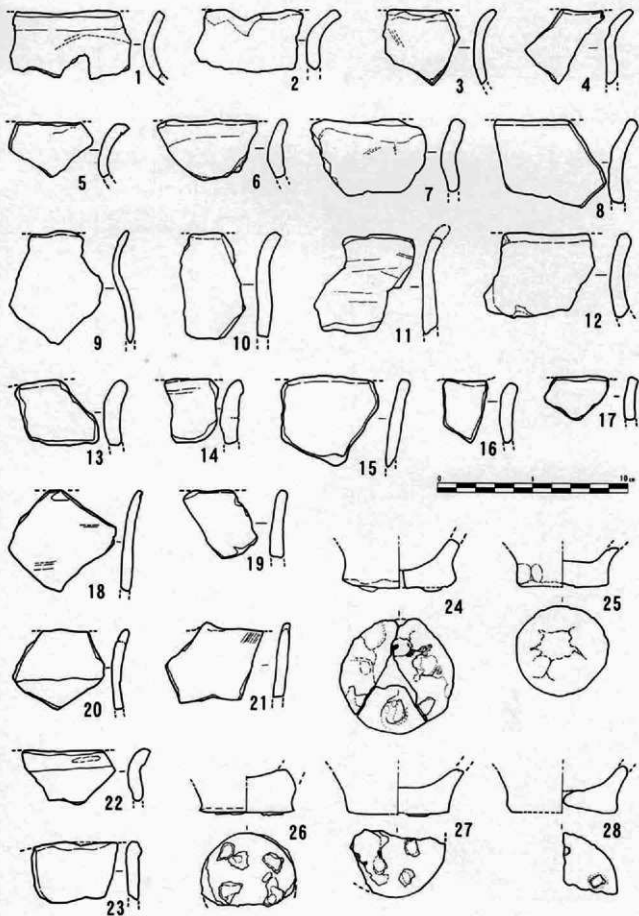
図版23 第3群仲原式土器（外耳片など）



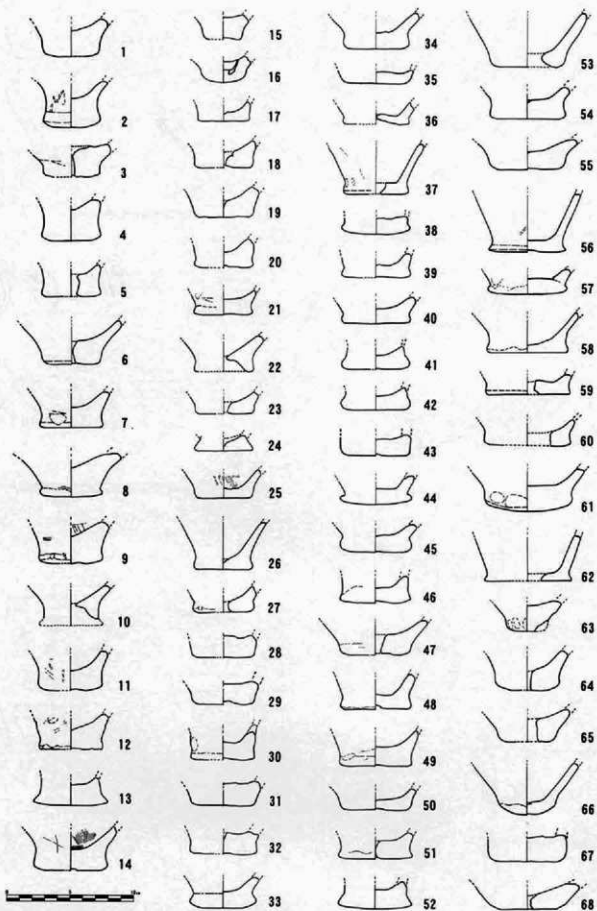
図版24 第2群～第3群の壺形土器と弥生土器



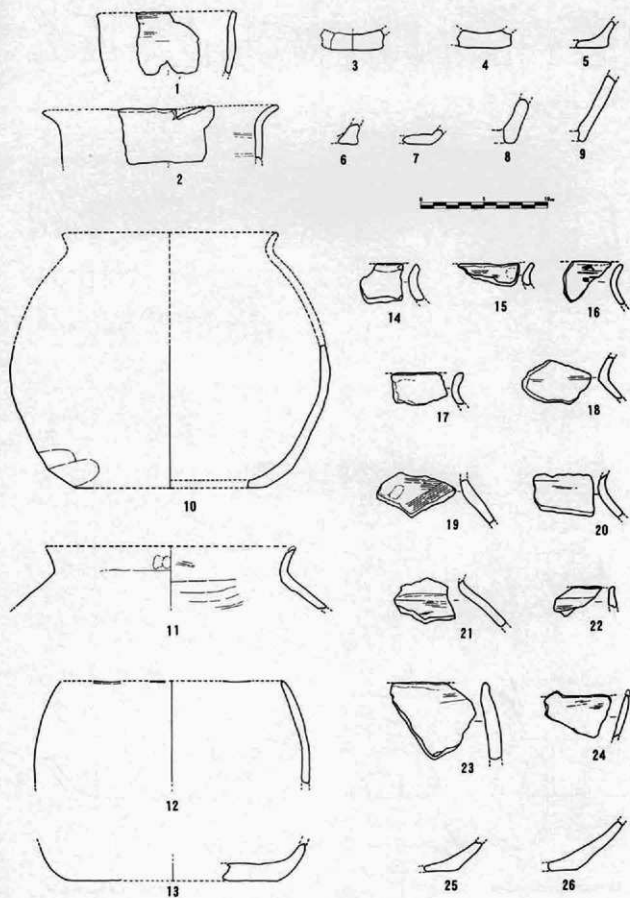
図版25 第2群～第3群の底部



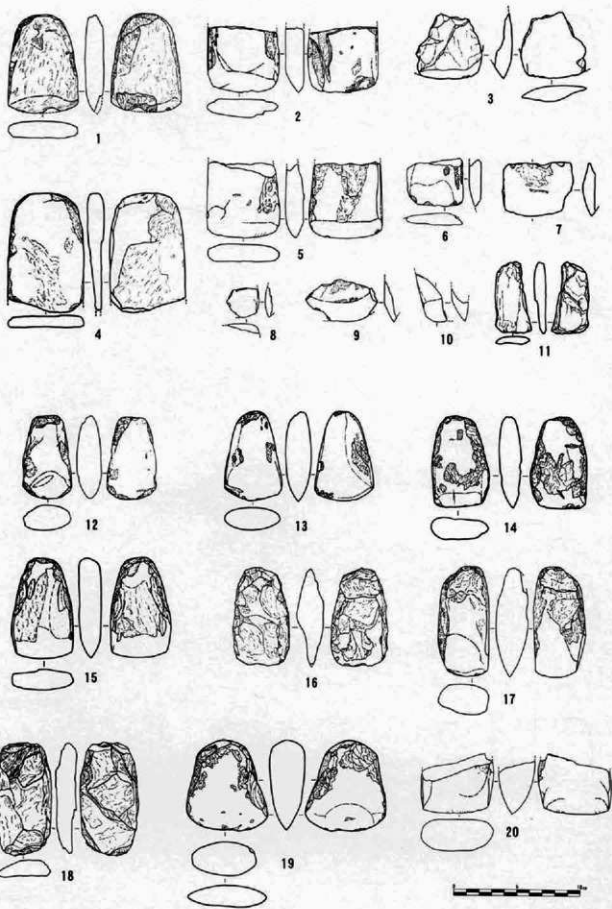
図版26 第4群フェンサ下層式



図版27 第4群フェンサ下層式底部



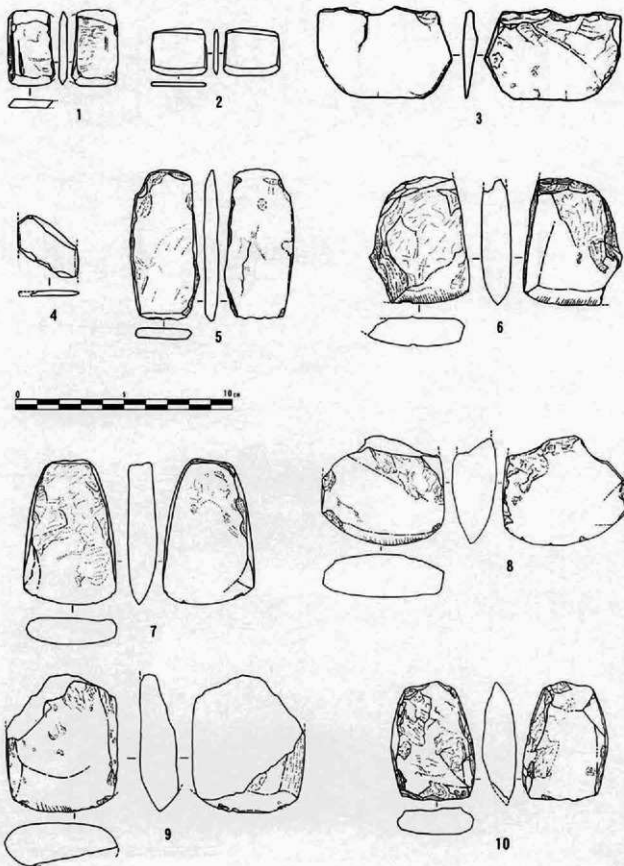
図版28 第4群フェンサ下層式・第5群フェンサ上層式



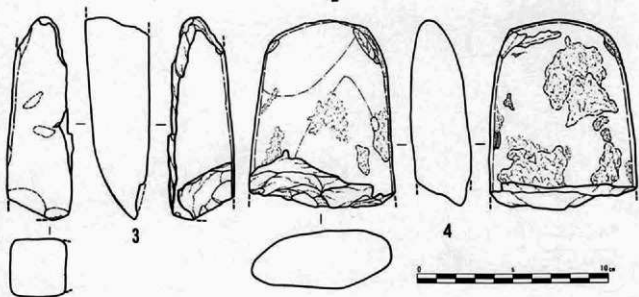
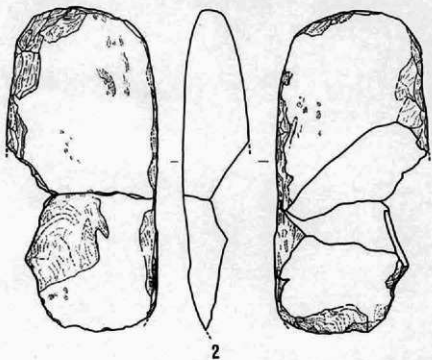
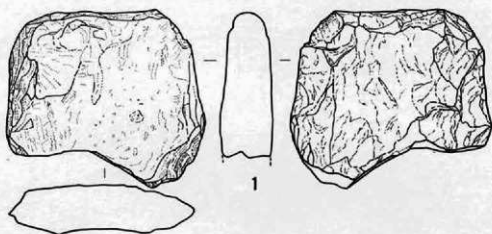
图版29 磨製石斧



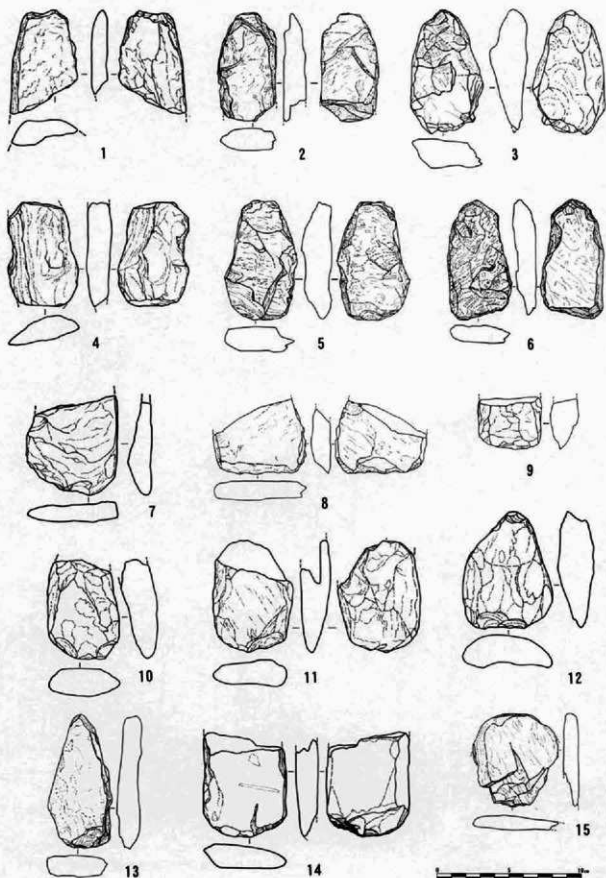
图版30 磨製石斧



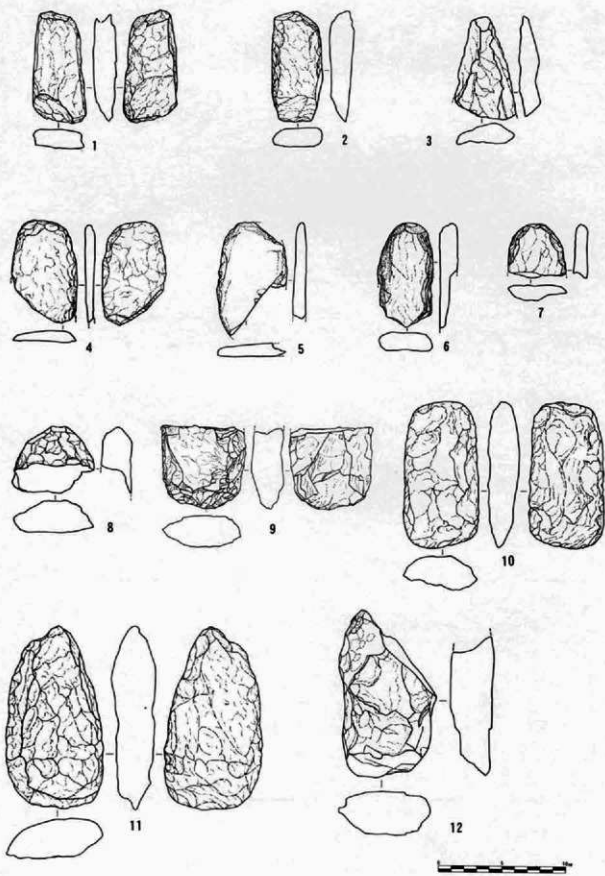
图版31 薄手利器·磨製石斧



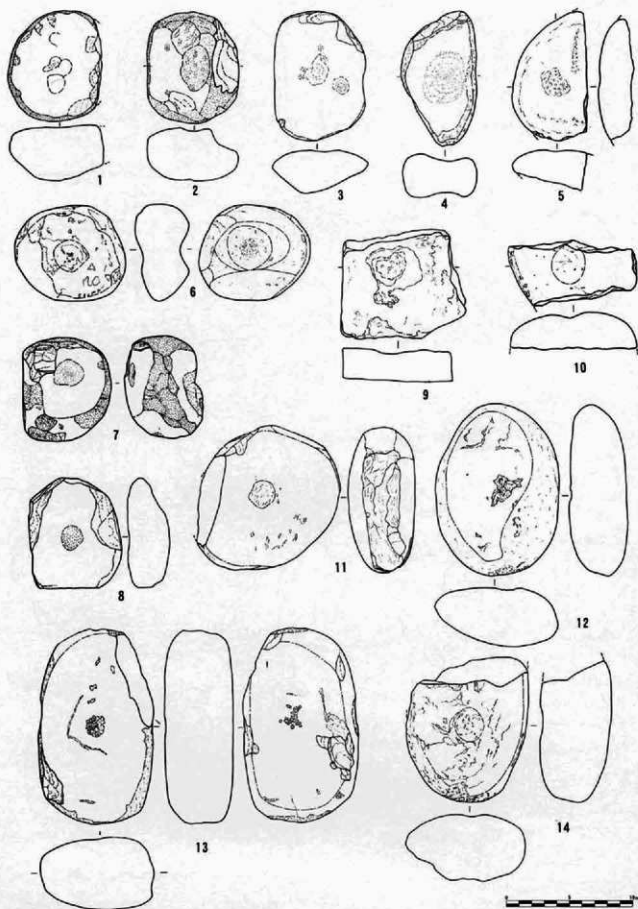
図版32 大形石斧・柱状片刃石斧？



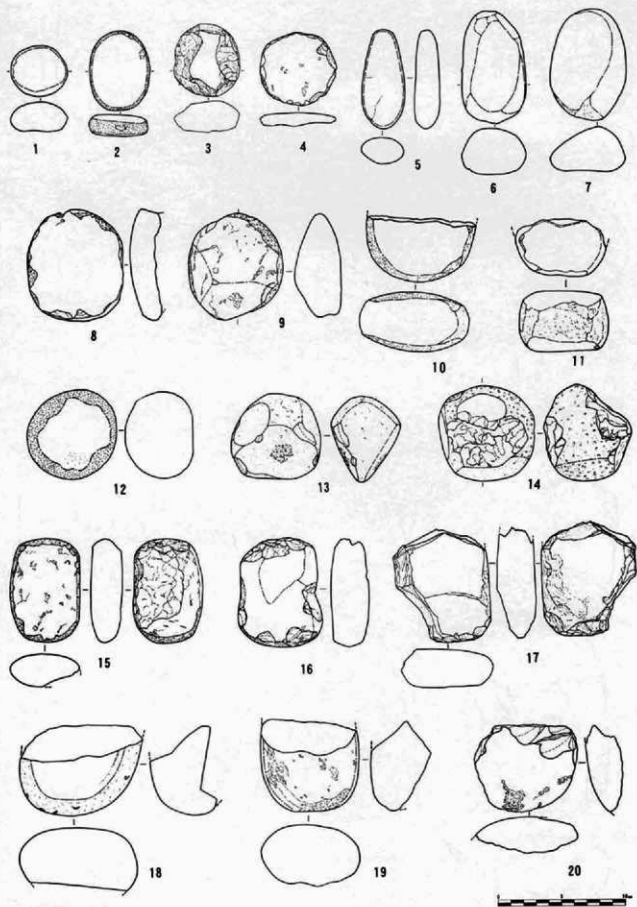
图版33 打製石斧



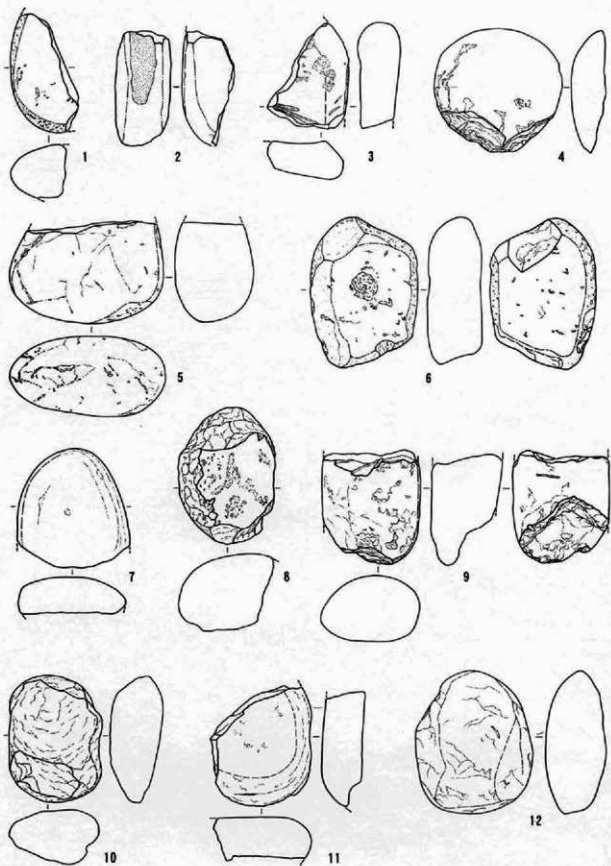
图版34 打製石斧



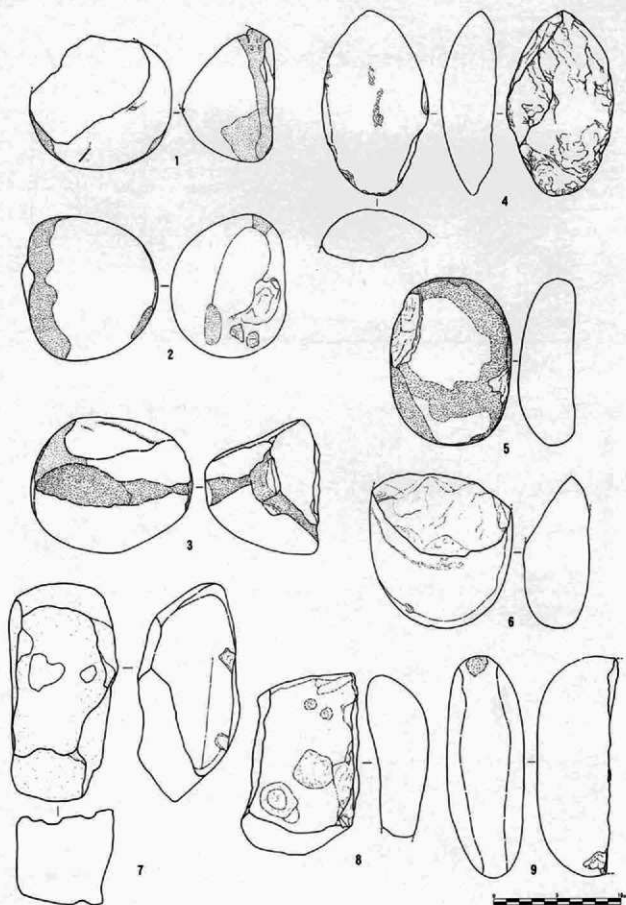
图版35 凹石



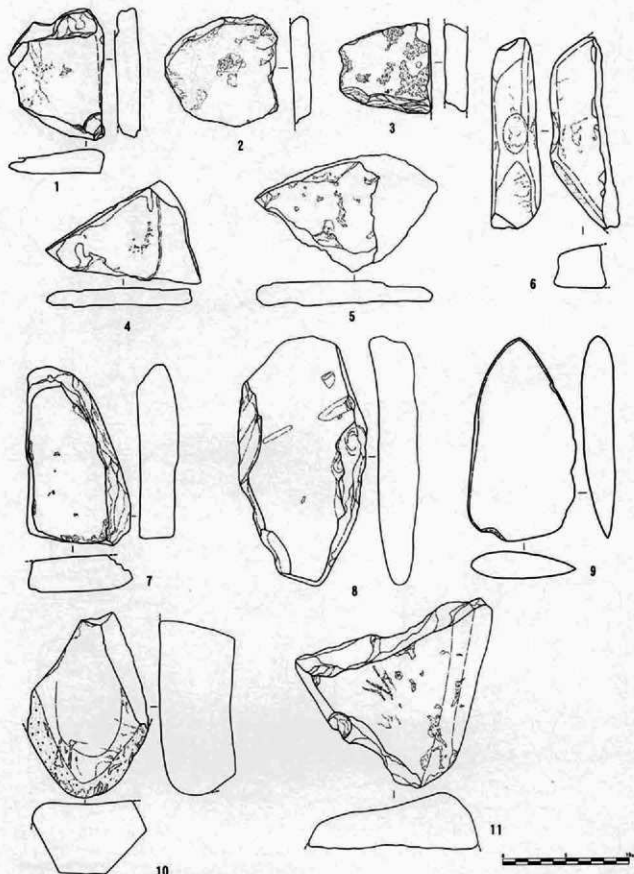
图版36 敲打器·磨石



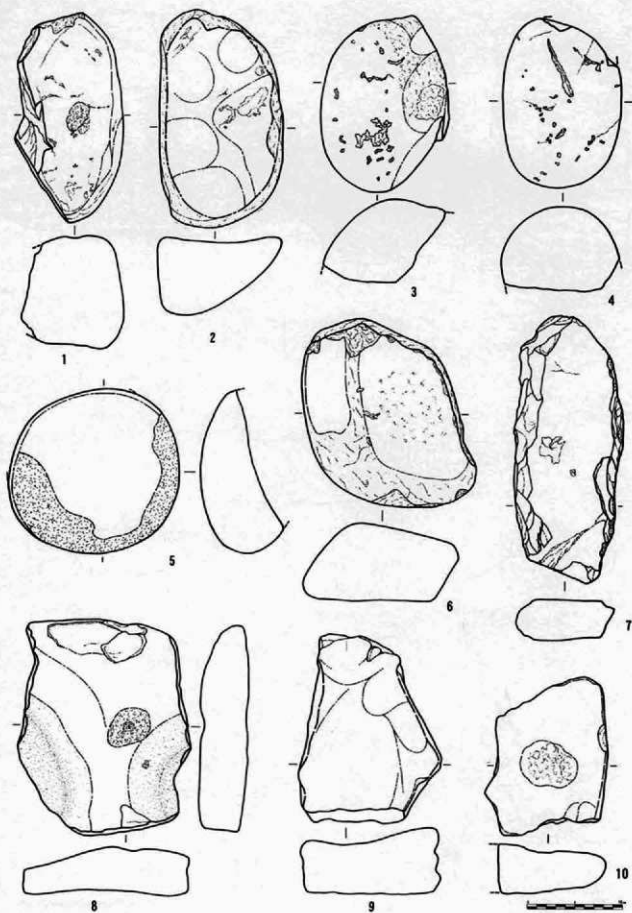
图版37 磨石



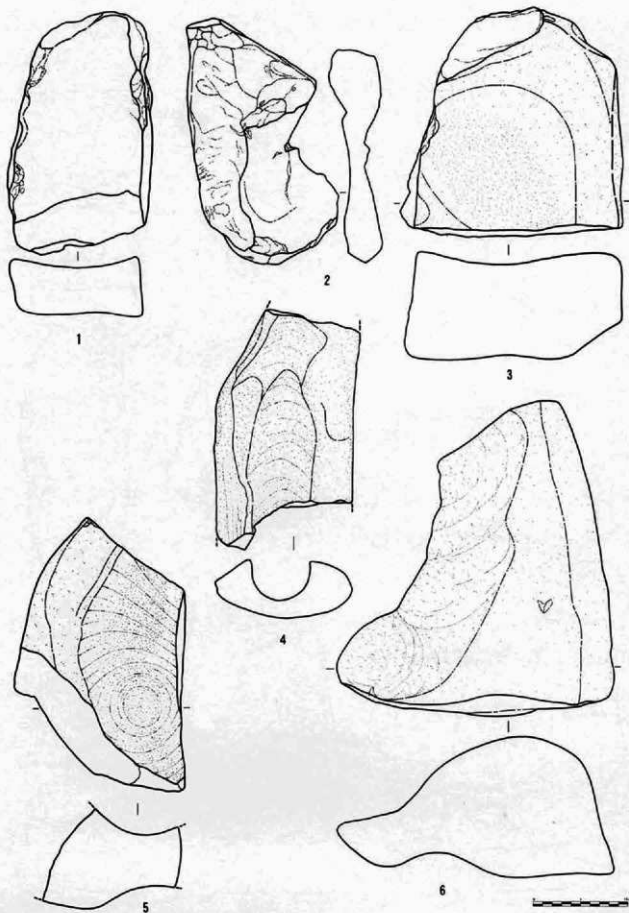
图版38 磨石·砥石 or 石皿



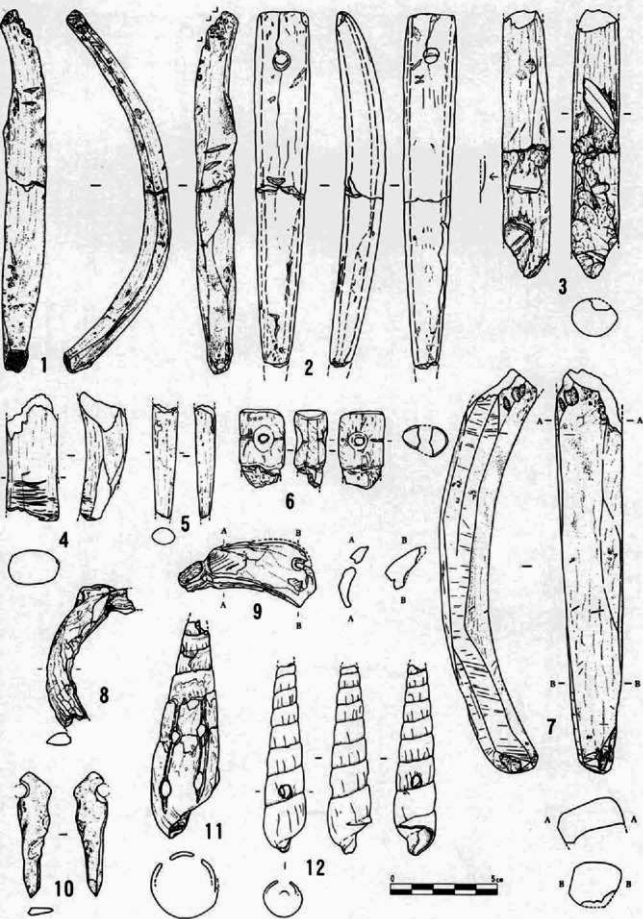
図版39 磨石・砥石 or 石皿・その他



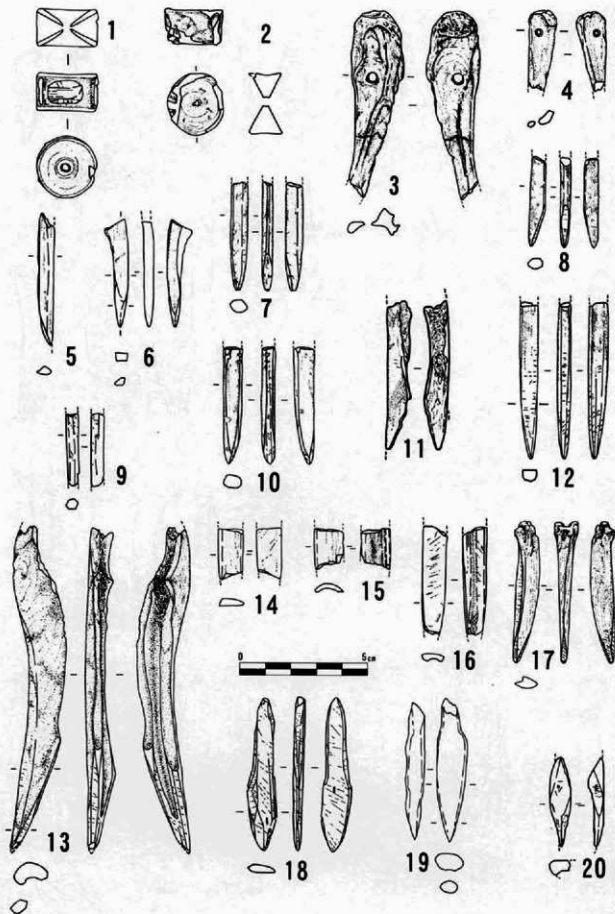
図版40 磨石・砥石 or 石皿



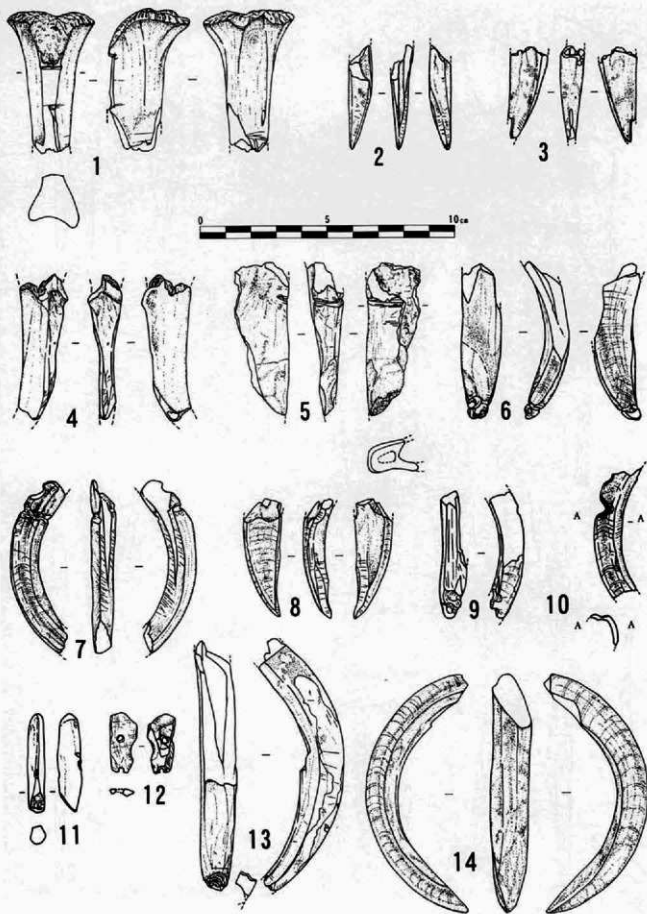
图版41 砥石·砥石 or 石皿



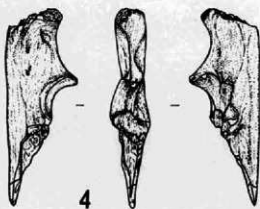
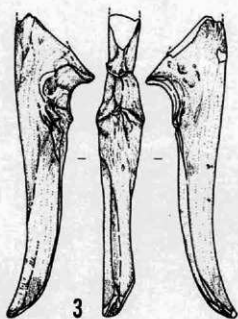
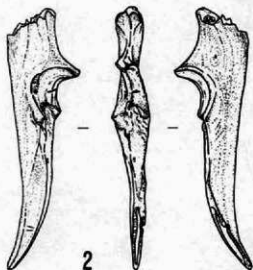
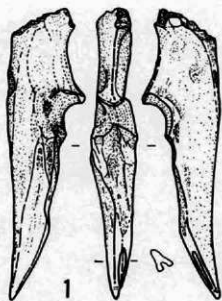
図版42 ジュゴン肋骨製品 (1~7) ・貝製品 (8~12)



図版43 ホオジロザメ科 (1・2) ・クロダイ類 (17) ・イノシシ



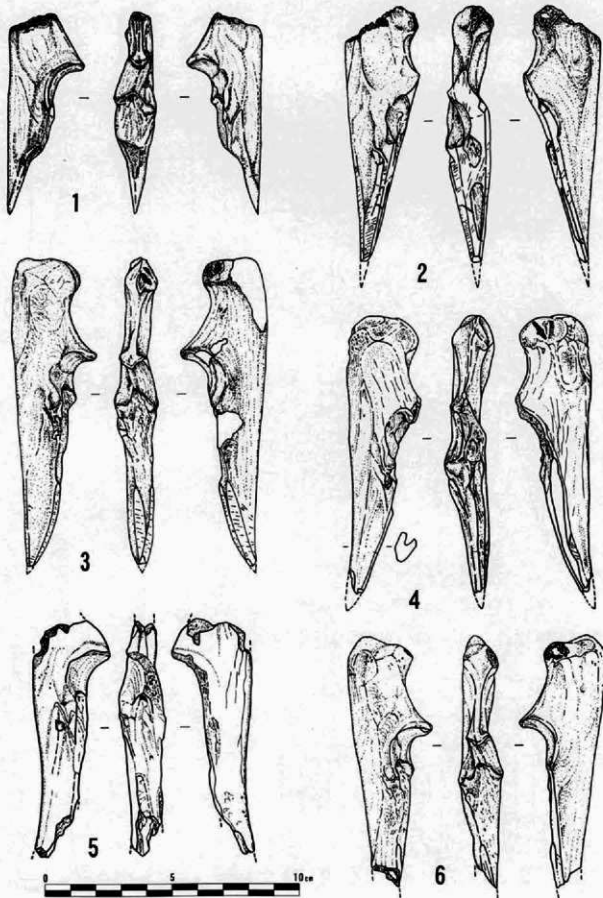
図版44 イノシシ (骨・歯)



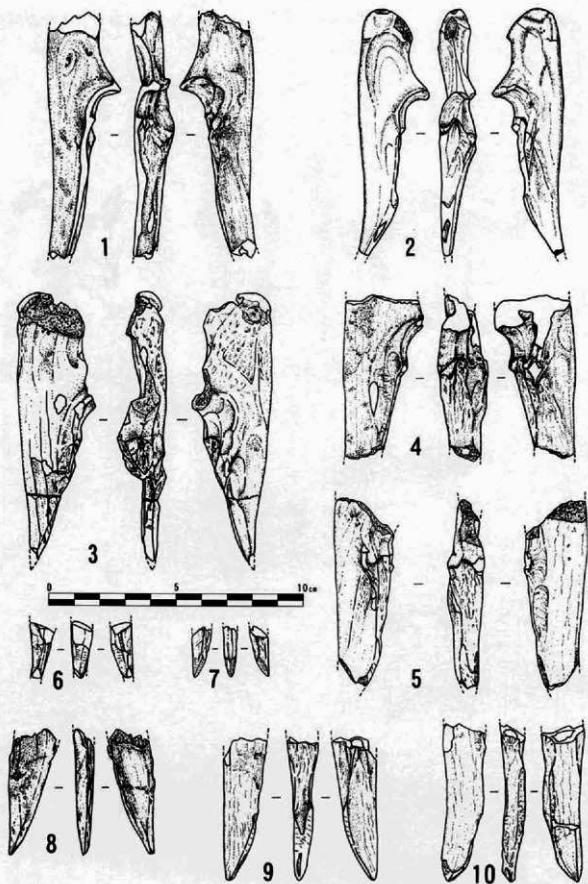
未加工のイノシシ尺骨復元図



図版45 イノシシ (尺骨)



図版46 イノシシ (尺骨)



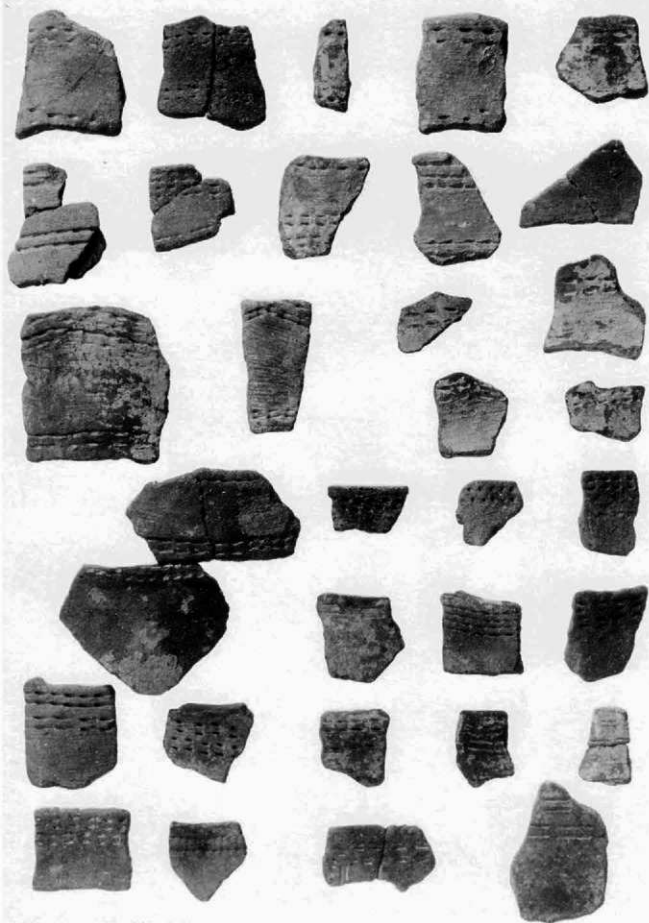
図版47 イノシシ (尺骨)

室川貝塚

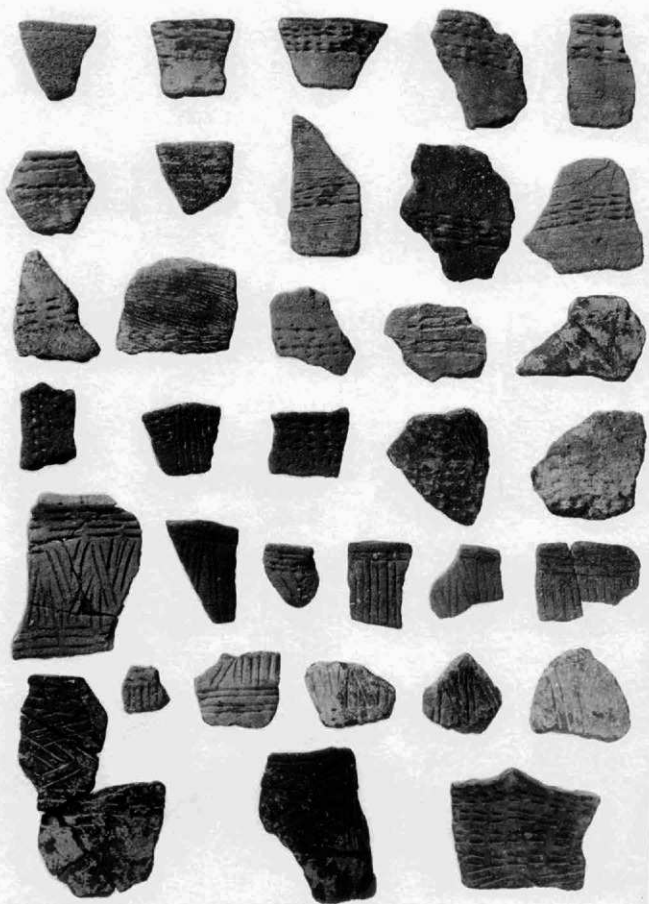
— 沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書 —

1997年

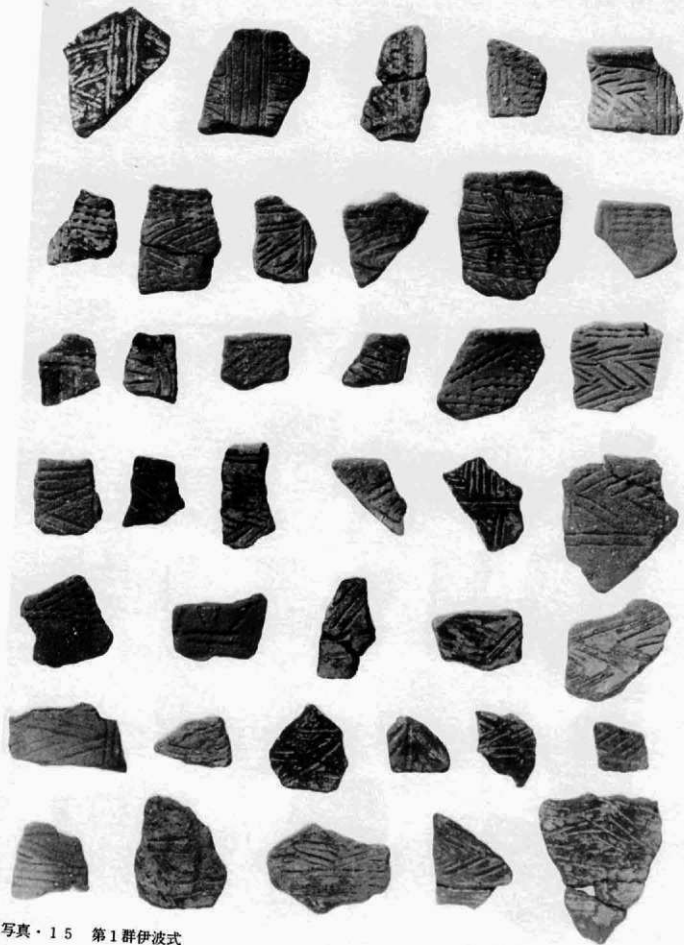
沖縄市教育委員会



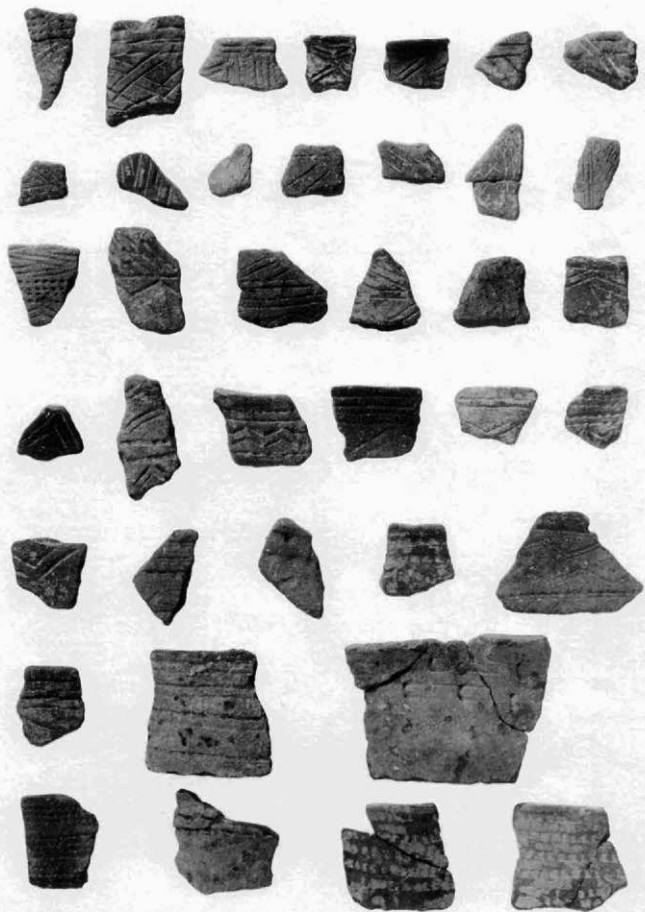
写真・13 第1群伊波式



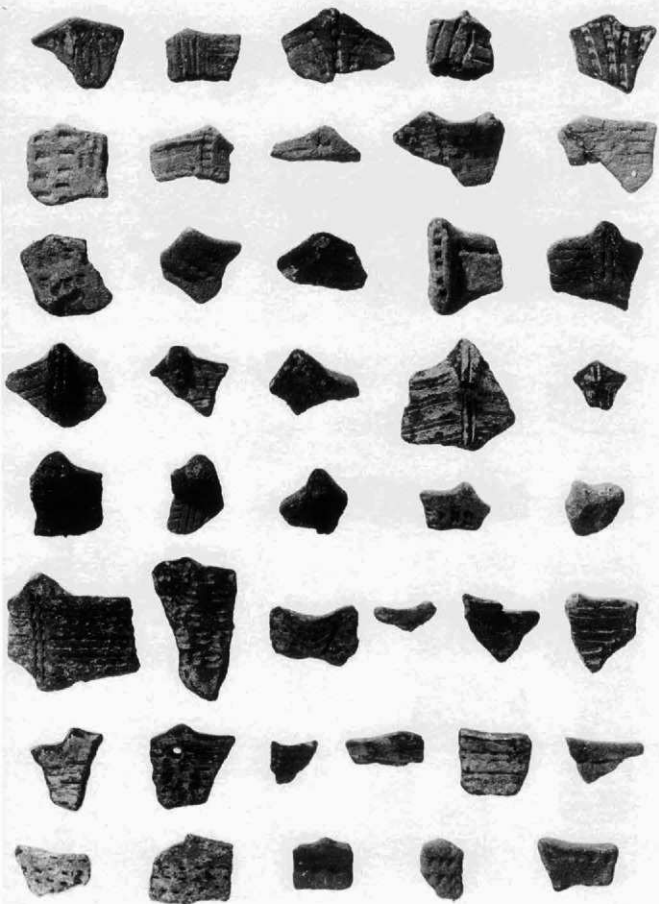
写真・14 第1群伊波式



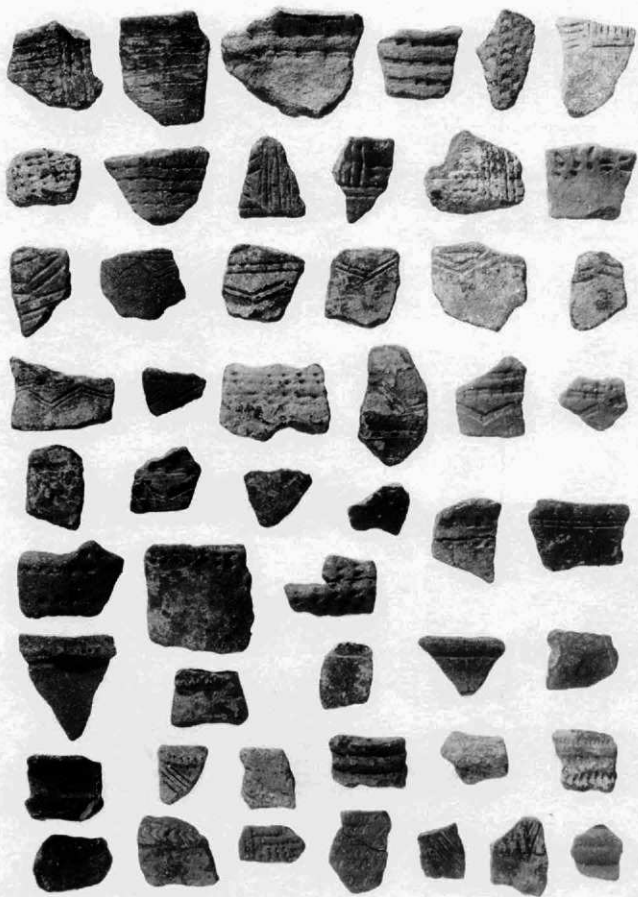
写真・15 第1群伊波式



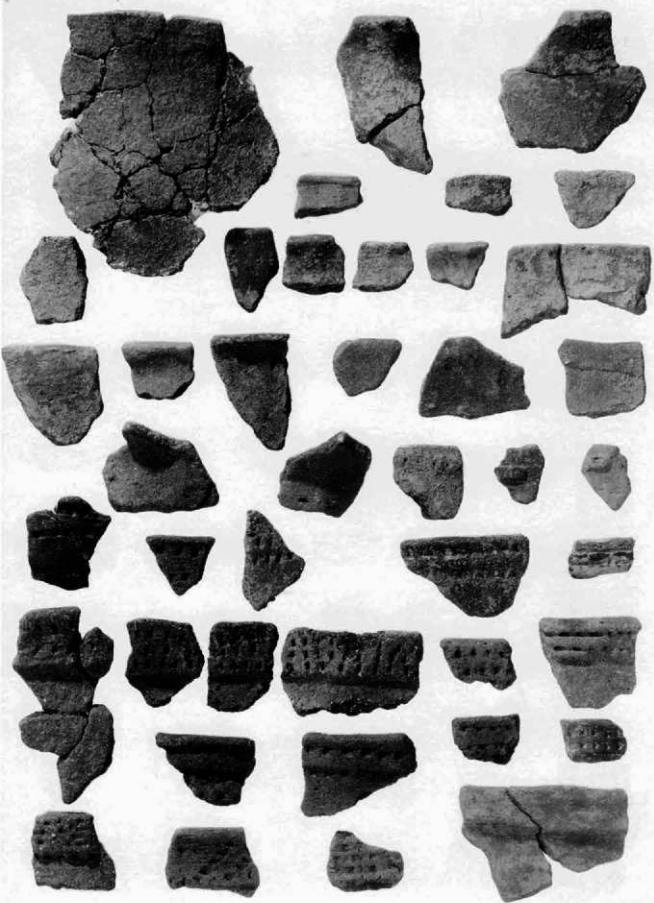
写真・16 第1群伊波式・萩堂式・大山式



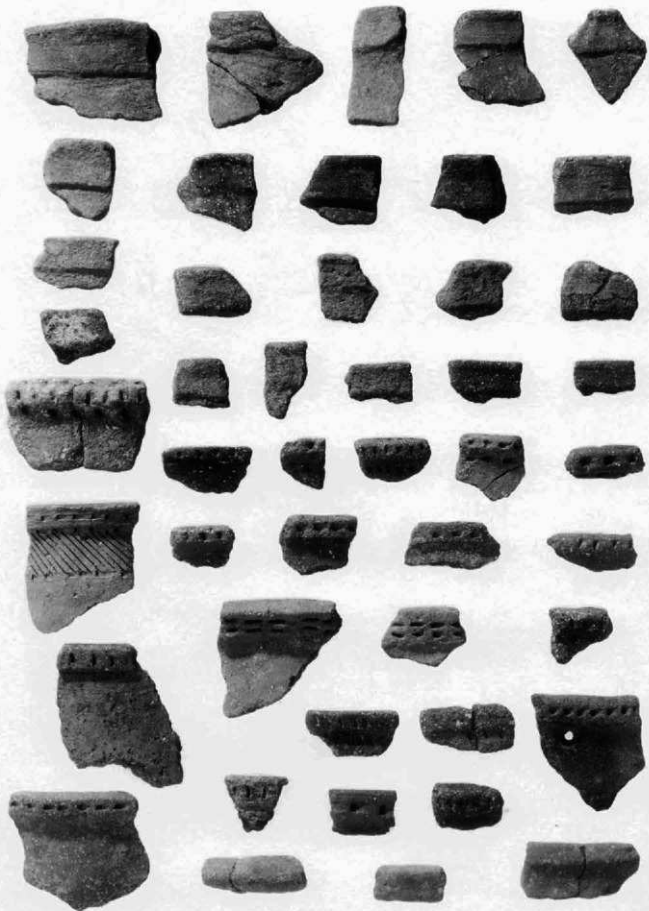
写真・17 第1群伊波式・荻堂式（山形口縁・突起）



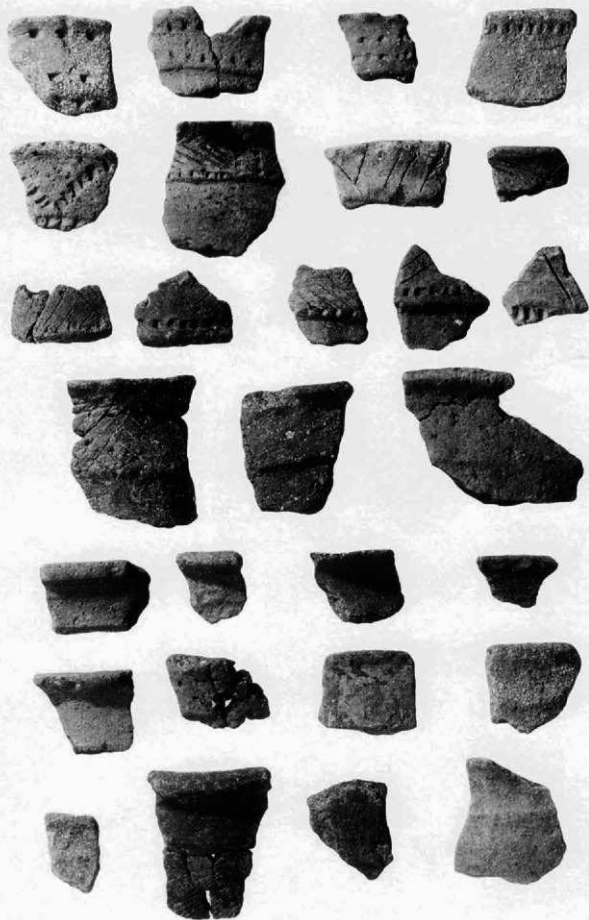
写真・18 第1群伊波式~大山式・その他・面縄前庭式・宇宿下層式



写真・19 第1群無文土器等・第2群カヤウチバンタ式土器



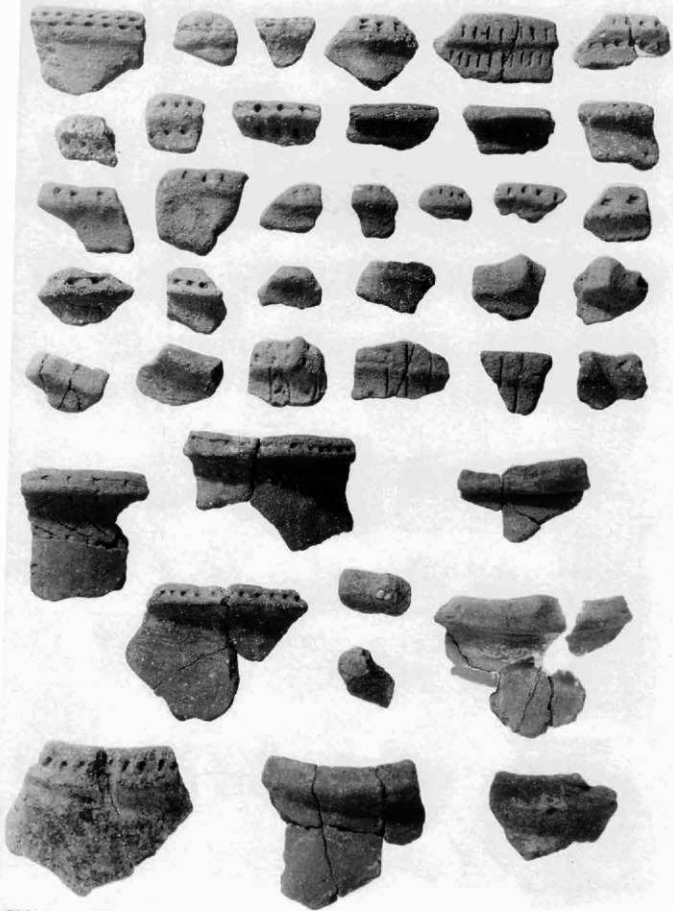
写真・20 第2群肥厚口縁グループ (カヤウチバンタ式・その他)



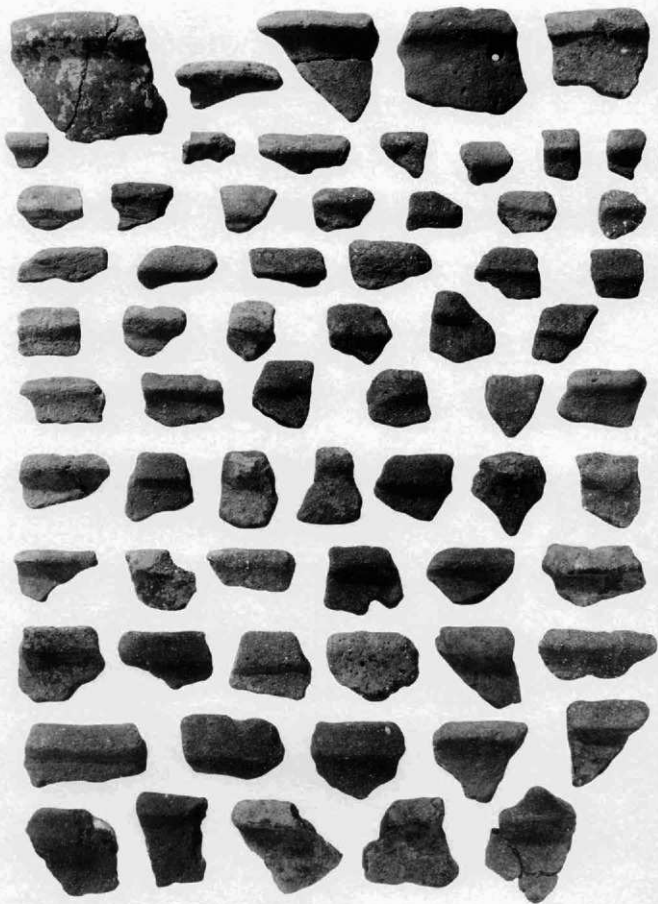
写真・21 第2群肥厚口縁グループ（面縄西洞式等）



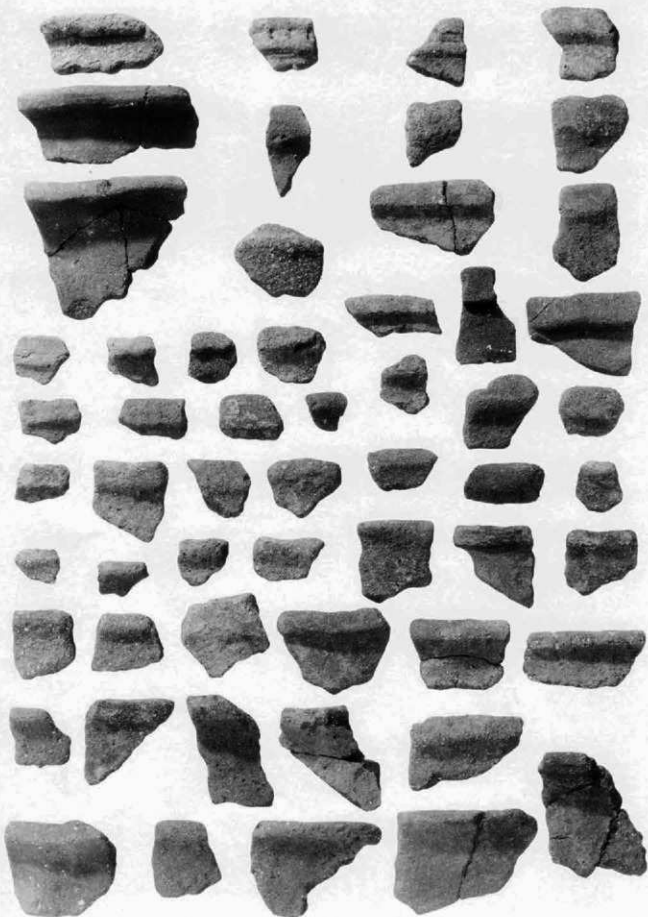
写真・22 第2群肥厚口縁グループ (面縄西洞式・喜念1式等)



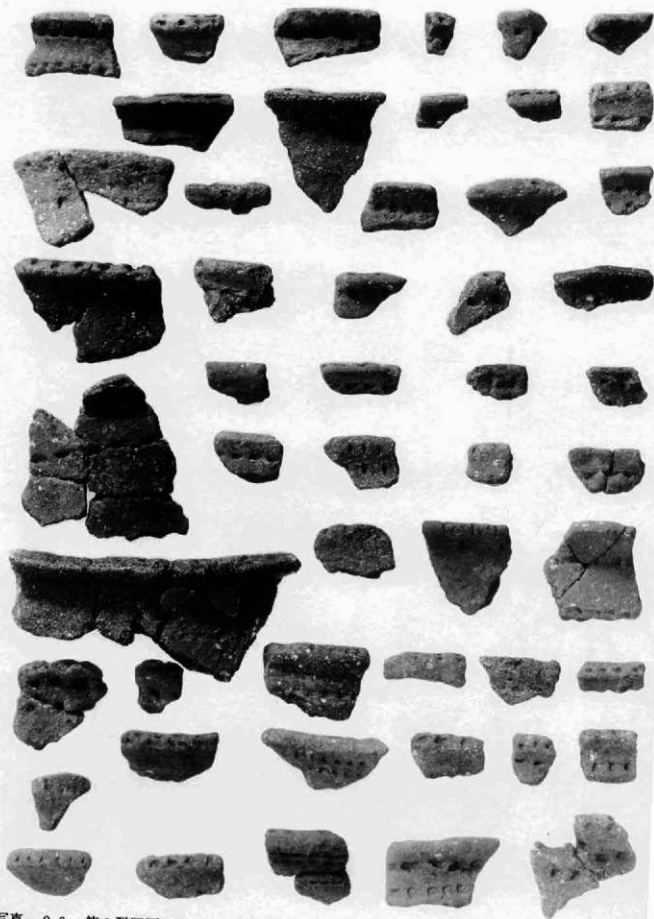
写真・23 第2群肥厚口縁グループ (宇佐浜式)



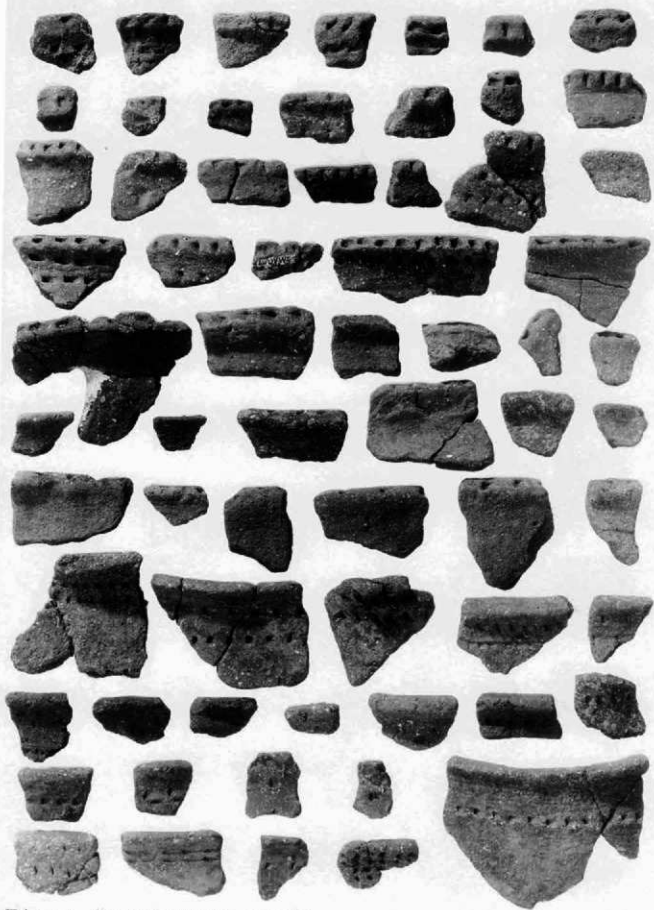
写真・24 第2群肥厚口縁グループ (宇佐浜式)



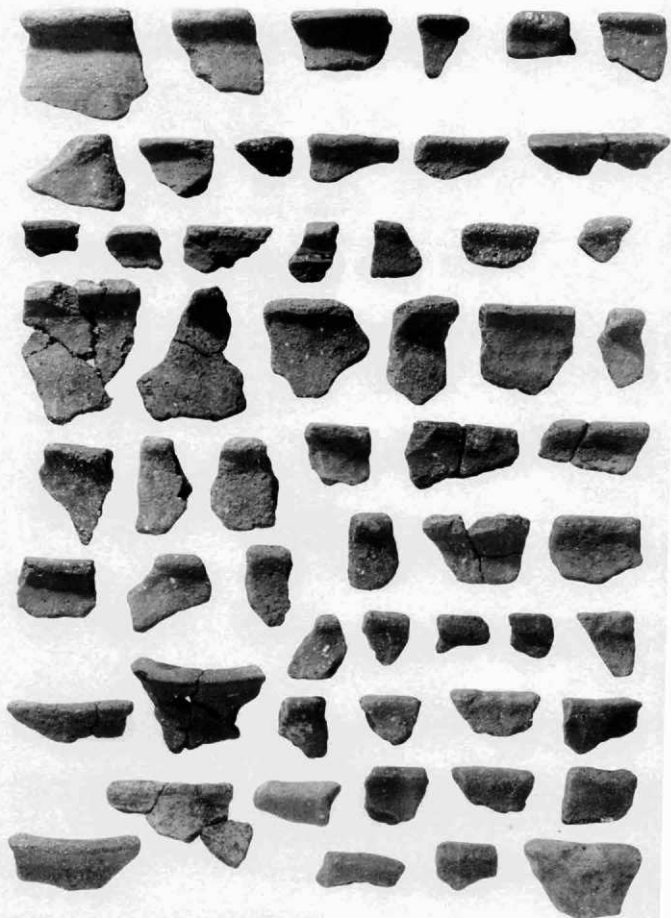
写真・25 第2群肥厚口縁グループ (宇佐浜式)



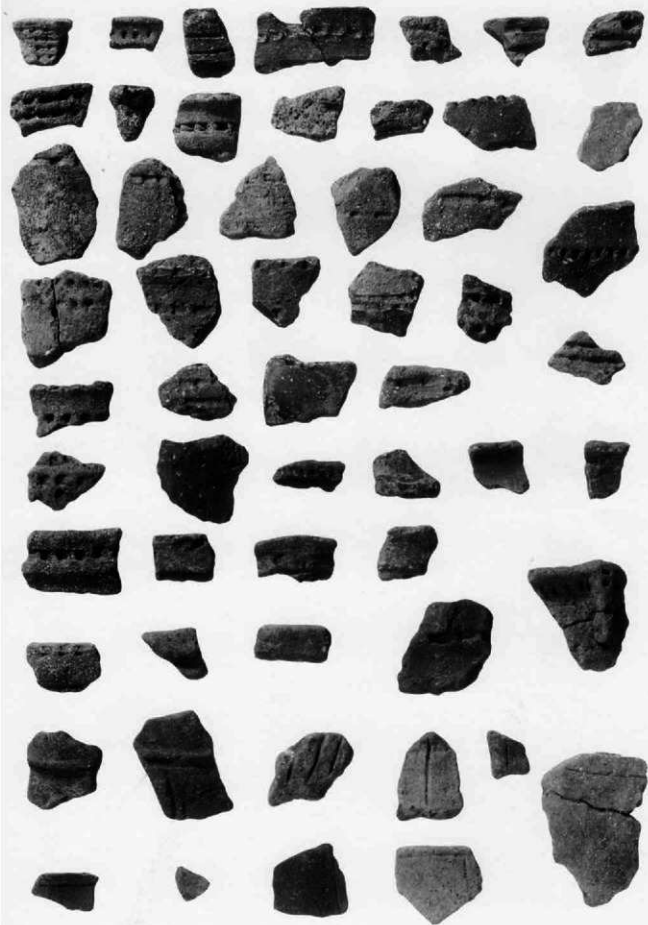
写真・26 第2群肥厚口縁グループ



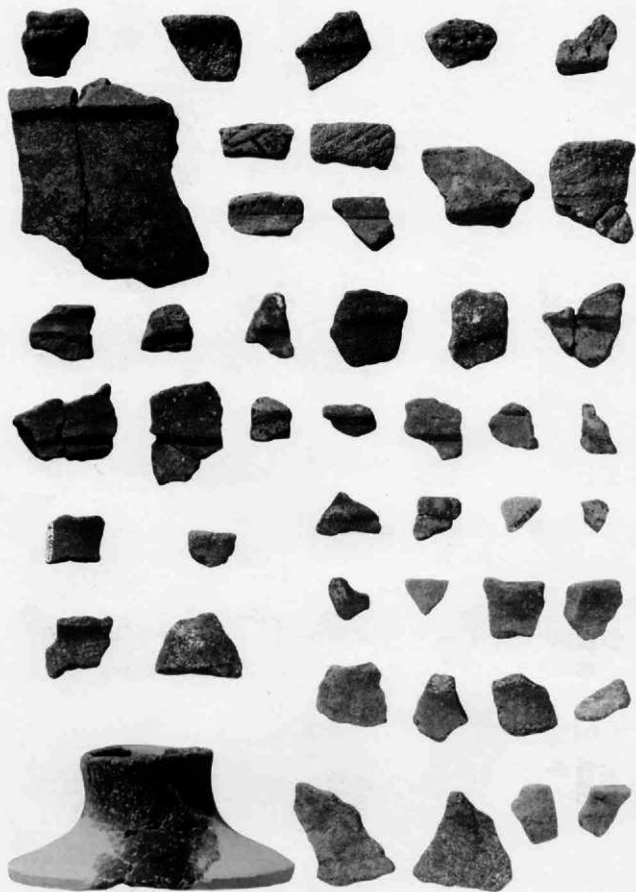
写真・27 第2群肥厚口縁グループ(有文)



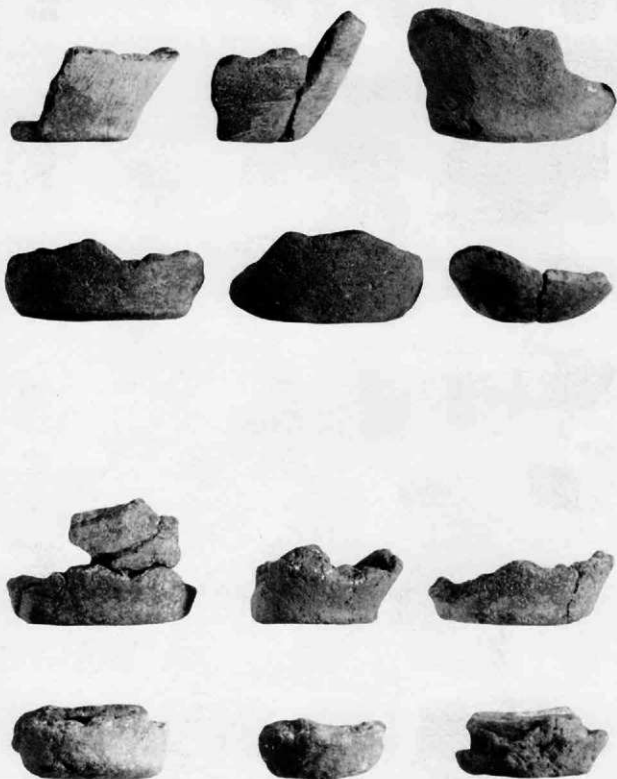
写真・28 第2群肥厚口縁グループ(無文)



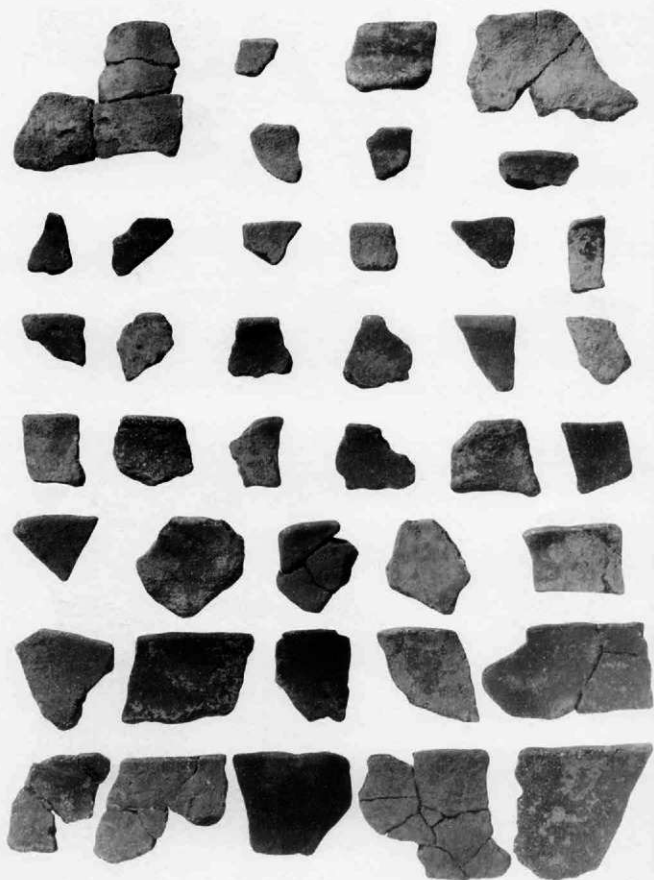
写真・29 第2群肥厚口縁グループと見られる土器



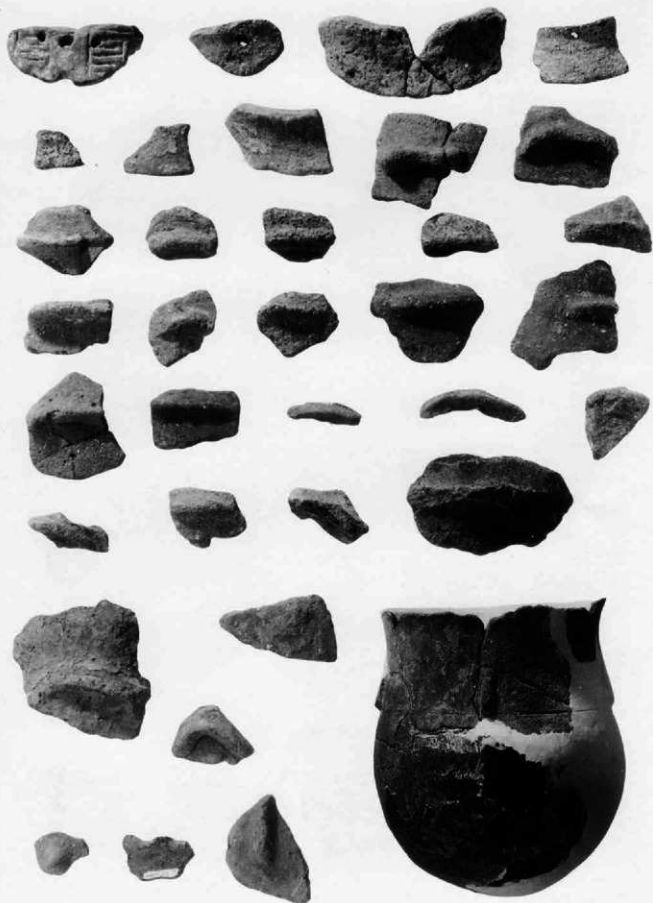
写真・30 第2群肥厚口縁グループと見られる土器・壺形土器（肥厚口縁期）



写真・31 第1群底部(上)・第2群カヤウチパンタ式等の底部(下)底部



写真・32 第3群仲原式土器



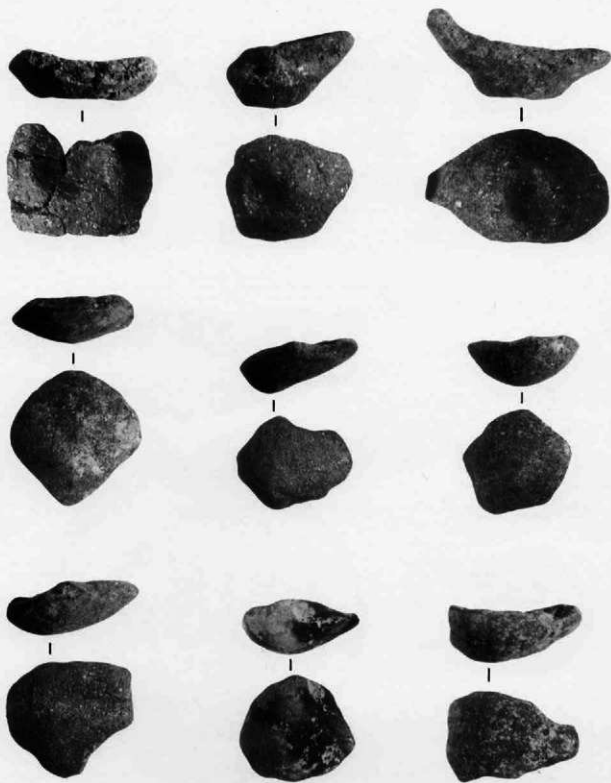
写真・33 第3群仲原式土器（外耳片など）



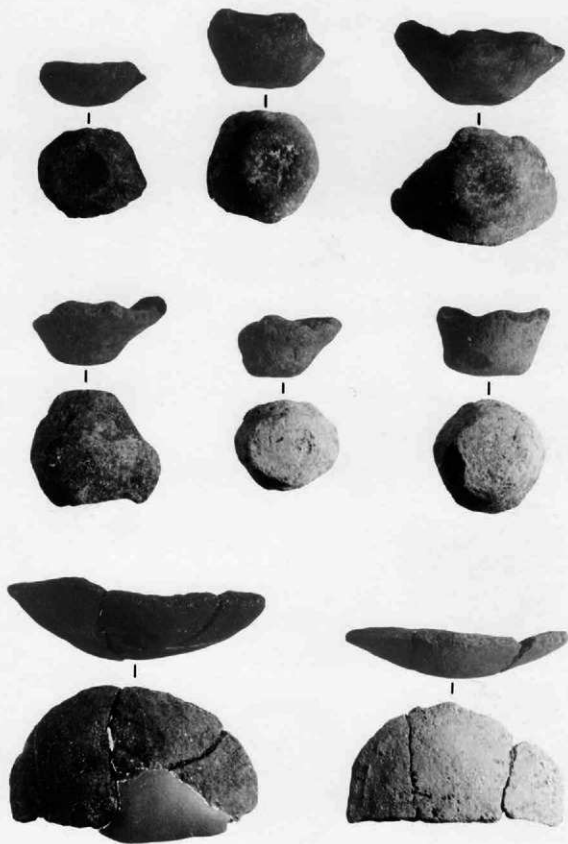
写真・34 第2群～第3群の壺形土器と弥生土器



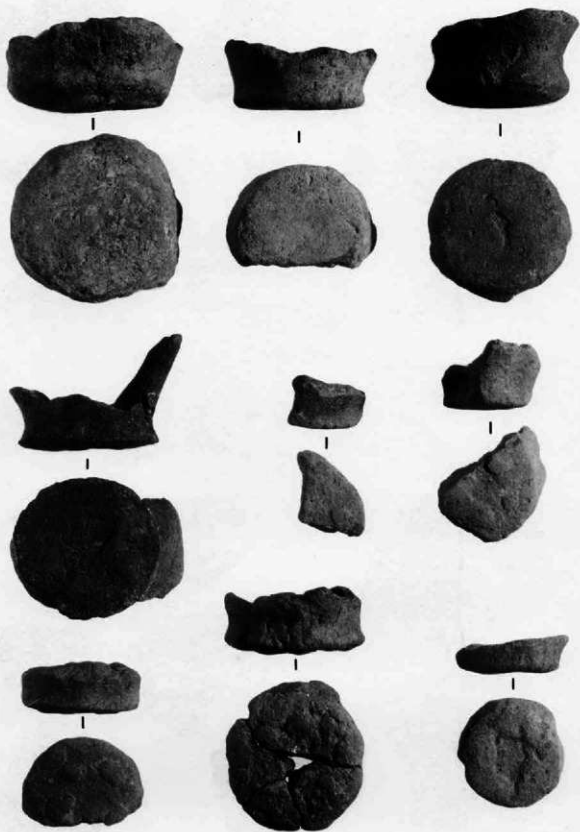
写真・35 第2群～第3群の底部



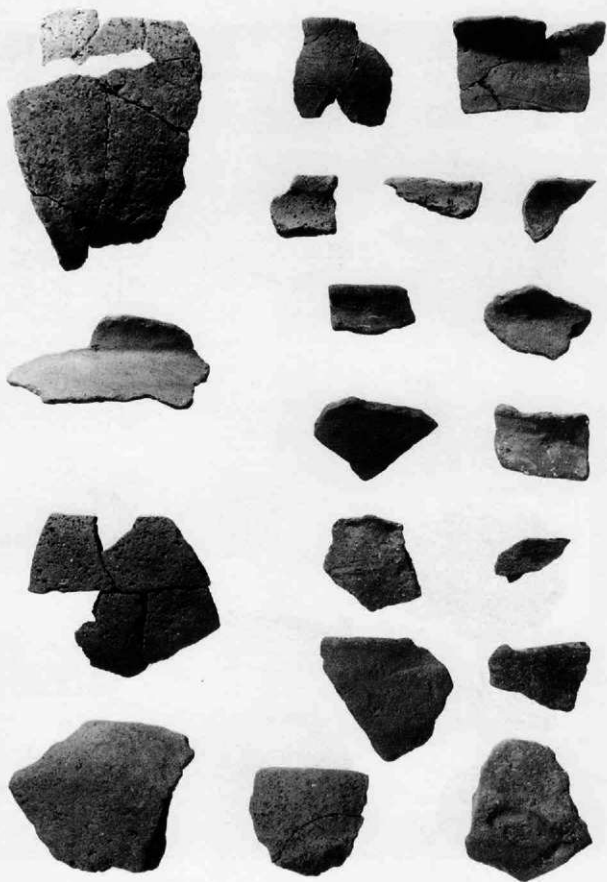
写真・36 第2群～第3群の底部



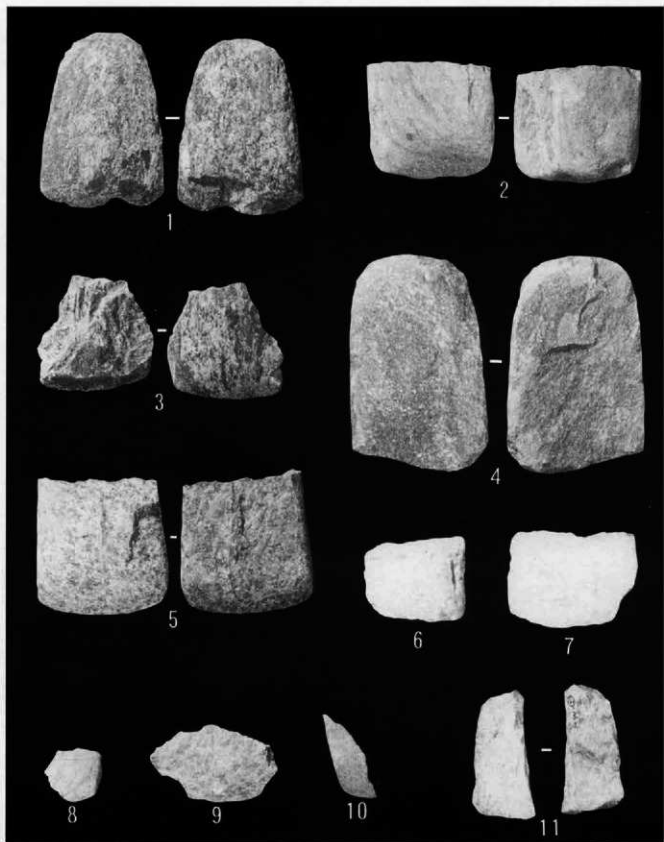
写真・37 第2群～第3群の底部



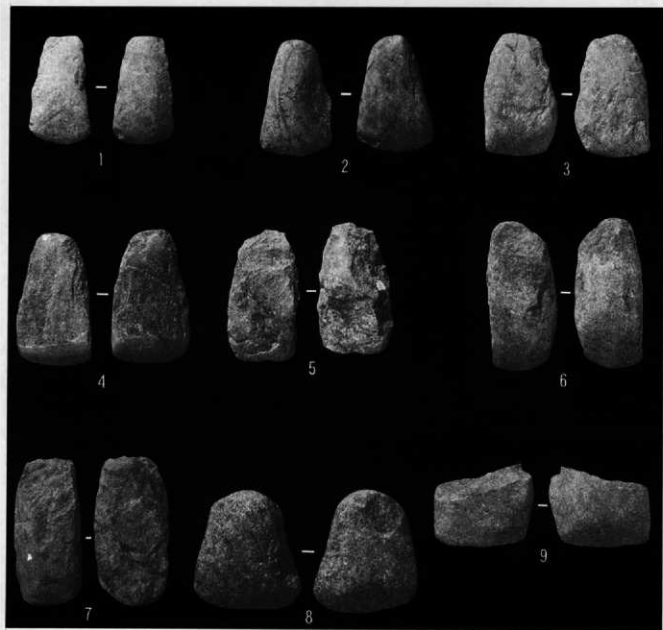
写真・38 第4群フェンサ下層式



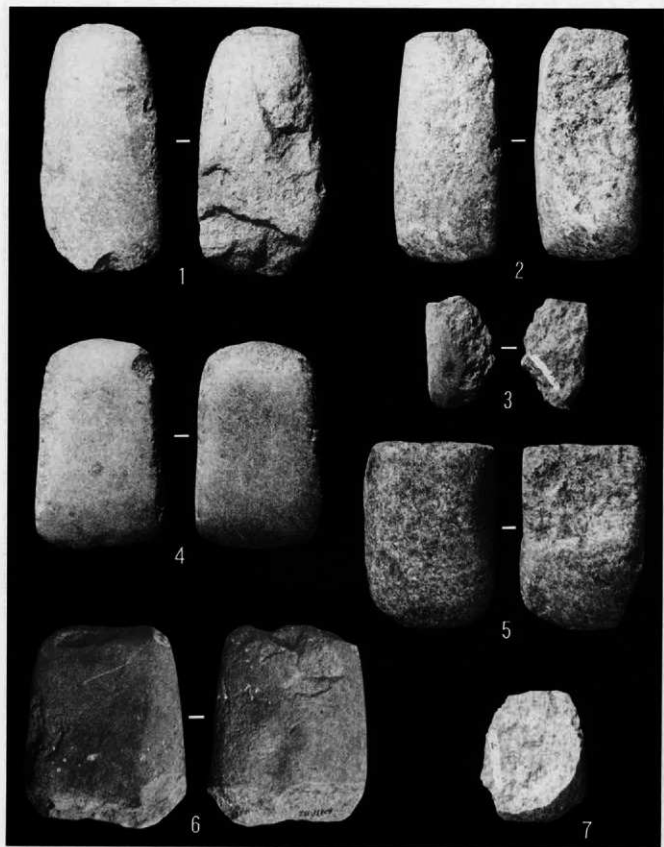
写真・39 第4群フェンサ下層式・第5群フェンサ上層式



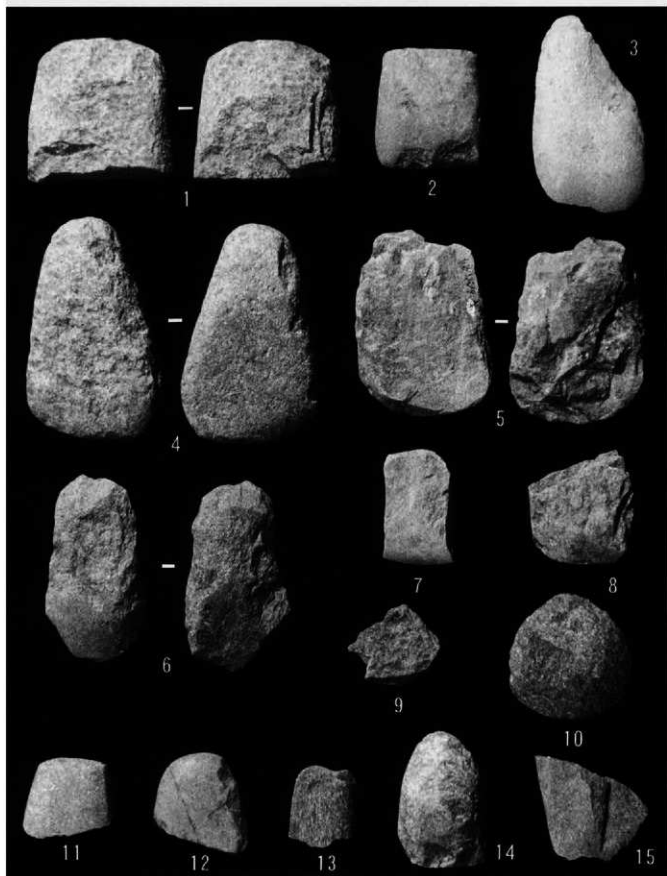
写真・40 磨製石斧



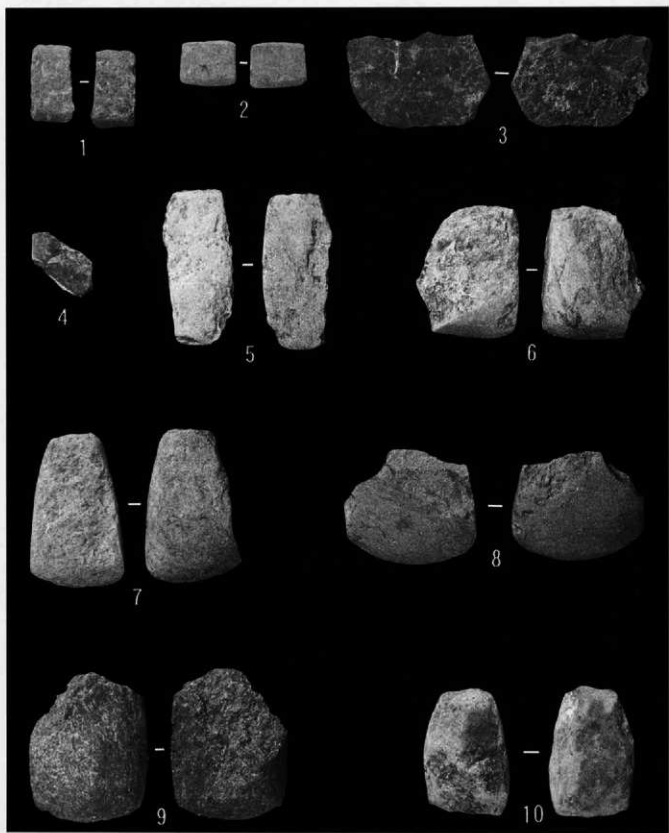
写真・41 磨製石斧



写真・42 磨製石斧



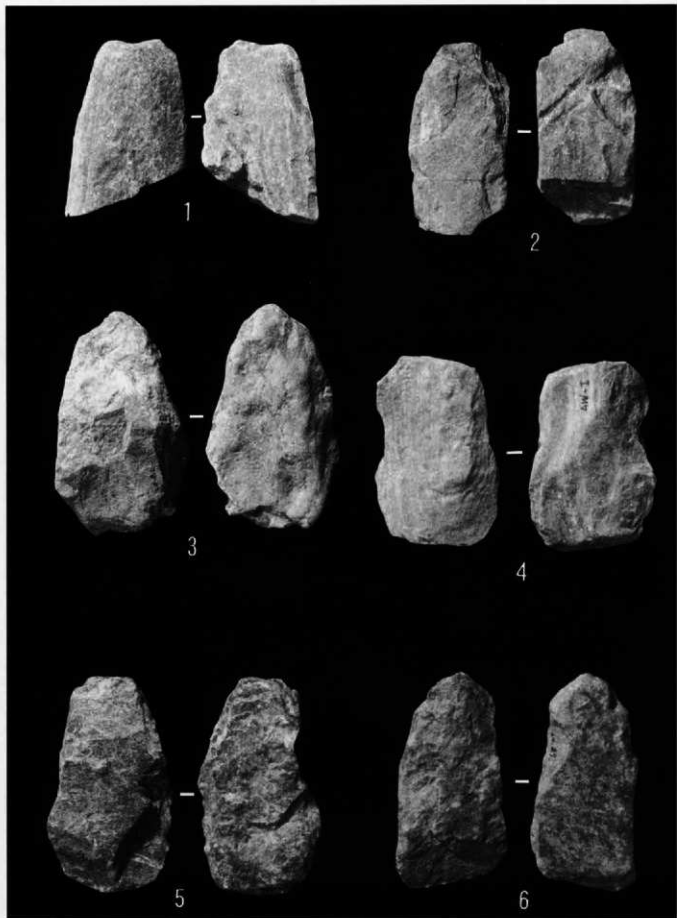
写真・43 磨製石斧



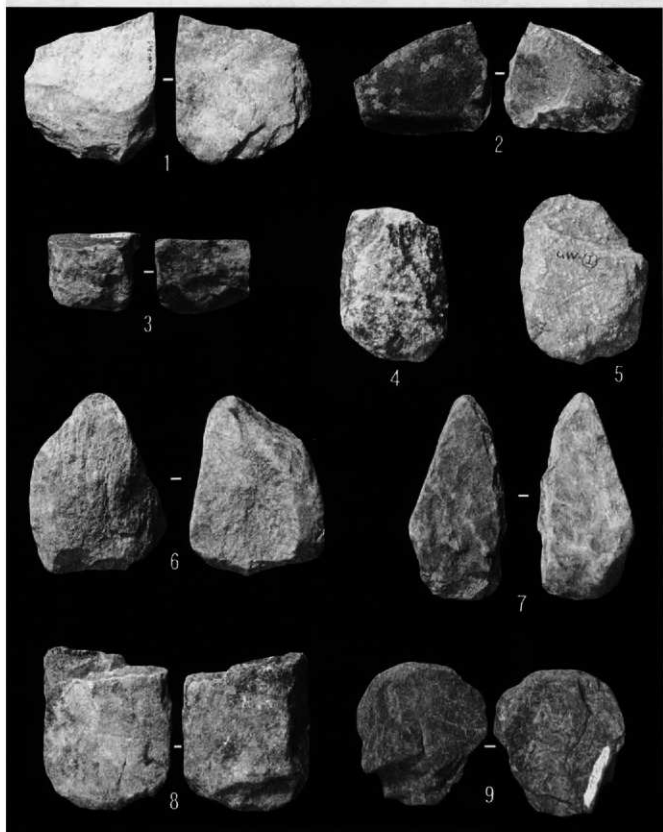
写真・44 薄手利器・磨製石斧



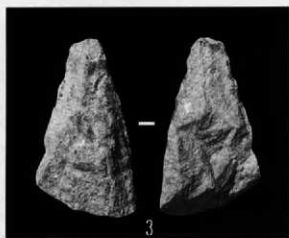
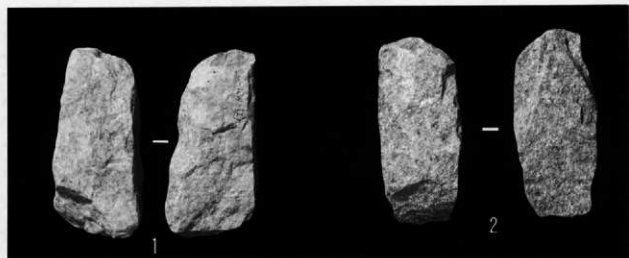
写真・45 大形石斧・桂状片刃石斧？



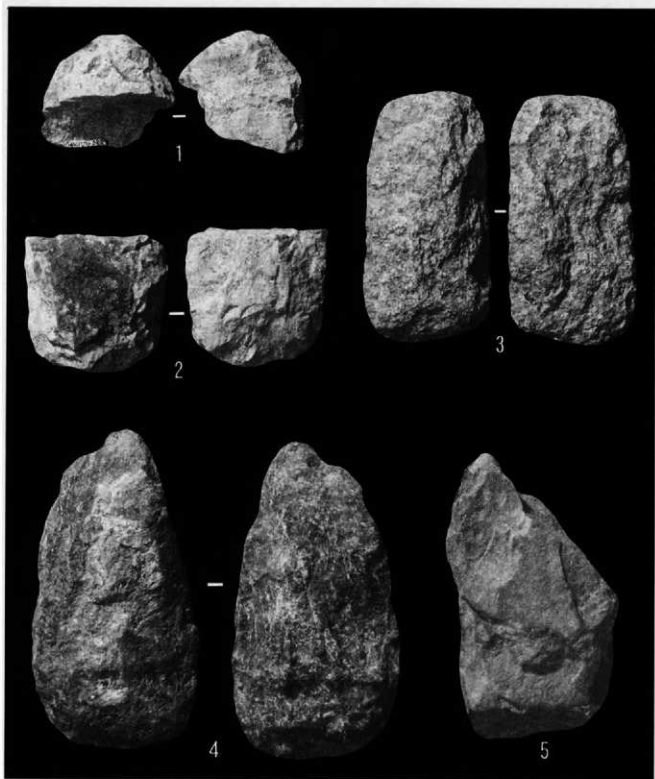
写真・46 打製石斧



写真・47 打製石斧



写真・48 打製石斧



写真・49 打製石斧



1



2



3



4



5



6



7



9



10



8

写真・50 凹石



1



2

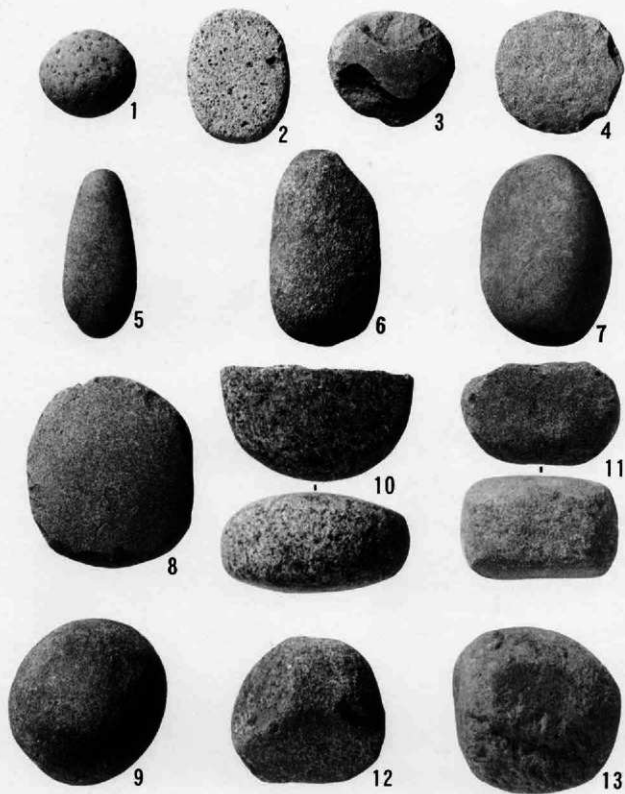


3

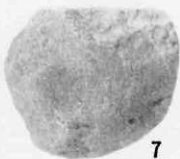


4

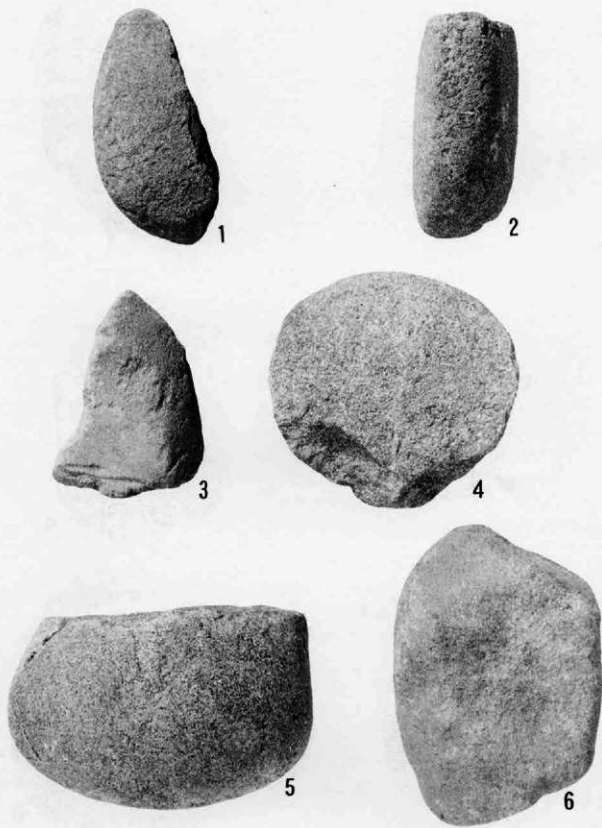
写真・51 凹石



写真・52 敲打器・磨石



写真・53 敲打器・磨石



写真・54 磨石



写真・55 磨石



1



2



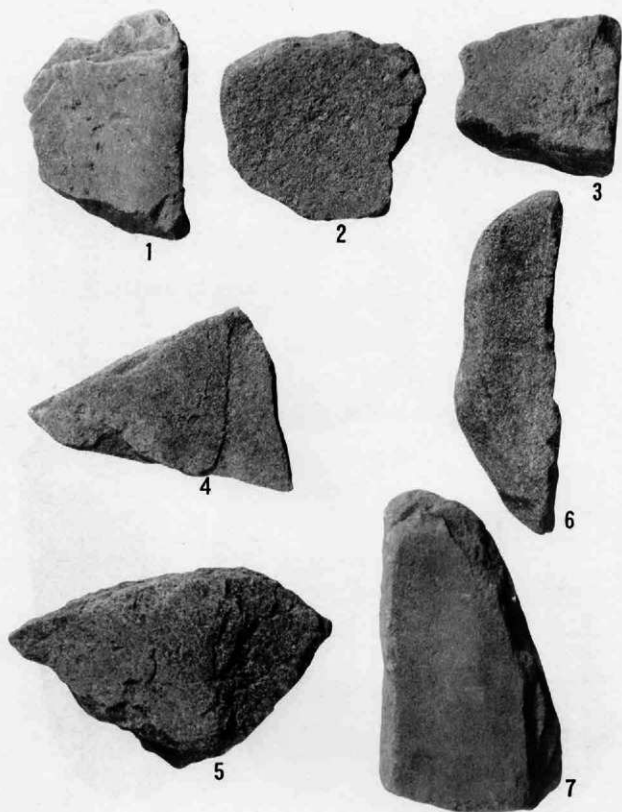
3



写真・56 磨石



写真・57 磨石・砥石 or 石皿



写真・58 砥石 or 石皿



1



2

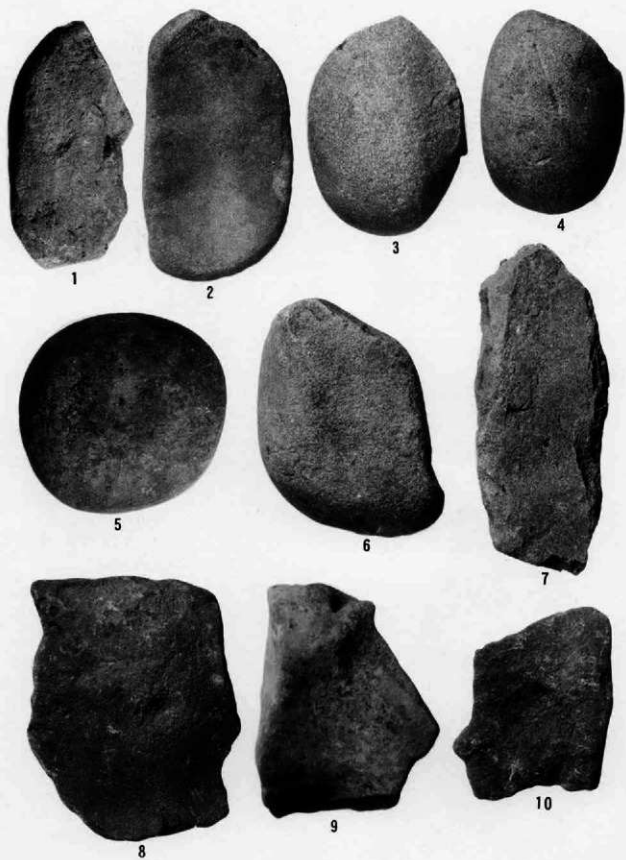


3



4

写真・59 砥石 or 石皿



写真・60 磨石・砥石 or 石皿



1



3



2



4

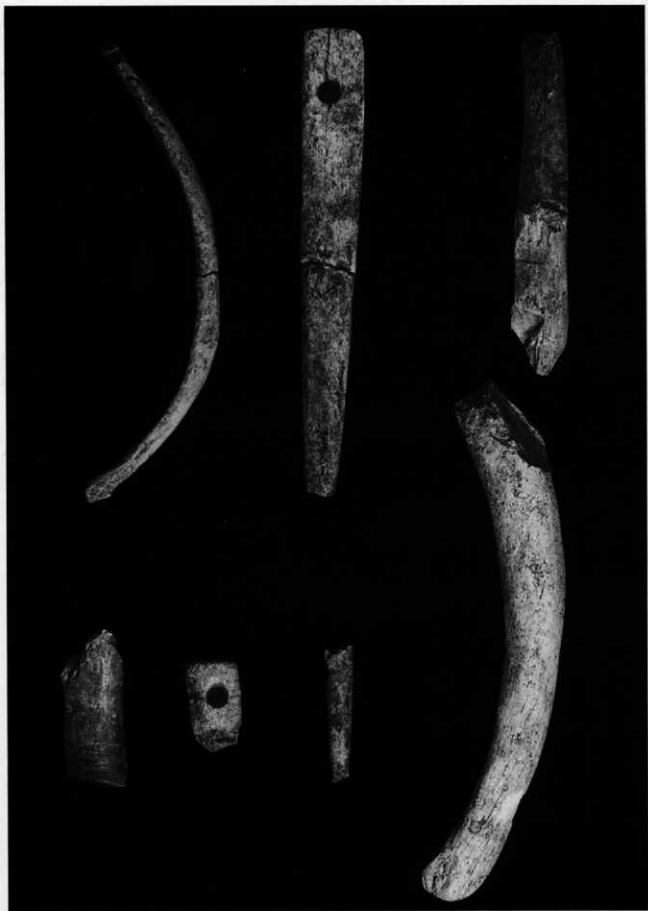


5

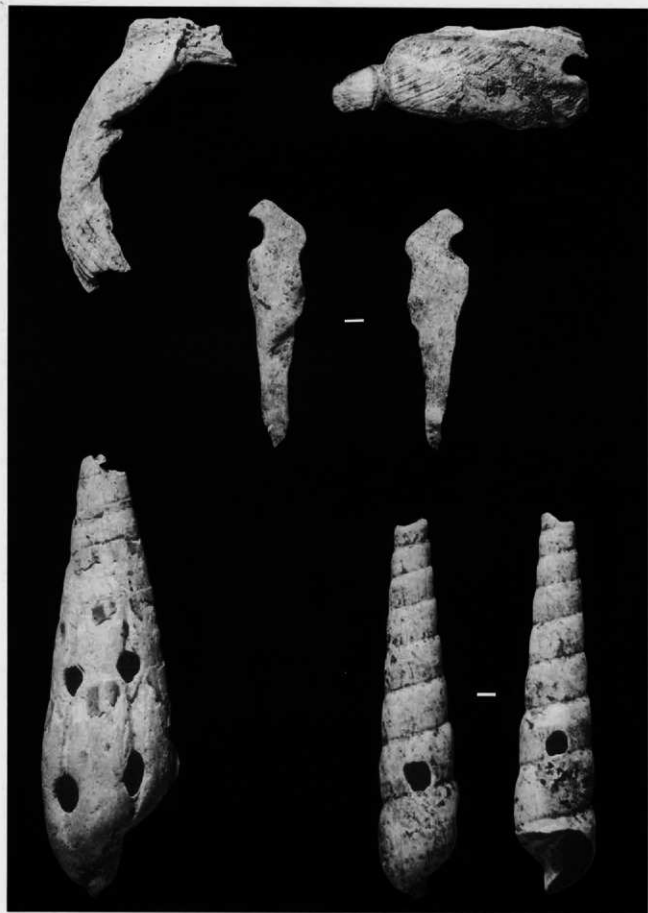


6

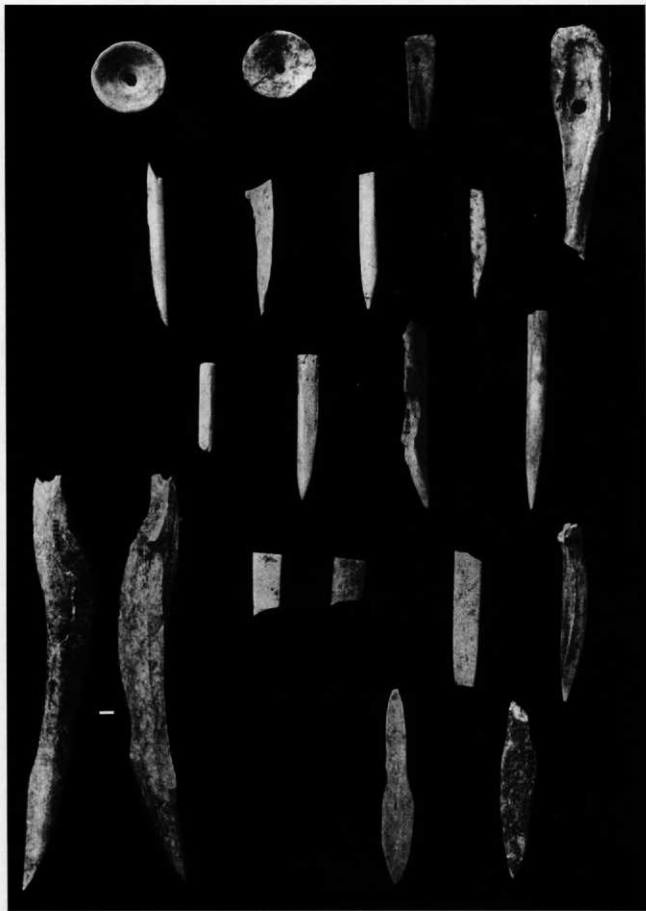
写真・6 1 磨石・砥石 or 石皿



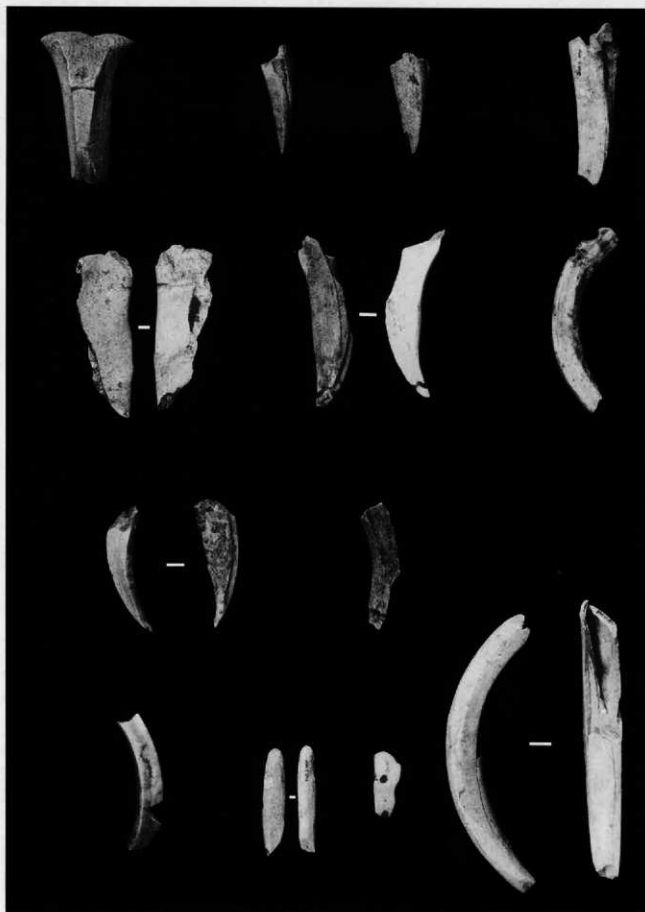
写真・62 ジュゴン肋骨製品



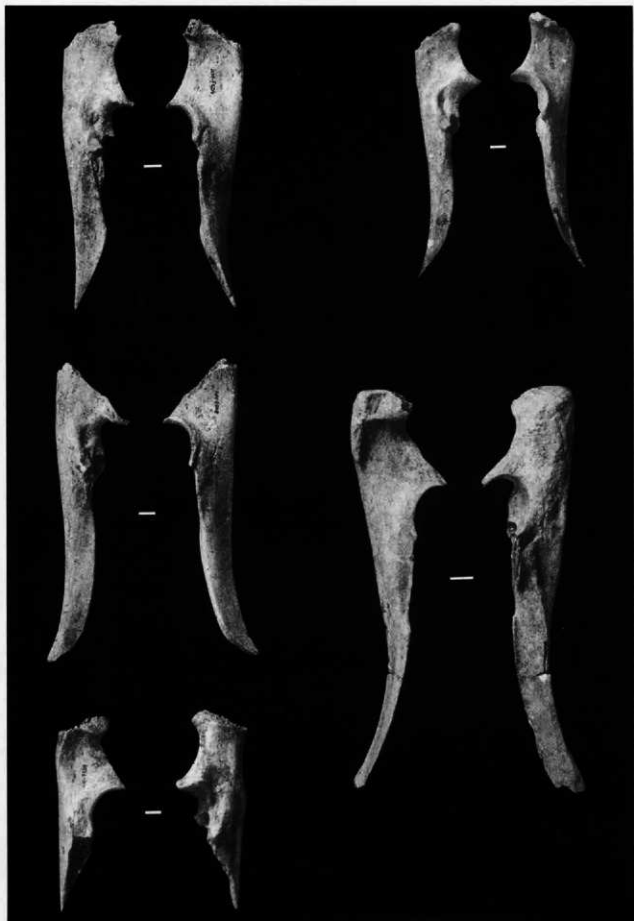
写真・63 貝製品



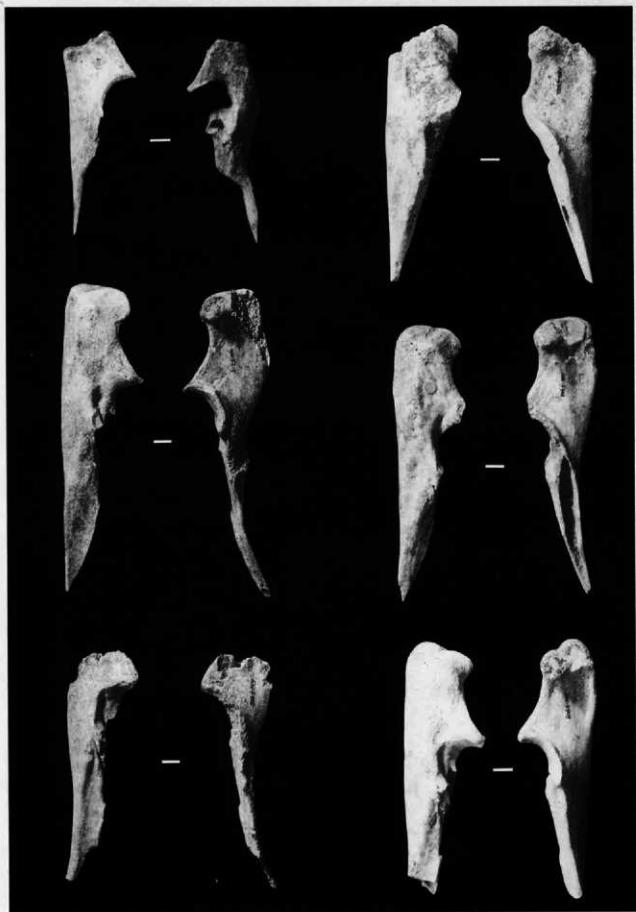
写真・64 ホオジロザメ科・クロダイ類・イノシシ製品



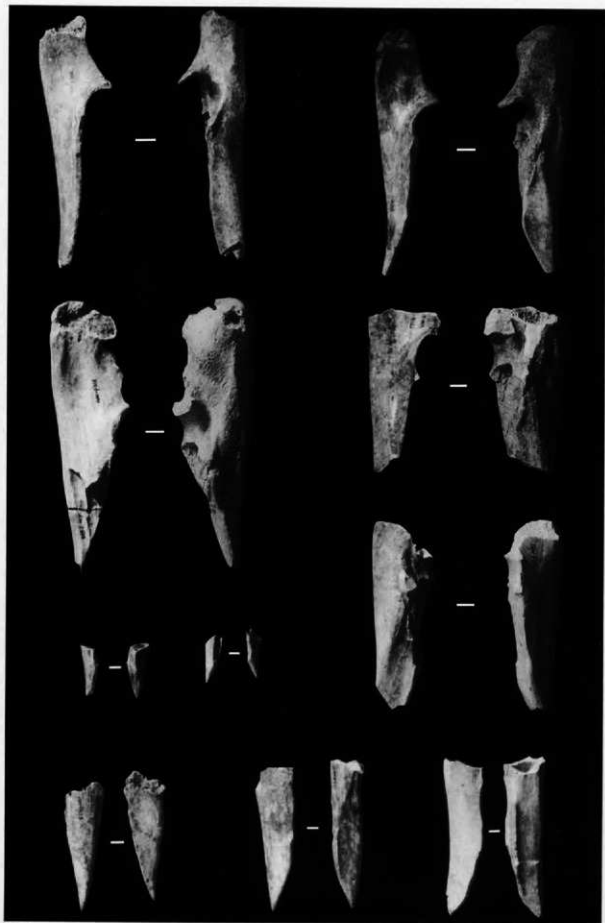
写真・65 イノシシ (骨・歯)



写真・66 イノシシ(尺骨)



写真・67 イノシシ(尺骨)



写真・68 イノシシ (尺骨)

室川貝塚

沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下
地区記録保存発掘調査の報告書

沖縄市文化財調査報告書第20集

1997年1月印刷

1997年1月発刊

発行 沖縄市教育委員会

沖縄市仲宗根町26-1

編集 沖縄市立郷土博物館

〒904 沖縄市字上地235番地3

TEL 098-932-6882

印刷 株式会社 沖産業

TEL 098-898-2191